

# 中国大学生「走近日企・感受日本」訪日団第27回訪日報告書

## 目次

報告書の刊行にあたって .....	1
中国日本商会社会貢献事業「走近日企・感受日本」寄付金申込社（者）一覧 .....	2
2024年度中国日本商会役員名簿 .....	3
2024年度社会貢献委員会委員名簿 .....	5
2024年度社会貢献委員会ワーキンググループ委員名簿 .....	6
徐賜明団長挨拶 .....	7
主催、共催団体の概要 .....	8
第27回中国大学生「走近日企・感受日本」訪日団 団員名簿 .....	9
第27回中国大学生「走近日企・感受日本」訪日団視察日程 .....	11
第27回中国大学生「走近日企・感受日本」訪日団視察先出席者リスト .....	12
<訪日記録>	
島津製作所（11/28）/ 担当：清華大学 .....	15
京都大学（11/28）/ 担当：清華大学 .....	19
茶道・座禅体験（11/29）/ 担当：對外經濟貿易大学 .....	22
ホテルニューオータニ（エコツアー）（12/2）/ 担当：中国石油大学 .....	27
中国大使館（12/2）/ 担当：北京語言大学 .....	30
住友商事（12/2）/ 担当：北京師範大学 .....	33
みずほ銀行（12/3）/ 担当：對外經濟貿易大学 .....	36
日比谷松本楼（12/3）/ 担当：北京師範大学 .....	41
一橋大学（12/3）/ 担当：北京語言大学 .....	45
ソニー（12/4）/ 担当：中国石油大学 .....	48
学生たちの感想文から .....	50
学生たちの観た日本 .....	68
学生たちの撮った写真 .....	90
第27回「走近日企・感受日本」中国大学生訪日活動メディア報道リスト（中国語のみ） .....	1

## 第 27 回中国大学生「走近日企・感受日本」 訪日団報告書の刊行にあたって

本書は、中国日本商会が実施する「走近日企・感受日本」事業の第 27 回訪日団報告書です。

本事業は、会員からの寄付金を原資に当会が中国人大学生を訪日視察へ招待派遣するもので、第 1 回が実施された 2007 年から今回までの間に合計 33 大学 815 名の学生が参加しました。

第 27 回訪日団は、2024 年 11 月 27 日から 12 月 4 日までの 8 日間、5 大学（清華大学、北京師範大学、对外経済貿易大学、中国石油大学、北京語言大学）から選抜した 25 名で編成され、各訪問先において貴重な交流と体験をし、無事に終了いたしました。

このたびの訪日では、京都、東京で島津製作所、ホテルニューオータニ東京、住友商事、みずほ銀行、ソニーの当会会員企業 5 社を訪問させていただいたほか、京都大学、一橋大学における日本の大学生との交流、中国大使館訪問、京都の名勝や日比谷松本楼の視察、一泊二日の日本の家庭へのホームステイ体験など、多彩なプログラムを実施しました。ホームステイの受入れにご協力いただいた企業数は 11 社にのぼっております。

このように、本事業は当会会員企業の多大なる協力の下に実施されています。これまでにご協力いただいた視察先は 64 機関、交流大学は 10 校、ホームステイのホストファミリーは延べ 594 家族にのぼります。また、共催団体である中国日本友好協会に全面的なご協力をいただくとともに、一般財団法人日中経済協会、中国友好和平発展基金会と公益社団法人企業市民協議会（CBCC）に適切な寄付金の管理を行っていただいております。改めて、本事業の実施にご支援、ご尽力をいただいているすべての関係者に厚くお礼を申し上げます。

本事業は、2020 年に発生した新型コロナウイルス感染拡大により中断を余儀なくされたものの、2023 年秋に再開することができました。今回派遣した 25 名の学生は、日本の企業活動や文化等に強い関心を持ち、引率者が声を掛けないとずっと続くのではないかと思うほど、行く先々での交流が極めて活発だったと聞いています。本事業に参加した中国の大学生、および彼らと交流した日本の大学生たちが、将来、日本との交流の懸け橋となり、さらに日中両国間の更なる交流促進のために活躍してくれることを、我々、中国ビジネスに関わる企業としても、心より期待しております。

中国日本商会としては、今後も、様々な取組を通じて、次代の中国を担う若者の日本との交流と理解促進を図ってまいり所存です。引き続きご理解とご支援を賜りますようお願い申し上げます。

中国日本商会 会長 本間哲朗

2024年12月

## 中国日本商会社会貢献事業「走近日企・感受日本」 寄付金申込社（者）一覧

### 【寄付金】600万円

1	アサヒグループホールディングス株式会社
2	伊藤忠商事株式会社 伊藤忠(中国)集团有限公司
3	日本製鉄株式会社
4	住友商事(中国)有限公司
5	東芝(中国)有限公司
6	トヨタ自動車株式会社
7	丸紅(中国)有限公司
8	みずほ銀行(中国)有限公司
9	三井物産(中国)有限公司
10	三菱商事株式会社
11	三菱UFJ銀行(中国)有限公司
12	三菱電機(中国)有限公司
13	日本航空株式会社
14	全日本空輸株式会社

### 【寄付金】250万円以上～600万円未満

1	キャノン(中国)有限公司
2	アルプス(中国)有限公司
3	住友化学投資(中国)有限公司
4	ソニー(中国)有限公司
5	中外製薬株式会社
6	テルモ(中国)投資有限公司
7	豊田通商株式会社 豊田通商(中国)有限公司
8	松下電器(中国)有限公司
9	三井化学株式会社
10	三井住友銀行(中国)有限公司
11	三菱化学控股管理(北京)有限公司

合計60社名

\*寄付金申込社(者)は寄付当時の企業名、  
個人の所属企業名を記入しています。

### 【寄付金】100万円以上～250万円未満

1	旭化成株式会社
2	株式会社IHI
3	岩谷(中国)有限公司
4	株式会社資生堂
5	JTBグループ(新紀元/JTB)
6	JXTG エネルギー株式会社
7	双日(中国)有限公司
8	東京海上日動火災保険株式会社
9	野村ホールディングス株式会社
10	北京電通広告有限公司
11	三井住友海上火災保険(中国)有限公司 三井住友海上火災保険公司 駐中国総代表処
12	匿名希望

### 【寄付金】1万円以上～100万円未満

1	日本農林中央金庫有限公司
2	AGC(中国)投資有限公司
3	宝酒造株式会社
4	東レ株式会社
5	あいおいニッセイ同和損保
6	大和証券株式会社
7	凸版印刷株式会社
8	豊田汽車金融(中国)有限公司
9	日立租賃(中国)有限公司
10	高橋修三(個人・長富宮飯店)
11	武田勝年(個人・元三菱商事)
12	熊琳(賛助会員)
13	株式会社ブリヂストン
14	米原佳彦(個人・阪和商貿)
15	世達志不動産投資顧問(上海)有限公司
16	JA 全農
17	日中経済協会
18	今村浩(個人・NTT DOCOMO China Co., Ltd)
19	コクヨ家具(中国)有限公司
20	ヤマハ発動機株式会社
21	稲葉雅人(個人・NTTデータ(中国)投資)
22	茶山秀一、岩城拓(個人・日本科学技術振興機構)
23	陳言(賛助会員)

## 2024年度中国日本商会役員リスト

2024年12月現在

	商会役職	氏名	会社名	役職
1	会長	本間 哲朗	パナソニックHD	副社長執行役員、中国・北東アジア社社長
2	特別顧問	小澤 秀樹	キヤノン	副社長執行役員、アジア社長、中国社長
3	副会長	近藤 修司	旭化成株式会社	執行役員、中国総代表
4	副会長	石橋 忠	伊藤忠	執行役員 東アジア総代表
5	副会長	上田 敏裕	AGC	執行役員
6	副会長	染矢 弘志	NEC	総裁
7	副会長	有友 晴彦	住友商事	常務執行役員 東アジア総代表
8	副会長	中原 伸二	全日本空輸	執行役員 中国総代表
9	副会長	上田 達郎	トヨタ自動車	執行役員 中国本部本部長
10	副会長	宮下 正己	日中経済協会	北京事務所 所長
11	副会長	桂 康久	日本製鉄	中国総代表
12	副会長	小野寺 修	日本貿易振興機構	北京事務所 所長
13	副会長	篠田 聡夫	丸紅	執行役員 中国総代表
14	副会長 (兼上海枠)	吉浦 賢哉	みずほ銀行	常務執行役員、みずほ銀行(中国) 行長・副董事長
15	副会長	宮本 諭	三井住友海上火災保険(中国)	北京分公司 総経理
16	副会長	徳谷 昌也	三井物産	執行役員 東アジア総代表
17	副会長	西野 裕史	三菱商事	執行役員 東アジア総代表
18	副会長	小柳津 裕	三菱電機	中国総代表
19	副会長	増井 憲	三菱UFJ銀行(中国)	副董事長
20	理事	亀倉 隆志	岩谷産業	専務執行役員 中国総代表
21	理事	岡田 勝紀	双日	執行役員 中国総代表
22	理事	濱田 明生	豊田通商	東アジア(東亜)総代表兼CEO
23	理事	内藤 憲治	阪和興業	執行役員 中国総代表、阪和(上海)管理 董事長・総経理
24	理事	大橋 悟	日鉄物産	常務執行役員・中国総代表・北京代表処首席代表
25	理事	金子 貢	ENEOS(北京)企業管理	ENEOS株式会社 東アジア総代表
26	理事	鄭 暁明	川崎重工管理(上海)	北京分公司 総経理
27	理事	三宅 正人	クボタ	北京事務所 首席代表
28	理事	岩田 宏之	コスモエネルギーホールディングス	北京代表処 首席代表
29	理事	氏家 道登	JFEエンジニアリング(北京)	総経理補佐
30	理事	新井 亨	東京電力	北京代表処 首席代表
31	理事	武田 清人	アルプスアルパイン(中国)	総経理
32	理事	堂園 憲治	NTT通信系統(中国)	北京分公司 総経理
33	理事	松崎 義雄	NTTデータ(中国)	董事長

34	理事	吉田 武司	ソニー(中国)	董事・総裁
35	理事	八木 隆雄	東芝	執行役員 中国・東アジア地区総代表、東芝(中国) 董事長・総裁
36	理事	森岡 秀	北京凱迪迪愛通信技術	KDDI中国董事長 総経理
37	理事	明田 篤弥	日立製作所	執行役常務 中国総代表
38	理事	川又 陽	富士通(中国)	董事長兼総経理
39	理事	西岡 昌平	ibg上海(インターブリッジグループ上海)	董事長兼総経理
40	理事	押川 宣比古	国誉家具(中国)	総経理
41	理事	佐々木 要	資生堂麗源化粧品	総経理 董事
42	理事	堀越 勝彦	住友化学投資(中国)	董事長総経理
43	理事	保利 周司	東レ(中国)投資	北京分公司 総経理
44	理事	鈴木 源司	富士フイルム(中国)投資 北京分公司	医療事業本部 本部長
45	理事	福井 真人	北京塩野義医薬科技	総経理
46	理事	檜森 雅史	三井化学	理事 中国総代表
47	理事	辻前 正史	三菱化学(中国)管理	企画調整部部門長
48	理事	中川 裕介	あいおいニッセイ同和損害保険	駐中国総代表処 中国総代表
49	理事	李 永梅	日本生命	北京事務所 首席代表
50	理事	小池 一徳	日本銀行	北京事務所 首席代表
51	理事	宋 曉晨	瑞穂証券	北京代表処 首席代表
52	理事	和田 智岳	三井住友銀行(中国)	副社長 北京支店長
53	理事	中西 信治	三菱UFJ信託銀行	北京駐在員事務所 首席代表
54	理事	下小野田 恒	NXグループ	社長 兼 NXグループ中国代表
55	理事	小枝 直仁	日本航空	常務執行役員 中国総代表
56	理事	黒坂 宣紀	日本郵船	中国総代表
57	理事	清酒 昭吉	イトーヨーカ堂(中国)投資	総経理
58	理事	島田 克己	上海佳途国際旅行社	総経理
59	理事	小金井 英生	世達志不動産投資顧問(上海)	董事長
60	理事	高橋 剛志	西科姆(中国)	董事長・総経理
61	理事	小池 仁	長富宮中心	総支配人
62	理事	伊藤 広貴	北京電通広告	董事 総経理
63	理事	近田 年史	北京首開野村不動産管理	董事 総経理
64	理事	土田 周司	日本国際貿易促進協会	北京事務所 所長・首席代表
65	理事	林田 弘徳	KPMG	パートナー グローバル・ジャパニーズ・プラクティス中国総代表
66	理事	平山 淳也	理光(中国)投資	華北日系営業部統括
67	理事	稲田 義之	サントリー(中国)投資	北京事務所 所長
68	監事	岡 良夫	監査法人トーマツ	中国華北地域日系企業サービスグループ統括パートナー
69	監事	北川 善彦	国際協力銀行	北京事務所 首席代表

## 2024年度 社会貢献委員会委員名簿

2024年12月現在

	氏 名 (会社名・役職)
社会貢献委員長	有友 晴彦 (住友商事 常務執行役員 東アジア総代表)
委員	本間 哲朗 (パナソニックHD 副社長執行役員)
委員	小澤 秀樹 (キャノン 副社長執行役員、キャノンアジア総代表、キャノン中国 社長)
委員	近藤 修司 (旭化成 執行役員 中国総代表))
委員	石橋 忠 (伊藤忠 執行役員 東アジア総代表)
委員	上田 敏裕 (AGC 執行役員 中国総代表)
委員	染矢 弘志 (NEC(中国) 中国総代表 総裁)
委員	中原 伸二 (全日本空輸 執行役員 中国総代表 北京支店長)
委員	上田 達郎 (トヨタ自動車 執行役員、中国本部本部長)
委員	宮下 正己 (日中経済協会 北京事務所 所長)
委員	桂 康久 (日本製鉄 参与 中国総代表 北京事務所長)
委員	小野寺 修 (日本貿易振興機構 北京事務所 所長)
委員	篠田 聡夫 (丸紅 執行役員 中国総代表)
委員	吉浦 賢哉 (みずほ銀行 常務執行役員)
委員	宮本 諭 (三井住友海上火災保険(中国)北京分公司 総経理)
委員	徳谷 昌也 (三井物産 執行役員 東アジア総代表)
委員	西野 裕史 (三菱商事 執行役員 中国総代表)
委員	小柳津 裕 (三菱電機 中国総代表)
委員	増井 憲 (三菱UFJ銀行(中国)副董事長)
委員	小枝 直仁 (日本航空 常務執行役員 中国総代表)
委員	島田 克己 (JTB上海佳途国際旅行社 北京分社 総経理)

## 2024年度社会貢献委員会ワーキンググループ委員名簿

2024年12月現在

会社名	氏名	役職
【社会貢献委員長】	有友 晴彦	住友商事 常務執行役員 東アジア総代表
【社会貢献WG座長】	宮下 正己	日中経済協会 北京事務所 所長
伊藤忠(中国)集团有限公司	津元 佳比古	東アジア総代表付
キャノン(中国)有限公司	金子 裕介	高級総経理
JTB上海佳途国際旅行社有限公司北京分社	島田 克己	総経理
住友商事(中国)有限公司	猪鼻 亮佑	法務部
全日本空輸 北京支店	山路 聡史	中国統括室総務兼営業 高級経理
東芝(中国)有限公司	西井 一	総裁室長
トヨタ自動車 中国事務所	西澤 学	所長
日中経済協会	清水 綾	所長代理
日鉄諮詢(北京)有限公司	釣 誠太郎	管理室 室長
日本航空 北京支店	中西 美貴	北京支店 経理
日本貿易振興機構 北京事務所	山本 諭	副所長
日立(中国)有限公司	吹金原 剛	政府事務・グループ事業推進部 総経理
松下電器(中国)有限公司	中村 正人	中国北東アジア総代表室 顧問
丸紅(中国)有限公司	徳永 貴司	中国副総代表
みずほ銀行(中国) 北京支店	滝口 和孝	副支店長
三井物産(中国)有限公司	平澤 拓	戦略企画部 副部長
三菱商事(中国)商業有限公司	池田 敦	総経理室 室長
三菱電機(中国)有限公司	金子 勝利	渉外役 中国輸出管理室室長
三菱UFJ銀行(中国) 北京支店	近藤 広樹	支店長代理
【事務局】	森 挙一	中国日本商会事務局長
【事務局】	塩谷 倫子	中国日本商会事務局員
【訪日中のアテンド等】	信澤 健夫	日中経済協会(東京)総務部 部長
	横井 邦弘	日中経済協会(東京)総務部 主任

## 第27回「走近日企・感受日本」中国大学生訪日代表団報告書 団長挨拶

中国日本商会ならびに日中経済協会からのお招きに応じ、2024年11月27日から12月4日にかけて、第27回「走近日企・感受日本」中国大学生訪日代表団一行は8日間の日本訪問を行いました。日本の経済界が支援する2007年から始動した青少年交流事業である「走近日企・感受日本」中国大学生訪日事業は、その客観性・緊密性・友好的・実践的との特色から中日青少年交流における有名ブランドとして関係各方面より高い評価を頂いております。ここに、中国日本商会、日中経済協会、各友好企業及び関係各方面の皆様のご長年にわたる同事業推進に対するご努力に敬意を表すると共に心より感謝申し上げます。

今回の代表団は清華大学、北京師範大学、對外経済貿易大学、中国石油大学及び北京語言大学の優秀な学生25名により構成されております。関係各方面による行き届いた段取りの下、代表団は日本滞在期間中、大阪、京都及び東京等の地に赴き、島津製作所、住友商事、みずほ銀行、ソニー、ホテルニューオータニ東京等の有名日本企業への訪問、京都大学や一橋大学の学生との友好交流の他、日比谷松本楼では偉人の功績について拝聴し、中華人民共和国駐日本国大使館経済商務処への表敬訪問を行うと共に中国日本商会の会員企業の従業員宅においてはホームステイを体験いたしました。関係各方面による行き届いた段取りにより、代表団の学生らは本当の意味で日本社会そして日本企業への知見を深め、日本企業の進んだ技術や経営管理理念及び伝統文化を目の当たりにしたなど多くの収穫が得られ、またさらに日本の同年代の若者との友情を育んだことで両国の平和友好事業における使者そして懸け橋となることが期待されるなど、今回の日本訪問は大成功を収めることができました。

中日両国は互いに重要な隣国であり、2000年以上にわたる交流の歴史においては平和そして友好が常に主流であり、それはまた両国の人々の共通した願いでもあります。先頃、習近平国家主席はペルー・リマでのAPEC非公式首脳会議期間中に石破茂首相と会談し、双方が戦略的互惠関係の全面的推進及び建設的で安定的な両国関係の構築に向け共に努力していく旨を改めて確認した他、ハイレベルの往来の維持、経済・貿易、人文、地域等の分野における交流や協力の強化に関し両首脳が合意するなど中日関係の発展及び両国の交流や協力における方向性を明確に示しております。

中日友好の基盤は民間に、未来は青少年にあります。私たちは今後も中国日本商会、日中経済協会及び関連日本企業と志を同じくし、「走近日企・感受日本」中国大学生訪日事業等の一連の事業を確実に遂行することで、青少年の友好の懸け橋をこれまで以上に構築し、より多くの中日の青少年が触れ合いそして関係を深め、手を携え共に歩み、両国の友好における新たな世代の使者そして中核となるよう後押ししていく所存であります。

最後に、今回の代表団の日本訪問に際して多大なご支援を頂いた中国日本商会、日中経済協会及び各関連企業、大学、機構そして中日友好にお力添え頂いた皆様に改めまして心より感謝申し上げます。

第27回「走近日企・感受日本」中国大学生訪日代表団 団長  
中国友好和平発展基金会秘書長  
徐賜明

2024年12月吉日

## 主催、共催団体の概要

### 中国日本商会

在北京企業の円滑な事業活動を支援するとともに、日中間の経済交流の活発化を通じて、日中友好を促進することを目的として、1980年10月に設立された北京日本商工クラブを前身とする。中華人民共和国国務院令第36号「外国商会管理暫行規定」に基づき認可された外国人商工会議所の第1号として、1991年4月22日に設立された。

会員数は、2024年12月末日現在、市内法人会員438社、市外法人会員83社、個人会員9名、賛助会員10名の合計540社(名)を擁している。

### 中国日本友好協会

1963年に中華全国総工会、中国人民外交学会など19の民間団体によって発起設立された、中国における最も代表的な対日民間友好組織である。創立以来、周恩来総理の提唱の下で積極的に対日友好交流活動を展開し、1972年の中日国交正常化と1978年の中日平和友好条約の締結においては大きな貢献を果たした。政治、経済、文化、スポーツなどの各分野で対日友好交流事業を強力に展開し、健全で安定的な両国関係の推進に重要な役割を果たしている。

### 中国友好和平発展基金会

中国人民対外友好協会の下部組織として、1996年に設立された。各国との友好増進、国際協力の推進、世界平和、共同発展を主旨とし、世界平和と人類の進歩に貢献するため、中国と海外各国との友好事業を始め、文化、教育、医療衛生、環境保護、スポーツ、経済、貧困支援などの数多くの分野で社会的公益活動を行っている。

### 一般財団法人日中経済協会

経済産業省を始めとする日本政府及び日本経済団体連合会他経済界の支援の下に、日本と中国との経済交流促進のため、1972年に設立された。

## 第27回中国大学生「走近日企・感受日本」訪日团团員名簿

	氏名	性別	所属	学部・学科	専攻
团长	徐賜明	男	中国友好和平發展基金会 秘書長		
秘書長	李 琨	男	中日友好協會政治交流部 副部長		
团员	邵瑞超	男	清華大学	致理書院	生物科学
团员	王婉琳	女	清華大学	致理書院	物理学
团员	熊宝博	男	清華大学	致理書院	物理学
团员	袁嘉惠	女	清華大学	致理書院	生物科学
团员	張恒睿	男	清華大学	致理書院	信息・計算科学
团员	劉夢楠	女	北京師範大学	外国語言文学学院	日語(日本語言文学)
团员	杜佩桐	女	北京師範大学	外国語言文学学院	日語
团员	安 懿	女	北京師範大学	外国語言文学学院	日語
团员	楊宇軒	女	北京師範大学	外国語言文学学院	日語
团员	李 珂	女	北京師範大学	外国語言文学学院	日語
团员	汪婧儀	女	对外經濟貿易大学	外語学院	日語
团员	肖瑩盈	女	对外經濟貿易大学	外語学院	日語
团员	馬莉婭	女	对外經濟貿易大学	外語学院	日語
团员	江嘉鎧	男	对外經濟貿易大学	外語学院	日語
团员	喬 彬	男	对外經濟貿易大学	外語学院	日語
团员	賀雨欣	女	中国石油大学	人工智能学院	計算機科学・技術
团员	王毅竜	男	中国石油大学	人工智能学院	電子信息工程
团员	肖金雪	女	中国石油大学	人工智能学院	計算機科学・技術
团员	林星翰	男	中国石油大学	機械・儲運工程学院	機械設計制造・自動化
团员	陳依揚	女	中国石油大学	機械・儲運工程学院	機械設計制造・自動化
团员	鄭小芳	女	北京語言大学	東方語言文化学院	日語
团员	楊蘊涵	女	北京語言大学	東方語言文化学院	日語
团员	李浩楊	男	北京語言大学	東方語言文化学院	日英復語
团员	金百川	男	北京語言大学	東方語言文化学院	日語
团员	楊思思	女	北京語言大学	東方語言文化学院	日英復語
事務局	劉宏偉	女	中国友好和平發展基金会綜合管理部 副主任		
事務局	曾広明	男	中日友好協會政治交流部 職員		

## 第27回中国大学生「走近日企・感受日本」訪日団視察日程

日次	日付	日程	宿泊
1	11/27 (水)	<b>NH980 北京首都14:25→関西国際空港18:25</b> 19:40～20:40 関西空港近辺で夕食 20:40～21:40 夕食場所～ホテルへ移動 21:40頃 ホテル着	サニーストーンホテル 大阪府吹田市広芝町 10-3 TEL 06-6386-0001
2	11/28 (木)	08:00 ホテル発 <b>09:00～12:00 ●企業訪問（島津製作所）</b> 12:00～13:30 移動&昼食 <b>13:30～19:30 ■大学交流（含む懇親会）京都大学</b> 20:00頃 ホテル着	モクシー京都 京都市中京区西ノ京南 聖町12 TEL 075-801-2200
3	11/29 (金)	8:30 ホテル発 <b>★ソフト文化視察①京都</b> <b>09:00～11:00 茶道体験及び座禅体験</b> <b>11:00～12:00 高台寺拝観</b> 12:30～13:30 京都駅近辺にて昼食 <b>14:33京都→16:38小田原 ひかり654</b> 17:30 箱根湯本温泉着 <b>★温泉体験</b> <b>夕食：温泉旅館和式宴会場にて懇親会（各大学による出し物披露）</b>	箱根湯本温泉 天成園 神奈川県足柄下郡箱根 町湯本682 TEL 0460-83-8511
4	11/30 (土)	8:00 ホテル発 都内へ移動 10:00頃～ ニューオータニでホームステイファミリーと対面 <b>学生ホームステイ</b>	学生：ホームステイ 引率者：東京ホテル ニューオータニ 東京都千代田区紀尾井 町4-1 TEL 03-3265-1111
5	12/1 (日)	<b>夕方まで学生ホームステイ</b> 夕方 ホテル集合、東京都内自由行動	東京 ホテルニューオータニ
6	12/2 (月)	<b>09:30～11:30 ●企業訪問（ニューオータニ エコツアー）</b> 12:30～13:30 昼食 <b>14:30～15:30 ●中国大使館訪問（場所：経済商務処）</b> <b>16:30～20:00 ●企業訪問（住友商事（含む懇親会））</b> 20:30 ホテル着	東京 ホテルニューオータニ
7	12/3 (火)	8:30 ホテル発 <b>9:00～10:30 ●企業訪問（みずほ銀行）</b> <b>11:15～13:00 ★ソフト文化視察②日比谷松本楼（含む昼食）</b> <b>14:00～19:00 ■大学交流（含む懇親会）一橋大学</b> 20:00 ホテル着	東京 ホテルニューオータニ
8	12/4 (水)	8:45 ホテル発 <b>9:30～11:30 ●企業訪問（ソニー）</b> <b>12:00～13:45 フェアウェルパーティー（関係者参加）</b> <b>【ホテルニューオータニ 宴会場】</b> 14:00 ホテル発 羽田空港へ移動 15:00 羽田空港着 NH963 東京羽田17:25→北京首都20:35	

## 第27回中国大学生「走近日企・感受日本」訪日団視察先出席者リスト

### 1. 島津製作所

木戸 信幸 株式会社島津製作所 人事部人財開発室 副室長  
鄒 森 株式会社島津製作所 営業本部営業推進ユニット

### 2. 京都大学

國府 寛司 京都大学 理事・副学長  
河合 淳子 京都大学 教授  
韓 立友 京都大学 准教授  
若松 文貴 京都大学 准教授  
道上 初美 京都大学 国際・共通教育推進部 留学生支援課 課長  
内藤 宏次朗 京都大学 国際・共通教育推進部 留学生支援課 掛員  
大島 美花 京都大学 国際・共通教育推進部 留学生支援課 特定職員  
溝口 有美 京都大学 国際・共通教育推進部 留学生支援課 派遣職員  
京都大学生 花俣理津君 他

### 3. ホテルニューオータニ

内藤 洋介 株式会社ニュー・オータニ 宿泊営業部宿泊営業二課 統括マネージャー  
横山 千香子 株式会社ニュー・オータニ 宿泊営業部宿泊営業二課  
セールスマネージャー  
中林 雅夫 株式会社ニュー・オータニ ファシリティマネジメント部  
ファシリティマネジメント課 課長代理  
長嶋 文悠 株式会社シービーエス ホテルニューオータニ管理所 副所長  
片山 隆雄 株式会社ニュー・オータニ 関西営業所 係長

### 4. 中国大使館

郭 強 経済商務処 参事官  
馮 軍南 経済商務処 三等書記官

### 5. 日比谷松本楼

虫賀 武 営業本部 部長

### 6. 住友商事

加藤 洋 住友商事株式会社 サステナビリティ・DE&I推進グループサステナビリティ推進部長  
内貴 淳史 住商グローバルリサーチ株式会社 経済部長  
孫 林 住友商事株式会社 自動車グループモビリティサービスSBUフリートマネジメント事業ユニット  
大越 陸 住友商事株式会社 資源グループ鉄鋼原料・炭素SBU/鉄鋼G×SBU  
鉄鋼原料ユニット  
周 嘉暘 住友商事株式会社 都市総合開発グループ不動産SBU住宅事業ユニット

飯塚 秀之	住友商事株式会社	企画グループグローバル戦略推進部
越智 幹文	住友商事株式会社	企画グループグローバル戦略推進部
青山 日向子	住友商事株式会社	企画グループグローバル戦略推進部
吉村 菜那	住友商事株式会社	企画グループグローバル戦略推進部
宇野 可依	住友商事株式会社	人・総・法グループHRソリューション部
下司 健太郎	住友商事株式会社	財・経グループ財務部
李 在雄	住友商事株式会社	金属グループCFOオフィス
曹 雨楠	住友商事株式会社	輸送機・建機グループ建機ソリューションSBU 建設・鉱山機械第二ユニット
原口 友輔	住友商事株式会社	資源グループ非鉄金属SBU非鉄金属原料ユニット
川上 望	住友商事株式会社	資源グループ鉄鋼原料・炭素SBU鉄鋼原料ユニット
佐々木 友也	住友商事株式会社	資源グループ鉄鋼原料・炭素SBU炭素ユニット
木村 優介	住友商事株式会社	EXグループ EIISBU森林資源事業ユニット
趙 涛	住友商事株式会社	企画グループグローバル戦略推進部
樫本 浩	住友商事株式会社	サステナビリティ・DE&I推進グループサステナビリティ推進部
秋元 浩一	住友商事株式会社	サステナビリティ・DE&I推進グループサステナビリティ推進部
内田 真紀	住友商事株式会社	サステナビリティ・DE&I推進グループサステナビリティ推進部

## 7. みずほ銀行

松田 由己	株式会社みずほ銀行	中国営業推進部	次長
手嶋 徹也	株式会社みずほ銀行	中国営業推進部	執行理事
王 博	株式会社みずほ銀行	中国営業推進部	
黄 穗冰	株式会社みずほ銀行	中国営業推進部	
趙 婧	株式会社みずほ銀行	中国営業推進部	
小川 隆那	株式会社みずほ銀行	中国営業推進部	
早河 優子	株式会社みずほ銀行	中国営業推進部	調査役
劉 知真	株式会社みずほ銀行	中国営業推進部	
佐藤 亜紀子	株式会社みずほ銀行	中国営業推進部	
稲富 まな美	株式会社みずほ銀行	中国営業推進部	
立花 千代	株式会社みずほ銀行	中国営業推進部	

## 8. 一橋大学

屋敷 二郎	一橋大学	副学長(グローバル連携担当)	
南 裕子	一橋大学	大学院経済学研究科	准教授・中国交流センター代表
伊豆 朗子	一橋大学	学務部教務課	課長代理(留学生総括担当)
二口 隆春	一橋大学	中国交流センター	
一橋大学生		応嘉宝君 他	
中央大学生		平山舞歩君 他	
瀬川 拓		如水会北京支部	元会長

## 9. ソニー

馬 雪潼	ソニーグループ株式会社 中国総代表室 シニアマネージャー
梁 藹文	ソニーグループ株式会社
于 海倫	ソニーグループ株式会社 ソニー・インタラクティブエンタテインメント(SIE)
楊 馨逸	ソニーグループ株式会社 ソニー・インタラクティブエンタテインメント(SIE)

# 科学技術で社会に貢献する——テクノロジー企業の迎合しない革新の秘訣

清華大学学生代表

見学日時：2024年11月28日（木）9:00-12:00

見学場所：島津製作所本社

## 見学概要

島津製作所は1875年創立の、京都市に本社を構える150年近い歴史を持つテクノロジー企業である。創立当初、島津製作所は教育用科学機器の製造に特化していたが、時代の推移に伴い、製品ラインナップを分析計測機器、医療機器、産業機械、航空機器等多くの分野にまで次第に拡充している。島津製作所は技術革新において優れた成果を挙げており、特に質量分析計や液体クロマトグラフ等の精密分析機器の研究開発においては世界的に名を馳せている。島津製作所は私たち訪日団一行が訪問した最初の企業であり、2025年3月には創業150周年を迎える。このような時期に同社の見学ができたことをとても光栄に思っている。

千年の古都、京都の朝の光景の中、私たちは島津製作所を訪れた。そして人事部人財開発室副室長、中国人職員1名及びその他の職員から熱烈な歓迎を受けた。私たちの見学内容は主に会社概要の紹介、KYOLABSとサイエンスプラザの見学及び島津の森の見学との3つの部分に分かれていた。



まず島津製作所の職員から同社の概況及び中国での事業展開について紹介があった。島津製作所の売上高に占める割合においては分析計測機器が66%と最も多くなっている。また中国は島津製作所にとって最大の海外市場で、全体の売上高の19%を占めている。島津製作所の社是は「科学技術で社会に貢献する」、経営理念は「『人と地球の健康』への願いを実現する」であり、同社はトータルヘルスケア、環境配慮素材、環境保護等の分野における製品開発に力を入れているなど会社の社是をとても良く体現している。また島津製作所は中国とも所縁が深く、1956年には中国で開催された日本商品見本市に参加し、1973年には上西亮二社長（当時）が周恩来総理（当時）

と会見したことを契機に、中国における島津製作所の事業は大きな発展を遂げた。そして現在では、島津製作所は世界の各主要都市に事務所を開設している他、多くの都市に製造拠点や研究開発機関を設置するなど、その事業は様々な分野や業界に幅広く浸透している。

その後、私たちは職員の引率の下で同社の共創施設である KYOLABS を見学した。ここには島津製作所の中核技術である分離分析技術及び画像形成技術が展示されていた。またここでは自身の提携パートナーと研究や協力に関する意見交換が可能であると同時に、提携パートナーとのさらなる研究や探究をするための空間を提供していた。それ以外にもここにはさらに分離の原理を応用し設計された芸術作品が展示されていた。

次いで私たちは「島津の森」を訪れた。島津製作所は地球環境及び生物多様性の保全をコンセプトに、本社敷地内に森を整備している。ここには 100 種類以上、合計 1000 本以上の草木が植栽されており、一部の草木は京都独自のものとなっている。これらの草木は本社周辺の緑地帯であり、多くの野生の昆虫や鳥を引き寄せている。



それから私たちはサイエンスプラザを訪れた。ここには島津製作所の製品が数多く展示されていた。様々な高精度の質量分析計、クロマトグラフ等の分析計測機器以外にもトータルヘルスケア、環境保護関連の製品が数多く展示され、これらの製品を利用することで、例えば DNA、RNA の検査及び比較対照による食品産地の判断、食品の関連指標の検査による食品の食感や栄養成分の調整、ハイスピードカメラで撮影した水風船の爆発の瞬間の映像など多くのユニーク且つ実用的な機能の実現が可能になっている。階下にはまた医療用 X 線装置の展示スペースがあり、様々なシーン用に設計された複雑或いは機動的な X 線検査装置を私たちは目にした。



金属成分検査装置による某団員の金製アクセサリーの検査結果

### ご存じですか？

問：食事の際にどのような順序で食べると肌の状態をより良く保つことができるのか？

答：まずは野菜、それから肉、米を食べ、そして最後にスープを飲むのが望ましい。これは消化しにくいものからしやすいものという順序となっている。野菜には多くのセルロースが含まれており人体における消化がしにくいことから、先に野菜を食べることで満腹感が高まり胃腸の活動を促進する他、血糖も下げることができる。（KYOLABS内には肌の状態を診断する装置があり、3名の団員が検査したところ、2名がC、1名がBとの結果であった。この装置の原理は、血糖の蓄積に伴い肌のハリが失われ老化することから、関連の指標を検査することで肌の状態を診断するというものである。島津製作所の職員からは、A評価を受ける人は極めて少なく、東アジアの人の診断結果は概ね欧米人よりも良いとお話があった。そして最後に上述の食事における順序についての紹介があった。）

問：島津製作所は世界各地に研究開発機関を設けているが、それぞれの研究開発機関における研究をどのように取りまとめることで新製品の開発を進めているのか？

答：異なる国や地域に研究開発機関を設立している主な目的は、現地のクライアントの特別なニーズを可能な限り満たすためである。政府の規定や市場の状況はそれぞれの地域で異なるため、現地の顧客のニーズや政府の要求をより満たすためには、研究開発業務を現地の研究開発者に任せる方が良い。各地域での研究に関しては共通する部分又は相通ずる部分も多く、これらの研究は本社に集められ、その後本社がリソースを分配することで研究の実施や新製品の開発を推し進めている。

問：活気に溢れた企業である島津製作所が最も必要とするのはどのような人材なのか？

答：島津製作所が最も重視するのは求職者自身の能力ではなく、例えば島津製作所の「科学技術で社会に貢献する」との社是に対し十分な共感をしているか、島津製作所で長く働く計画があるのかといった人材と企業がどれ程合っているかとの点である。企業が最も必要とするのは長く定着できる人材であり、その次に能力や特技を基にそれぞれの部署へ配置される。ちなみに、日本企業では中国でも流行っているMBTIのような性格診断をとても重視している。

## 感想

島津製作所が守っている中核的理念「科学技術で社会に貢献する」に強い感銘を受けた。現在のこの目まぐるしく変化する、複雑で変化に富んだ世界情勢において、大型の科学研究機関がこうした初心を守り続けているのは並大抵のことではなく、この点は間違いなく私たちが学ぶべきそして再認識すべきものとなった。島津製作所の輝かしい歴史の道程を振り返ると、代々の島津の人々は初心を忘れず、懸命に科学研究における最高峰を追求しており、100年以上前の有人軽気球の独自開発との快挙から、その後沢山生まれた日本初ひいては世界初の研究成果、そして2002年に田中氏がノーベル化学賞を受賞する輝かしい瞬間に至るまで島津製作所は歩みを停めることなく、常に発展、ブレイクスルーそして超越を続けていた。また、科学研究やイノベーションの促進において島津製作所が採用しているオープン型の技術革新モデルも印象的だった。島津製作所は協働、共有、共創との研究開発環境の構築に力を入れており、実験プロセスを可視化そしてオープン型にすることで、より多くの有志を科学研究協力への参加に呼び込み、そして共同で科学研究の進歩と発展を推し進めるよう呼び掛けていた。団員の中で夏休み期間にケンブリッジ大学の分子生物学研究所 LMB や Francis Crick Institute 等の生物科学分野におけるトップの研究機関を見学した人がいたが、そこでも同様に研究者間の交流と協力がとても重視され、特に異なる分野間の交流と融合が推奨されていたとのことで、こうした垣根を越えた協力の精神は間違いなく科学研究を推し進める重要な力であると言える。

# 自由の学風を継承する京都大学

清華大学学生代表

見学日時：2024年11月28日（木）13:30-19:30

見学場所：京都大学

## 見学概要

訪日2日目、私たちは日本で最も歴史がありまた著名な大学の1つである京都大学を訪れた。

まず初めに、京都大学の学生の引率の下でキャンパスを見学した。大学正門の奥のシンボルともいえるクスノキはすでに87年の歴史があり、成長は遅くとも枝や葉が茂っている様は学術の道においては着実な努力があつて初めて成果を挙げることができるとの点を象徴している。また歴史展示室の展示品は同大学の悠久の歴史を物語っており、創立から120年余りにわたり無数のトップ人材を育成するなど、「科学者のゆりかご」として称賛されている。今はちょうど深秋の時期であることから、キャンパスの景色も特別な趣があつた。



次いで、私たちは韓立友准教授による特別講座を拝聴した。韓准教授からは京都大学の自由の学風及び研究に没頭するとの伝統について詳しい紹介があり、私たちは京都大学の精神や文化について知ることができた。また韓准教授は自身のγ-グルタミルトランスペプチダーゼに関する研究について紹介をし、多くの団員の興味を引いていた。

その後、私たちは弁論交流を行った。弁論テーマは「教育における女性へのサポート提供には逆差別をもたらすリスクがあるのか」というものだった。私たちは京都大学の学生らとたくさん意見交換をし、互いの社会における現状や文化について知見を深めることができた。最終的に、肯定側と否定側の双方は、性別による不平等は私たちの社会において依然として存在しているため、教育においては女性へのサポートを行うべきであり、それにより女性の地位が男性を上回るとの事態は全体としてみれば生じないが、個別の事例においては逆差別をもたらす可能性があるとの共通認識を得た。また弁論の終了前に私たちは別の英語グループの学生らと討論の結果を交換した。



夜の懇親会ではより気軽な小グループでの踏み込んだ交流をすることができた。私たちは午後の一と時を共に過ごしていただけだったが、お別れの際はとても名残惜しかった。



### ご存じですか？

1. 京都大学のエンブレムは1本の巨大なクスノキがモチーフになっている。このクスノキは1935年に京都大学吉田キャンパスに植えられたと推測され、現在まですでに90年近い歴史がある。このクスノキには深い意味合いがあり、クスノキは着実に成長する樹木で、たとえ成長速度が遅くとも常に成長を続けるため、学問や人生におけるプロセスもこのクスノキの成長に例えられる。そして人の成長には時間が必要だが、常に成長し続けることで、いつかは空高くそびえる大木のように成長することができることを表している。
2. 2024年時点で、京都大学はすでに1949年の物理学賞受賞者の湯川秀樹（日本人初のノーベル賞受賞者）を始め、朝永振一郎（1965年物理学賞）、江崎玲於奈（1973年物理学賞）、福井謙一（1981年化学賞）、利根川進（1987年生理学・医学賞）、野依良治（2001年化学賞）、山中伸弥（2012年生理学・医学賞）、赤崎勇（2014年物理学賞）、本庶佑（2018年生理学・医学賞）、吉野彰（2019年化学賞）を含めた10名のノーベル賞受賞者を輩出している。また驚くべきは、日本における自然科学分野のノーベル賞受賞者の最初の3名はいずれも京都大学出身であり、彼らの住まいも京都大学近くにあり、その中でも湯川秀樹と朝永振一郎は同級生であった。ノーベル賞やフィールズ賞等の重要な賞の受賞状況から見て、京都大学は学術研究分野において間違いなく強大な実力を備えており、この点については京都大学の自由で独立した学風、学術研究における様々な方向性への寛容さそして科学者による自身の分野における長年の研究と切り離せないものだと言える。

## 感想

午後の訪問により、私たちは京都大学の自由で独立した学風へのたゆまぬ追求を感じたと同時に、大学は学生と教員が主体となり、学生に対し様々な分野で自由に成長する空間を提供すると共に、研究者が興味のある分野で探求する上での確かなサポートを提供すべきであるとの、日本がここ 30 年間に於いてノーベル賞受賞者を多く輩出している理由についても垣間見ることができた。現時点で一見するとクレイジーな現実的ではない発想も将来的に世界を変える力を持つかもしれない、また一見目立たない些細な発見も将来的に新世界の門を開くかもしれない。理系学生である私は今回の京都大学への訪問から、自分は一体どのような研究をしたいのか、注目を集める分野を研究するのか、それとも最も困難の伴う課題について探求するのかについてしっかりと考えるべきだと感じた。私たちの現時点の努力や変化はあまり大きな波を引き起こすことはないかもしれないが、京都大学の正門にあったクスノキのように一年一年着実に成長することで、私たちはいずれそれらが実る日を迎えることができると確信している。

## 茶道と座禅——「静」の中で時間の流れを悟る

対外経済貿易大学学生代表

見学日時：2024年11月29日（金）9:00-12:00

見学場所：京都座禅・茶道体験、高台寺

### 見学概要

バスは明け方の鴨川や京都の道沿いに林立する老舗のお店を駆け抜け、荘厳且つ静まり返った高台寺に到着した。



住職からはまず「丹田呼吸」即ち「腹式呼吸」について説明があった。皆は胡坐をかいたが、こうした姿勢は安定した三角形をつくることのできることであった。私たちは両手を組み丹田の位置に軽く置き、住職の指示に従い視線を自分の1メートル先の地面に固定し、脳内の雑念を払い自分自身の呼吸に集中し瞑想状態に入った。2回の座禅体験の後、皆は丹田呼吸と瞑想がある程度できるようになった。質疑応答では皆が積極的に質問していた。座禅の際は必ず丹田呼吸でなければならないのかとの点に関し、住職からは丹田呼吸が望ましいとお話があった。さらに自分がどこに居ようとも、毎日少しの時間でも瞑想することで自分の心に大いに役立つことのできることであった。



座禅体験が終わると、すぐに茶道体験のコーナーとなった。先生は優雅に粛々と茶器の手入れ方法や抹茶の点て方を披露した。そして点てた最初のお茶は仏様に捧げるものと皆に説明し、一杯目のお茶を点てた後、先生は傍の仏像の前にある台に茶碗を置いた。



その後、先にやってきたのはお茶菓子であった。先生の説明では、私たちの目の前の小皿に置かれたのは甘い干菓子と私たち中国大学生訪日団を表した青色のシンボルであるとのことであった。そして「お茶をいただく前のお菓子として干菓子をお召し上がりください」と伝えられた。また青色のシンボルの裏は両面テープになっていて、洋服に付けることができた。



やや甘めのお茶菓子を食べ終わると、茶室内の女性らができたての抹茶が入った茶碗を運んできた。そして先生からは、茶碗を持ち上げ左手にのせ、右手で茶碗を回し茶碗の模様や色を觀賞した後にお茶をいただき、飲み終わった後は飲み口部分をきれいに拭き取り、再び茶碗を回し元の位置に戻す、とのお茶のいただき方の説明があった。



### ご存じですか？

問：微動だにせず座禅を組んでいると眠くなるが、僧侶の方々は座禅を組んでいる時に眠ったりしないのか？

答：「座禅の時に眠くなるのは正常なことです、私たちは自分が眠らないようにしています」と住職は笑顔でそう述べた。そして住職はとても大きな警策を取り出し、「座禅の時に集中力が保てない、もしくは心に雑念がある場合は、住職が自分の目の前に歩いて来た時に住職に頭を下げることで、警策で自分の肩や背中を叩いてもらうといった激励を受けることができます。次の座禅体験において興味がある場合は警策をいただいでみてください。ですが単に叩かれないがために警策をいただくのはもちろんやめてください」と続けて述べた。





2回目の座禅体験では、多くの団員や随行の先生方が警策による激励を受けた。また住職からは以前中国を訪れたことがあり、その際に中国各地の僧侶と知り合った。そして住職が使っている警策も中国から持ち帰ったものであるとお話があった。

問：日本の僧侶と中国の僧侶にはどのような違いがあるのか？

答：この点について住職は、日本の僧侶は肉を食べ、酒を飲み、ひいては結婚もできることから「生臭坊主」だと笑いながら述べた。だが住職は「しかし」との言葉の後に、「私たちは仕事として僧侶をしており、もし家庭を持った場合は精力が分散してしまい、仕事に専念するのが難しくなるかもしれない」と述べ、そしてまた笑顔で「私は結婚していません」と述べた。

問：茶道体験においてお茶をいただく際のユニークな注意事項は？

答：先生からは「お茶の最後の一口を飲む際にズツという音を立て、吸い切りをする。その理由はお茶を飲み切るためであると共に、吸い切るほど美味しかったとの感謝を亭主に伝えるためです」との説明があった。

## 感想

日本文化はその独特の上品さ、味わい深さによる精神的境界への追求で世に名高い。日本の伝統文化における至宝である茶道と座禅は深い哲学思想と審美的趣を秘めている。今回の日本での交流学习期間において、私たちは幸いにも茶道と座禅を体験することができた。

茶室に入ると、すぐさまその美しく静かで優美な環境に圧倒された。茶室の空間は小さく狭いながらもレイアウトが洗練されていて、木材や竹等の自然の材質をメインに、壁には品のある書画が掛けられ、隅には生け花が飾られるなど自然と融合した調和の雰囲気を出していた。

茶道の作法については先生から細やかな説明があり、各手順共に緻密で整然且つ美しさに満ちていた。水の煮沸や抹茶の磨砕から点茶、お茶を渡す動作のいずれもディテールへの追求が示されていた。先生は伝統的な衣装を身に着け、所作も優雅でスムーズであった。お茶を渡す際の茶碗を置く角度、両手で差し出す際の姿勢のいずれにも決まったルールがあり、客人が茶碗を受け取った後はまず先に時計回りに茶碗を回し茶碗の美しさを観賞してから飲み、飲み終わった後は特定の方法で拭き取ってから茶碗を返さなければならない。

日本に来る前の授業において、ちょうど茶道の「和敬清寂」の意味に関する内容を習っていたが、その時は理解するのがとても難しかった。だが今回の体験において茶道における「和、敬、清、寂」の四規をしっかりと体感することができた。「和」は亭主と客人の間、人と自然の間の調和と共存を表す。「敬」は細やかなマナーにより他者や物

への尊敬を表す。「清」は環境の清らかさのみならず、心も清らかに美しくいることを表す。「寂」は澄み切ったこだわりのない境地を追求することを表す。抹茶をいただくプロセスでは、最初はやや苦みがあるが後に甘さが感じられた。これは人生における浮き沈みにも似たものであり、困難な状況においても頑張ることそして転機を待つことの重要性を実感することができた。茶道が提唱しているのは茶を飲むことだけではなく、それ以上にリズムの速い現代生活においてひと時の静けさや心の穏やかさを得ることで、シンプルであることの美しさや精神的豊かさという価値を感じるといった生活への向き合い方や精神の修練である。

座禅は静まり返った禅堂で行われ、室内の日差しは柔らかく、その場は荘厳な雰囲気であった。座布団の上に胡坐をかき、背筋を伸ばし、両手を組み、呼吸を整え、禅定の状態に入る準備が整った。

木魚の音が鳴るのに伴い座禅が始まった。初めは思考が手綱を切った馬のように制御できず、様々な雑念が次から次へとやってきた。だが呼吸に集中することに努めるうちに次第に自分の思考が左右されず、不干渉でいられるようになるのを感じた。時間の経過と共に心も次第に落ち着き、それはまるで外界と隔絶した一種の自由で自然な状態に入ったようだった。身体は多少の凝りや痺れを感じたが、精神的にはますます明るく清らかになり、心の奥底の静けさと力を感じることができた。

座禅は日本文化における自身の心に対する探求や修練の重視を表している。座禅を通じて「正念」の力、即ち、現在に対する集中と気付きを強く感じるすることができた。日本文化において、こうした心に対する修練は様々な面に及んでおり、武士道精神における粘り強さや自律もまた心に対する大きく強い追求が基になっている。座禅は自身の心の世界と向き合い、貪瞋痴（貪り、怒り、愚かさ）等の煩惱を克服し、粘り強い意志と穏やかで寛容な気持ちを育むことを可能にするものであり、それにより繁雑且つ複雑な世界において冷静さや自身を制御する能力を持ち続け、日本文化に秘められた粘り強さ、我慢強さそして精神面の向上を追求するとの特質をより良く理解することができるのである。

## 環境に優しいリサイクル型経営の手本、質の高い発展の将来性

中国石油大学学生代表

見学日時：2024年12月2日（月） 9:30-11:30

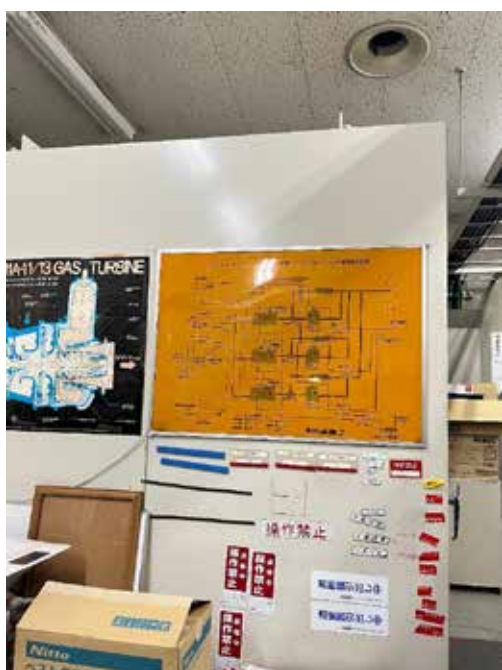
見学場所：ホテルニューオータニ東京

### 見学概要

まず私たちは生ごみの回収処理システムを見学した。ホテルニューオータニ東京では毎日約5トンの生ごみが発生するが、もしこれらを国又は東京都の公共施設で処理した場合、1トン当たり約1万円の費用が掛かる。だがここでは自身の設備により生ごみを処理しているため処理費用をなくすことができ、さらには自家発電を通じて設備の稼働に必要な電力を賄っている。生ごみはまずタンクに入れられ、それから蒸気処理により約60%の水分を取り除き、残ったものが大きなタンクの中で発酵熟成される。発酵を終えた後は風での冷却や分類との段階を経て回収不能な物質（例：合成樹脂や油を多く含んだ廃棄物）を取り除き、最終的に肥料となる。これらの肥料はさらに外部への販売が可能で、循環経済の一部を形成している。

次いで私たちは厨房排水の再利用及び自家発電施設を見学した。ホテルニューオータニ東京には1400を超える客室があり、1日約1000トンの排水が生まれる。ここではその排水を分解及び浄化処理することで無害な中水に変え、ホテルの緑化や衛生施設に利用している。これにより排水の放出による環境への影響を減らすと共に、ホテルにおける水道代を抑えている。ホテルの自家発電設備は主に3台のガスタービン発電機から成り、天然ガスと石油をその燃料とし、普段はホテルにおける一部の電力を賄うことが可能で、都内における電力に不測の事態が発生した場合は緊急用の電力源として運用することができる。

ホテルニューオータニ東京では生ごみの回収処理、厨房排水の浄化再利用及び自家発電の施設を見学したが、これらの高効率なエコ施設を通じて私たちは同ホテルの環境保護への配慮を感じ、またそれ以上に持続可能な発展に関する先見性と卓越した見識を学ぶことができた。



自家発電施設



排水浄化施設

## ご存じですか？

問：生ごみの回収処理施設にハエや昆虫がいないのはなぜか？

答：昆虫は一般的に水溜まりから繁殖するが、ここでの処理プロセスではまず初めに生ごみの水分を取り除いており、さらに設備の密封性が極めて高いことから水溜まりが発生しないため、昆虫を引き寄せない。

問：生ごみの回収処理関連設備の経済性は？

答：設備は50年前に作られ、約20億円の資金が投じられたが、わずか20年間でそのコストは回収されている。現在、設備の整備維持費用は収益とほぼ一致しており、経済性と環境保全を共に重視した良好な状態となっている。

問：生ごみの回収処理設備はホテルニューオータニ独自のものなのか？協力関係にある関連の産業はあるのか？

答：東京には国の廃棄物処理施設があるが、こうした生ごみから肥料を作り販売するとの産業はあまり一般的ではない。ホテルニューオータニでは農家と契約を結び、農家がホテルから肥料を購入する一方で、ホテルが野菜や米を農家から購入し社員食堂で使用するなど、資源の再利用を実現している。それと同時に、こうした大規模且つ高度に整った処理施設はホテルニューオータニ独自のもので、日本全体でも最先端のレベルとなっている。他のホテルにも似た設備は存在するが、規模や機能の面でホテルニューオータニには及ばない。

問：ホテル全体の回収システムを稼働するには、どれほどの人数による操作やメンテナンスが必要なのか？

答：同システムは非常に自動化されており、ホテル全体の生ごみ処理は1名のスタッフのボタン操作で対応可能である。ただ設備の運用とメンテナンスにおいては、スタッフに一定の専門知識が求められる。例えば処理できない金属製品（例：フォーク）は設備の故障を引き起こす可能性があり、その場合は分解した上で検査しなければならない。また油を多く含んだ廃棄物の分別にも専門技能が求められる。

問：自家発電システムはホテル全体の運営維持に必要な電力を賄うことができるのか？

答：ホテルの自家発電設備は、都内における電力供給に不測の事態が発生した場合にホテルの最低限度の運営を保障することが可能で、平常時はホテルの約3分の1の電力を賄うなど、電気料金の支出を抑えている。

## 感想

ホテルニューオータニは、一連の進んだエコ施設を通じて質の高い発展及び社会的責任に関する自身の取り組みを示していた。これは単に環境保全理念に対する取り組みである以上に経済効率や生態効率を融合した知性豊かな取り組みである。生ごみの回収処理と再利用は「廃棄物」から「資源」への転換を実現し、処理費用を抑えているのみならず、農家との提携にも新たな可能性をもたらしている。また厨房排水の浄化再利用システムや自家発電設備は、資源への高効率管理及び緊急時の対応に関する準備能力を表している。

ホテルニューオータニの環境保全に関する取り組みは、持続可能な発展は一種の妥協ではなく、責任と効率を完璧に融合した一種のイノベーションであることを告げており、業界における手本を示していると言える。



全団員による集合写真



ホテルニューオータニ東京の日本庭園

## 中日協力の粘り強さと展望：大使館での交流会にて

北京語言大学学生代表

見学日時：2024年12月2日（月） 14:30-15:30

見学場所：中華人民共和国駐日本国大使館（経済商務処）

### 見学概要

収穫に満ちた一日が終わろうとする中、私たち一行は「故郷」とも言える中華人民共和国駐日本国大使館（経済商務処）を訪れ、非常に有意義な交流会に参加した。交流会が始まると、大使館の代表者から詳細なデータや実例を基に、中日両国の経済、貿易及び技術協力分野におけるめざましい実績について紹介があった。そして、改革開放以来、中国は日本から進んだ家電製造技術や高速鉄道技術などを導入しており、これらの技術は中国の工業化の進捗を大きく速めたのみならず、両国の人々の生活に極めて大きな変化をもたらしており、現在中国は自動運転、電気自動車、スマートオーダー及びオンライン決済等の最新技術分野において世界が注目する進展を遂げているが、その背後には日本の技術による多くのサポートと協力が存在しているとのお話があった。

その他、省エネ・環境保全や人口高齢化への対策に関し日本が蓄積した経験や技術は両国のより深い協力に新たな可能性を切り拓いている。代表者からは特に、地球の気候変動との課題に対し、中日両国はクリーンエネルギーや低炭素技術の面での協力において非常に大きなポテンシャルがあり、双方は今まさにこうした分野での協力モデルを積極的に模索している。それと同時に、高齢化社会の問題解決における日本の進んだ経験は中国に貴重な学習機会を提供するものであり、双方が技術移転や共同研究等の方法を通じソリューションを模索することが期待されているとのお話があった。

しかしながら、中日協力は順風満帆というわけではなく、近年の国際情勢の変化、特にアメリカによる中日両国のハイテク及び高等教育における協力への干渉は両国関係に一定の不確実性をもたらしている。とは言え、中日関係は依然として粘り強さと知恵を示しており、外部による干渉の克服に努め、絶えず新たな協力の機会を模索している。例えば中東や中央・南アジア市場において中日両国間には一定の競争が存在するが、双方はまた協力の可能性も探っている。中国の機械設備製造における優位性と日本のブランディングや品質管理における強みを融合することで、両国の企業は第三国市場において優位性の相互補完を実現し、共同でより幅広く市場を開拓するなど、ウィンウィンという目標の達成が可能になる。

今回の交流は中日両国の協力関係に関する私たちの知見を深めたのみならず、将来的な両国の様々な分野でのより高度な協力の方向性をはっきりと指し示すものであった。今後も双方が開放的で寛容な姿勢を守ることによって中日協力はきっとより輝かしい明日を迎えると信じている。





## ご存じですか？

### 1. 日本はどういった分野で世界をリードしているのか？

- ①自動車産業：日本は世界をリードする自動車生産国の1つであり、トヨタ、ホンダ、日産等の世界でも有名な自動車ブランドを擁している。
- ②ロボット産業：世界におけるロボットメーカーの52%以上が日本のメーカーである。
- ③食品衛生及び品質管理：日本の食品衛生基準は非常に厳しく、世界において食品衛生管理レベルが最も高い国の1つである。
- ④医療レベル：日本の医療システムは高効率、高品質のサービス及び医療費負担における高い公平性で名高く、世界における医療レベルは常に上位にある。

### 2. 中日協力はこういった外的要因の影響を受けているのか？

- ①アメリカの要因：アメリカのアジア・太平洋における戦略的配置の調整、特に対中競争戦略は中日関係に影響を及ぼしている。またアメリカの中日両国間における均衡化戦略は往々にして中日関係をより複雑で変わりやすいものにしていく。
- ②地政学的対立：朝鮮半島が含まれる。

## 感想

今回の中華人民共和国駐日本国大使館（経済商務処）での交流会においては、中日両国の経済、貿易及び技術協力分野におけるこれまでの実績について知見を深めることができました。特に中国が日本から家電製造技術や高速鉄道技術を導入し、それらの技術がどのように中国の工業化の歩みを推し進め、また両国の人々の生活を改善したのかについてのお話を聞き、非常に感銘を受けた。これらの技術は一つひとつの成果の表れであるのみならず、それ以上に両国の人々の知恵と努力の結晶だと言える。

特に自動運転、電気自動車等の最新技術分野において中国の進歩は注目を集めているが、その中で日本の技術によるサポートや協力は重要な役割を果たしている。この点から、技術協力は無機的なデータや実例のみならず、その背後には両国の人々の共通した素晴らしい生活への追求やたゆまぬ努力があることを知った。こうした協力の精神

は人の心を奮い立たせるものであると同時に、両国の将来的な多方面での協力への期待を持たせるものである。

それと同時に、日本の省エネ・環境保全及び人口高齢化への対策に関する経験にも感銘を受けた。地球の気候変動との課題に対し、中日両国はクリーンエネルギーや低炭素技術の面での協力において非常に大きなポテンシャルがあり、これは環境に対し責任を負う行動であると共に後世の人に対し責任を負う行動でもある。こうした協力は技術面の交流である以上に持続可能な発展の理念に対する共同実践である。

外部環境の変化は中日協りに不確実性をもたらしているが、両国が示している粘り強さと知恵そして中東や中央・南アジア市場における協力可能性の追求との点からは協力における大きな将来性を見た思いがした。こうした競争の中で協力を追求する、課題の中で機会を模索するとの姿勢は、両国関係の将来的な発展を楽観視させるものである。

今回の交流会では、中日協力は両国間の問題であるのみならず、それ以上に世界の発展に関連する重要テーマであるとの点を強く感じた。こうした協力は両国の経済発展を推し進めるのみならず、地球規模の問題の解決のための新たな思考の筋道やソリューションをもたらす。両国が開放的で寛容との基盤において引き続き協力関係を深め、これまで以上に輝かしい明日を共に迎えることを願っている。

# 技術とヒューマニズムの融合：住友商事の企業精神

北京師範大学学生代表

見学日時：2024年12月2日（月）16:30-20:00

見学場所：住友商事

## 見学概要

1. 「総合商社」という日本特有の業態及び住友商事が中国で行っている事業活動についての紹介。
2. 会社概要、事業内容、住友グループの歴史や事業精神及び住友商事の経営理念などの紹介。
3. 住友商事の3名の従業員によるそれぞれの職業経験の紹介。
4. 懇親会での従業員との交流。

## ご存じですか？

1. 住友商事の経営モットーは何か？
  - ①信用を重んじ、確実を根本理念とする。
  - ②目先の利益に走らない。
2. 住友商事グループが追い求める企業イメージは何か？

常に変化を先取りして新たな価値を創造し、広く社会に貢献するグローバルな企業グループを目指している。



3. 住友商事グループの経営理念は何か？
  - ①〈企業使命〉健全な事業活動を通じて豊かさと夢を実現する。
  - ②〈経営姿勢〉人間尊重を基本とし、信用を重んじ確実を旨とする。
  - ③〈企業文化〉活力に溢れ、革新を生み出す企業風土を醸成する。



#### 4. 懇親会において住友商事の従業員と交流した感想は？

従業員の皆さんは積極的に私たちと交流し、日本での感想を訊ねてくれた他、私たちからの質問にも丁寧に答えてくれた。彼らはとても人当たりが良く、非常に友好的だった。また日本人従業員の多くが中国語を話し、中国語で私たちと交流するよう努めていた。彼らのそうした姿勢から、私たちも勇気をもらい、間違いを気にせず日本語を使ってコミュニケーションを取ろうという気になった。積極的に誠実な態度であれば、相手も快く応じてくれたり、助けてくれたりするし、こうしたコミュニケーションの中で自分の語学力も早く向上すると思う。

### 感想

長い歴史を持つ企業である住友商事に関しては、その歴史の継承が最も印象深かった。住友グループは17世紀の別子銅山を母体とし、数世紀にわたる発展を経て金属、エネルギー、機械、化学工業等多くの分野を手掛ける大型総合商社となっている。見学においては、住友商事による歴史への尊重及び伝統の継承を強く感じ、こうした継承は企業文化のみならず、その安定した経営戦略や長期的な発展計画にも示されていた。住友商事による歴史の継承は、企業が持続的に発展する上での重要な基盤は歴史への尊重や伝統の維持であることを私たちに告げていた。

その他、イノベーション能力や世界的視野もまた世界的な貿易企業には欠かせない能力そして条件である。

住友商事のイノベーション精神は極めて優れていた。見学では、環境保全及び再生可能エネルギー分野において研究開発に積極的な投資を行い、環境技術や関連製品の発展を推し進めている他、デジタルトランスフォーメーションを通じ、業務効率及び市場への反応速度を高めているなど、住友商事が多くの事業分野で新たな技術や業務モデルを常に模索そして実践していることを知った。

もちろん、世界的視野も住友商事の大きな特色である。世界的な貿易企業である住友商事は世界規模で幅広い業務ネットワークや提携パートナーを擁している。見学の際、私たちは住友商事がいかんにしてそれぞれの国や地域の市場の特徴を基に事業戦略を定めているのか、そしていかんにして異文化間の管理や協力を通じて世界的リソースの合理的配置を実現しているのかについて知ることができた。また住友商事の事業は世界にあまねく分布していることから、リソースの配分制度や応急メカニズムの整備はとても重要であり、質疑応答の際、私たちは住友商事のそうした面での取り組みについても理解を深めることができた。いずれの面においても、住友商事は一貫した世界的スタンスを維持しており、絶え間ないイノベーションとの原動力を活用し、企業自身の発展を推し進めると同時にグローバル社会

の進歩にも貢献し続けている。

そして私たちは住友商事における経営モットー、企業イメージ、経営理念及び行動指針等の多くの企業精神について知ったが、これらの理念は住友商事全体の運営における根本的要求であるのみならず、従業員1人ひとりが心の中に秘めた期待そして追求でもあった。正にこうした従業員個人から企業全体にまで浸透した共同の信念が、インフラ建設、エネルギー開発、化学材料革新、情報技術、金融サービス及び物流等多くの重要分野にわたる住友商事の事業の世界規模の拡大を牽引している。また住友商事の先輩方による職業経験の紹介の際にも就職活動に関する適切な提案を頂いた。その中では、企業を選択する際にはまずその企業のモットーや理念に注目する必要があり、企業が自身の期待に合っているか、企業の発展の方向性が自身のキャリアプランと合っているか等は私たち多くの求職者が就職し、その企業において自身の価値を実現できるかどうかに関係しているとお話があった。

また私たちは住友商事の奉仕の精神と社会への貢献にとっても感動した。住友商事は相互信頼と相互利益の提携モデルを通じて事業所在地及び提携パートナーから高い評価を受けるなど、双方の共同での成長と繁栄を促進している。こうした精神による手引きの下、従業員は日々の仕事において知らぬ間に感化され薫陶を受け、個人として社会に奉仕するとの想いを抱くのみならず、それ以上に企業が実際の行動によりそうした理念を実践するプロセスを目にし、またそれに関わることで、そうした理念への共感や帰属意識が深まっていく。そして従業員らは自身の仕事の成果が社会に有益な実際の行動に転化されるのを目にした時、心の中で大きな達成感と満足感がわき起こり、そうしたポジティブな反響が、彼らが努力を続けそしてたゆまず社会に貢献する上での強い原動力となっている。こうして作られた好循環は、住友商事内部の文化の積極的構築を促進するだけでなく、それ以上に企業の長期的発展と社会的責任の履行に確かな基盤を打ち立てるもので、優れた企業が備えるべき姿と責任感を示しており、こうした点はまた私たちの将来的なキャリアプラン構築に手本を示すものであった。

今回の住友商事での見学は企業運営を学ぶ貴重な機会であるのみならず、それ以上に企業文化、経営理念、企業の魅力を深く体験する機会でもあった。未だ大学生の私たちにとって、驚きと同時に数多くのインスピレーションが得られた今回の経験は、私たちが将来的に社会的責任を担い、人生における様々な可能性にチャレンジし続け、次第に世界的競争力を備える人材になり、国際的な交流や提携に携わることを目指す原動力となるだろう。

# みずほ銀行の中国における金融事業及びキャリアパスに関する大学生への提案

対外経済貿易大学学生代表

見学日時：2024年12月3日（火） 9:00-10:30

見学場所：みずほ銀行

## 見学概要

訪日交流における重要な一環として、中国大学生訪日団はみずほ銀行を見学し、同銀行の中国における事業展開及び銀行業におけるキャリアプランについて多くを学ぶことができた。今回の活動は、セミナー、座談会及び対話交流を通じて日中両国の青年が金融業界への知見を深め、文化や専門分野における交流を推し進めることを目的としている。

段取りは以下のとおり：

### 1. 冒頭の挨拶

まず、みずほ銀行中国営業推進部の松田由己次長から歓迎の挨拶があり、その後、訪日団の徐賜明団長から今回の活動に対する感謝と期待についてお話があった。

### 2. セミナー

中国におけるみずほ銀行（講演：黄穂冰女史、中国語）

行員の生活とキャリアパス（講演：手嶋徹也みずほ銀行中国営業推進部執行理事、日本語、黄穂冰女史による通訳）

### 3. 座談会

みずほ銀行の黄穂冰女史、王博氏、趙婧女史及び小川隆那女史から自己紹介があり、その後訪日団の団員と各グループに分かれ座談を行い、金融業及び行員の普段の仕事について深く議論を交わした。その際、行員の皆さんからは就職に関して貴重なご意見をいただいた。

### 4. 閉幕、記念撮影

手嶋徹也執行理事からの閉幕の挨拶の後、訪日団は今回の参加者全員と記念撮影を行い、今回の活動は円満に終了した。

今回の見学を通じて、訪日団の団員らはみずほ銀行の国際的事業展開、企業文化及び行員のキャリアプランなどについて知見を深めることができた。それと同時に、今回の見学は今後の日中間の金融協力と若者交流にさらなる活力を注入するものとなった。



みずほ銀行での中国大学生訪日団への歓迎の様子



みずほ銀行の公式キャラクター、あおまる



みずほ銀行での中国大学生訪日団による記念撮影の様子

## ご存じですか？

以下は対外経済貿易大学の団員らがまとめたみずほ銀行に関連した情報である。

みずほ銀行（Mizuho Bank）は日本の大型商業銀行であると同時に日本の三大銀行の1つでもあり、その企業グループの歴史は151年前（1873年）に遡る。みずほ銀行は、「第一勧業銀行」、「富士銀行」及び「日本興業銀行」の統合・再編により生まれた「みずほ銀行」と「みずほコーポレート銀行」が2013年に合併し正式に誕生した。

日本の銀行金融業において抜きん出た存在であるみずほ銀行は、日本国内に2200万人を超す個人顧客の他、180万を超す証券総合口座を擁している。支店は日本国内の47都道府県に分布し、2023年には日本国内の銀行でシンジケートローン市場シェア第1位との実績を挙げている。みずほ銀行は日本の金融サービス分野において幅広い影響力を擁しているのみならず、地域や国の垣根を越え、世界中の国や地域で事業を展開している。

日本最大の金融機関であるみずほ銀行のグループ組織と事業は、銀行、信託、証券、資産管理及び調査研究・コンサルティング等様々な従来の金融業をカバーするなど、日本国内外の個人から企業に至るまで、多くの顧客層にサービスを提供している。個人向けの業務に関しては、みずほ銀行は個人の顧客に向けて預金、ローン、クレジットカード、財産管理等のサービスを提供している。また法人向けの業務に関しては、中小企業及び大企業の顧客に向けて融資、現金管理、貿易金融等のソリューションを提供している。投資業務に関しては、みずほ銀行は消費者に向けて企業の合併買収、新規株式公開、デットファイナンスを含む資本市場関連サービスを提供している。みずほ銀行は

顧客への全面的且つ多様化した金融商品及び金融関連サービスの提供に力を注いでいる。

中国と一衣帯水の隣国である日本の三大銀行の1つとしてみずほ銀行は、日中両国の提携に積極的に関わっている。1979年、中国における改革開放の動きに伴い、みずほ銀行は中国において第1回「中国産業金融研修会」(後にMSF: Mizuho Finance Seminarと改称)を開催するなど、中国の政府当局、金融機関及び企業の幹部に日本の経済、産業そして金融市場に関する日本での研修との貴重な機会を提供。1981年、中国北京に駐在員事務所を開設。1987年、初の外資系銀行として深圳支店を設立。1992年と1995年にはそれぞれ上海支店、浦東新区初の外資系銀行支店を設立。1997年には外資系銀行で第一陣となる人民元業務を開始するなど、その後人民元クリアリング業務を邦銀第一陣として開始。2007年には邦銀初の現地法人となる、みずほコーポレート銀行(中国)有限公司を開業など、21世紀に入ってからもみずほ銀行は中国との関わり合いが続いており、「パンダ債」の発行やグリーン預金業務の実施など、みずほ銀行は中国における事業を長い歴史と共に順調に拡大している。

みずほ銀行の中国政府高官との交流もまた日中両国の事業提携における美談となっている。1990年、李鵬総理(当時)が中南海において黒澤会長(当時)と池浦取締役(当時)と会見。そして2000年には朱鎔基総理(当時)が中南海で西村頭取(当時)と会見。2019年にはみずほ銀行の佐藤取締役会長(当時)が北京において陳吉寧北京市長(当時)や蔡奇中国共産党北京市委員会書記(当時)と会見している。またみずほ銀行は、中国発展ハイレベルフォーラム、上海国際金融センター専門家諮問委員会、陸家嘴フォーラムといった中国での経済フォーラムや重要な経済会議に積極的に参加している。

みずほ銀行は中国の政界及び大型提携会議と密接な交流があるのみならず、中国の企業や大学とも多くの業務協力を行っている。1980年代からみずほ銀行は中国の政府機関、金融機関、企業及び大学等160以上の機関や組織との間で業務協力協定を締結しており、その事業範囲は沿海地区から北京、天津、青島、大連、合肥、蘇州、昆山等中国各地に広がっている。そして協力関係にある大学には清華大学、對外経済貿易大学、中国海洋大学等が含まれている。ちなみに、私たちがみずほ銀行を訪問した当日、山東省青島市政府の関係者もみずほ銀行本部を訪れ、提携事業に関する協議をしていた。

みずほ銀行は絶えず変化する世界の金融環境において多くの挑戦や機会に直面している。そうした中、みずほ銀行は今後もリスク管理やコンプライアンス管理を強化し、安定した経営戦略を継続していくと同時に、より一層海外市场を開拓し、世界における業務能力を向上することで顧客が最優先する金融協力パートナーとなるよう努めていくことを私たちは今回知った。みずほ銀行はその歴史的蓄積、幅広いサービスネットワーク及び強大な金融力により世界の金融市場において重要なポジションを占めている。世界経済の発展そしてフィンテックの絶え間ない進歩に伴い、みずほ銀行は今後も引き続き金融分野における重要な役割を果たし、顧客に優れたサービスやサポートを提供していく。

みずほ銀行は長い歴史とイノベーション精神を備えた金融機関であり、その非常に発達した事業分布と社会的責任への重視により、経済の発展と社会の進歩に尽力している。それは正にみずほ銀行の企業文化で言うところの「ともに挑む。ともに実る。」である。

見学の際に面白い事があった。

黄穂氷女史は、以前とある顧客から彼女の名前の中の「穂」の字が「みずほ(瑞穂)銀行」の「穂」と偶然一致していると冗談交じりに指摘されたことがあり、こうした奇妙な縁が彼女をみずほ銀行で働くことを運命付けた要因なのかもしれないと笑いながらお話をされていた。

手嶋執行理事は各団員のテーブルにご自身のプロフィールを準備されていた。これには驚かされ、またそれ以上に彼の今回の活動への真摯な姿勢に感銘を受けた。手嶋執行理事からは、現在みずほ銀行においては、新卒者は入行から5年後にはその半数が転職し、10年後には3割しか残らないが、彼自身がみずほ銀行で25年間終始働き続けられたのは、それが自分の好きな仕事だったからであるとのお話があった。彼からはまた、語学力を高め最少と

も3つの言語を習得すると同時に、何かをする上でのモチベーションがある時にはそれをすぐに行動に移した方が良いとのアドバイスをいただいた。こうした貴重なアドバイスは、現在キャンパスと職場の間の十字路にある私たち学生にとって戒めの言葉だと言える。

## 感想

みずほ銀行への訪問を終え、同銀行の日本の金融業における重要な地位そして影響力を感じた。みずほ銀行は第一勧業銀行、富士銀行及び日本興業銀行の統合・再編により2002年に生まれた「みずほ銀行」と「みずほコーポレート銀行」が2013年に合併し誕生した日本国内で最大の顧客群を擁する主要銀行の1つで、国内外に多くの出先機関が存在する。みずほ銀行は中国でも幅広く事業を展開しており、1987年には深圳に支店を設立し、その後中国で初めて現地法人を設立した邦銀となっている。現在、みずほ銀行は中国において多くの営業拠点及び駐在員事務所を構え、主に日系企業、中国系企業及びその他アジアや欧米企業向けにサービスを提供している。事業範囲は外国為替業務、人民元預金・貸出業務、輸出入に絡む信用状、貿易手形、担保、送金、外国為替のフォワードトレード等多岐にわたる。その他、みずほ銀行は中国でのコンサルティング業務も広く展開しており、市場調査、提携先探し、政策法規解説、会社の設立及び運営等多方面のサービスを顧客に提供している。

みずほ銀行への訪問を通じて、同銀行の世界の金融市場における大きな役割及び日中両国の経済交流における貢献について知見を深めることができた。これらはイノベーションと市場の変化への適応が、金融機関が持続的に発展していく上での重要な要素であることを反映していた。

とても印象深かったのは手嶋執行理事の講演で、彼からは間もなく就職の問題と直面する私たちに向けたとても実用的なアドバイスをいただいた。「将来の勤務地は国内か国外か、家族の傍に残りたいのかどうか」、「語学力はどうか」、「個人の長所をいかに発揮して競争相手と差別化するのか」、「勤務開始後に転職したいのかどうか」、「機関の中と外のどちらで働くのか」等の現実的な問題に関し、手嶋執行理事から非常に多くの実用的なアドバイスをいただいた学生らは、将来の就職に向けた方向性に関し、これまで以上に明確で具体的な目標を持つことができた。

また質疑応答のコーナーでは、中国石油大学の王毅竜さんと対外経済貿易大学の肖瑩盈さんから手嶋執行理事へ以下の質問があった。

問（王毅龍さん）：「起業においては情熱と注目の集まる事業のどちらを重視すべきですか？」

答（手嶋執行理事）：「個人的には情熱を重視します。なぜなら情熱は得難く尊いものだからです。情熱は起業における基盤で、挑戦に立ち向かい、イノベーションを継続し、企業文化を築く手助けをしてくれます。情熱がなくなれば継続におけるモチベーションもなくなります。注目の集まる事業をわざわざ待つ必要はありません。それは外在的な後押しであり、情熱こそが成功の始まりです。もちろん、情熱と注目の集まる事業を融合させ、市場におけるチャンスを掴むことができれば起業の成功率はより高まります。ですが、いずれにしても情熱を持ち続けることが起業に成功するための第一歩です」

問（肖瑩盈さん）：「勤務開始当初から仕事におけるご自身の目標や興味が明確であったことを非常に羨ましく感じています。つきましては未だ就職における方向性や目標が定まっていない学生に対し何かアドバイスはありますか？また、どのようにして仕事に対する興味を持ち続けていますか？」

答（手嶋執行理事）：「自己探求、キャリアプランの制定、専門的指導、学習の継続、実務経験の蓄積及びネットワークリソースの利用などを通じて段階的に自身のキャリアパスを見つけることができます。仕事に対する興味を持ち続けるとの点に関しては、仕事の意義を見出し、目標を設定し、常にチャレンジ精神を持ち続け、仕事と生活のバランスをとり、前向きさを持ち続けると共に、フィードバックを通じて個人としての成長を実現することが大切です」

す。キャリアアップは動的調整と絶え間ない進歩のプロセスであり、重要なのは好奇心と適応力を持ち続け、自身のキャリアにおける目標を段階的に明確にすることです」

手嶋執行理事による丁寧な回答を拝聴した学生らは多くの収穫を得た他、自由交流のコーナーではまた積極的にみずほ銀行の行員と交流を深めた。

## 松本楼の歴史的意義

北京師範大学学生代表

見学日時：2024年12月3日（火）11:15-13:00

見学場所：日比谷松本楼

### 見学概要

12月3日の昼、私たちの乗ったバスは日比谷公園に到着し、その後私たち一行は公園内を歩き松本楼に向かった。途中、日比谷公園内の静けさや景色に魅了されるなど、歴史と自然が交わる佇まいを感じることができた。





松本楼に到着し真っ先に目に入ったのは古風で優美な西洋建築で、その重厚な壁面と古典的な屋根のスタイルは100年の歴史を持つ建築物としての風情を醸し出していた。内部に足を踏み入ると濃厚な歴史の息吹が感じられた。入口には宋慶齡女史がかつて弾いていたピアノが展示され、周囲の壁には、孫中山氏と梅屋庄吉夫婦の貴重な集合写真の他、梅屋庄吉氏が当時受領した革命軍の委任状及び胡錦濤総書記（当時）が松本楼を見学した際の写真等日中友好交流にまつわる歴史的人物の写真や文物が飾られていた。これらの展示品は当時の歴史を私たちの目の前に鮮やかに示すもので、当時の激動の時代にタイムスリップしたかのようなようだった。



次いで私たちは松本楼2階の洋風宴会場での食事となった。宴会場はレイアウトが優美且つ荘厳で西洋の風情に満ちていた。私たちはそこでこのクリームスープ、ポテトサラダ、カレーライスそして食後のマロンケーキ、オレンジジュース、コーヒーといった美味しいランチを堪能した。各料理共に味がきめ細かくまた多彩で、松本楼が長年受け継いできた食文化の伝統が感じられた。また食事の前には曾広明団員による解説と当時の歴史に関する映像により、松本楼の中国革命との関係そして革命における梅屋庄吉氏の多大な貢献について知見を深めることができた。



食後、私たちは1階に戻り宋慶齡女史が当時弾いていたピアノや当時の歴史にまつわる写真などを間近で鑑賞した。これらの文物は当時の特殊な時代に立ち会ったのみならず、私たちはこれらの文物により松本楼が受け継いでいる深い歴史的根底を感じることができた。

### ご存じですか？

梅屋庄吉氏は孫中山氏と出会ってすぐに旧友のように打ち解け、「君は兵を挙げたまえ、我は財を挙げて支援す」との盟約を結んだ。梅屋庄吉氏は中国革命においてどれほどの資金を投じたのか？

見学の際、私たちは梅屋庄吉氏による中国革命への支援について討論し、梅屋庄吉氏による「君は兵を挙げたまえ、我は財を挙げて支援す」との義挙に私たちは彼の中国革命への熱意と貢献を強く感じた。

松本楼から提供された史料に関する小冊子を通じて、梅屋庄吉氏が中国革命事業に投じた資金は2兆円（約1300億人民元）にのぼることを私たちは知った。この天文学的数字は梅屋庄吉氏の中国革命への多大な貢献を如実に示すもので、彼の私心のない援助は無数の中国革命の志士を助け、アジアの解放事業に歴史的貢献を果たした。

### 感想

松本楼の見学において最も印象的だったのは梅屋庄吉氏による中国革命への支援であった。彼の惜しみない資金援助からその揺るぎない支援の姿勢まで、いずれの点からも日中両国間の歴史的関係について改めて強く考えさせられた。梅屋庄吉氏は日本の実業家で、彼の援助は物質面のみならず、中国革命に対する真摯な支援にも示されていた。彼の援助は中国革命に必要な物質的保障を提供しただけでなく、日中両国の人々の友情の礎をも築いた。

梅屋庄吉氏の行動からは国の垣根を越えた感情のつながりを感じることができた。戦乱と変革に満ちたあの時代において梅屋庄吉氏は個人の力で中国革命を支えた。こうした個人の損得を度外視した、他国の困難を解決するとの精神は正に日中友好の中核部分だと言える。

また特に印象的だったのは、孫中山氏が亡くなった後に梅屋庄吉夫婦が示した深い哀悼で、孫中山氏が亡くなったことを知った梅屋庄吉夫婦はとて悲しみ、葬儀に参加したのみならず、さらには自身の財産を投げ孫中山氏の銅像を制作し中国各地に寄贈した。その中で最も代表的なのは南京にある孫中山氏の銅像である。これらの銅像は日中両国の歴史的交流の象徴であり、梅屋庄吉氏の孫中山氏への深い友情を示しているのみならず、彼の中国革命事業への揺るぎない支援をも示している。またこれは孫中山氏個人への尊敬のみならず、それ以上に歴史的責任感の一種の表れでもある。梅屋庄吉氏はかつて、「孫中山氏は中華民族の英雄であるのみならず、アジアひいては世界の歴史における偉大な人物である」と述べている。梅屋庄吉夫婦はこうした寄贈の行為を個人としての名声とはせず、一種の歴史的責任そして文化的使命として捉え、こうした行為により中国革命への揺るぎない信念やたゆまぬ支

援を世界に向けて示すと共に、日中両国の人々が歴史の重みと国の垣根を越えた友情を感じられるよう努めた。

現代に生きる者として私たちはこうした歴史をしっかりと心に刻むと共に、こうした歴史から力を吸収し、これまで以上に友好的で平和的な国際社会の構築に微力を尽くす必要がある。

今回の見学では松本楼についての知見が深まった他、梅屋庄吉氏そして同氏による中国革命への支援に対し強い敬意が生まれた。歴史は懸け橋であり、時間や空間の垣根を越えて私たちに当時の思いや責任を感じさせた。こうした歴史教育や文化交流は、日中両国の友情そして世界の平和的発展に無尽蔵の原動力をもたらすと確信している。

# 日中交流：異文化間の対話

北京語言大学学生代表

見学日時：2024年12月3日（火）14:00-19:00

見学場所：一橋大学

## 見学概要

午後、私たちは胸を躍らせながら、この名誉ある一橋大学に足を踏み入れた。京都大学の自由でおおらかな雰囲気とは異なり、一橋大学のキャンパスからは古式蒼然たる西洋風古典建築の美学が色濃く感じられた。また京都大学と比べ、ここには沢山の中国人留学生が集まっていただけでなく、中国語が堪能な日本人学生も多く、多元的文化的交流の場を形成していた。そのため互いの交流もよりスムーズであった。

現代感に満ちたキャンパスの見学を終えた私たちは小グループでの討論会に参加した。京都大学での弁論式とは異なり、一橋大学ではグループごとのテーマ討論で、テーマ自体も生活により密着したものであった。1回目の討論では皆が机を囲むように座り、各々が多彩な大学生活を紹介した。中国の学生らはカリキュラムの設定、講義の様子そして課外活動といった彼らの普段の学習の様子を紹介すると共に、講義以外の時間におけるサークル活動、スポーツ及び文化体験等の娯楽活動についても紹介するなど、現代の中国人学生の前向きで向上心があり多芸多才という様々な側面を示していた。

2回目の討論ではテーマがよりプライベートなものになった。私たちは一橋大学と中央大学の学生らと共に各々の地元について紹介した。雄大な自然景観から食欲をそそる各地の美食まで、それらはいずれも魅力的で、まるで自分がその場に居るかのように異なる地域の文化が持つ独自の魅力を感じることができた。このセッションではお互いへの理解が深まった他、文化交流を促進することができた。

その後の討論では、現実的で切実な問題、すなわち中国の大学生が直面している就職難にフォーカスが当てられた。学生らは教育リソースの配分における不均衡、業界における競争の激しさ及び社会の期待値が過度に高い等の要素を含め、こうした現象が生まれた原因の分析を行った。特に「内向き競争」現象の深刻化は多くの優秀な新卒者の就職活動を困難に満ちたものとしている。対して、日本人学生の卒業後の就職状況は比較的楽観視できるもので、この点は両国の教育体系及び就活市場についての深い考察を促した。

ちなみに、今回の交流会には韓国人留学生1名も特別に招待され討論に参加していた。彼からは韓国社会が現在直面している低出生率及び人口高齢化の問題について紹介があり、この話題は同様に幅広い注目や議論を呼んだ。日中韓の三国のこうした問題への対応策の比較を通じて、私たちは視野が広がっただけでなく、将来的に可能な提携の方向性についてよりはっきりとした認識を得ることができた。

夜のどばりがゆっくりと降り、1日の交流活動も和やかで楽しい懇親会によってすばらしいピリオドが打たれた。日本の学生らはとても友好的且つ親切で、自身の大学生活や中国への印象について語ってくれた。また中国人留学生らは旧友と再会したかのように私たちを手厚くもてなし、親切にキャンパスを案内してくれ、討論にも積極的に参加してくれた。美味しい料理と明るい笑顔が交わることで私たちの距離も縮まったのみならず、今回の日本訪問における忘れ難い思い出をつくることができた。今回の交流は知識のぶつかり合いである以上に心の交わりであり、私たちに未来への期待と憧れを抱かせてくれた。



## ご存じですか？

問：一橋大学における著名な人物は？

答：一橋大学における非常に著名な人物としては、「日本資本主義の父」と称され、近代日本経済の基盤を確立した渋沢栄一が挙げられる。渋沢栄一の影響力は経済及び教育分野に示されているのみならず、自身の著書『論語と算盤』を通じて彼は「道徳経済合一」説を提唱し、企業経営においては道徳と経済を両立させる必要があるとの考えを示すなど、彼の思想や業績は今なお日本社会に多大な影響を及ぼしており、2024年には彼の肖像が新1万円札のデザインに選ばれている。

## 感想

一橋大学への訪問ならびに日中両国の学生との交流において、私は日中両国の教育分野における交流や提携の現状そしてそのポテンシャルに強く心を打たれた。特に「内向き競争」現象や就職難に関する討論において、私は両国の青年が直面している課題について理解がより深まったと同時に、相互理解や相互支援の促進における文化交流の重要な役割についても知ることができた。

中国では、高等教育の普及に伴い若者が大学教育を受ける機会がますます増えているが、これにより就活市場での競争が激しくなっている。特に一線都市や人気の業界において新卒者は非常に大きなプレッシャーに直面しており、こうした現象は若者のキャリアアップに悪影響を及ぼしているだけでなく、彼らの心の健康状態にも不利な影響を及ぼしている。「内向き競争」現象による厳しい競争環境に、多くの若者は焦りや救いのなさを感じている他、ひいては自身の価値や未来についても疑問視し始めている。

対して、日本の大学生の卒業後の就職状況は比較的安定していると見受けられる。そしてこの背後にある原因に

については、日本社会の職業教育への重視、企業文化や求人制度の違い等多方面に及んでいる。日本企業は求人の際、学歴だけでなく、従業員の長期的な成長可能性や個人の資質を重視する傾向にある。こうした違いは採用基準のみならず、日本社会による若者の成長に対する様々な支援にも表れている。

一橋大学及び中央大学の学生との交流を通じ、私は青年の就職難への対応に関して日中両国が異なる経験と手法を有していることを知った。中国としては、盲目的に高学歴を追求するのではなく、職業教育及び継続教育のシステム構築を強化することで学生の興味や長所を基にしたキャリアパス選択を推奨するなど、日本の実務からインスピレーションを受けることが可能であると同時に、企業や社会においてもより多様化した就職機会や発展の場を提供することで若者の就職におけるプレッシャーを軽減する必要があると思う。

またより重要なのは、このような異文化間交流自体が重要な架け橋であるとの点であり、こうした交流は私たちが互いの社会や文化的背景について理解する手助けとなるだけでなく、両国の青年に相互学習及び相互啓発の場を提供している。経験の共有や問題への検討を通じて、私たちは解決の道を見出すなど両国の青年の共同発展を推し進めることができる。このプロセスにおいて、文化交流は単なる情報伝達にとどまらず、感情の連結そして知識のぶつかり合いでもあり、私たちはそこから提携の可能性や希望を見出すことができる。

よって日中両国の文化交流は表面的な交流である以上に、より深いレベルでの思想及び心の交流であり、こうした交流は文化の壁を取り払い、相互理解と尊重を深める助けとなるなど、より調和のとれた世界の構築のための知恵と力になると思う。

# テクノロジーとイノベーションの高度な体験

中国石油大学学生代表

見学日時：2024年12月4日（水）9:30-11:30

見学場所：ソニー

## 見学概要

ソニーでは、まず徐団長から彼のソニーとの深いつながりについて紹介があり、私たちは個人的経験という角度からソニーについて大まかに知ることができた。次いで中国総代表室の馬シニアマネージャーから、1946年5月の設立以来、「クリエイティビティとテクノロジーの力で、世界を感動で満たす」とのパーパスの下、2023年度実績で売上高は13兆208億円に達している他、11万3000名の従業員を抱えているといったソニーの基本状況について詳しい紹介があった。その後は質疑応答となり、ソニーとしては社員が学び応用していくことで挑戦し続けることを重視している、事業開発担当者はチームワークや実務経験を通じて新しい試みをし続け、失敗を恐れずに試行錯誤しポジティブさを持ち続ける必要があるといった点について知ることができた。最後にソニーのショールームを見学し、設立当初の電気製品からゲーム、音楽、映画などエンターテインメント事業を含む現在のソニーを体験することができた。また様々な先進的設備や技術の進化までを目の当たりにし、ハイテクノロジーと知識の融合がもたらす力を強く感じることもできた。



## ご存じですか？

問：ソニーが社員に求める重要な要素は何か？

答：ソニーは多面的な事業を有しており、異なるポジションでは求める要素もそれぞれ違う。共通しているのは、いかに仕事経験から学び、その学んだエッセンスや考え方を他の業務に応用していくのが大切である。なぜならソニーは発展のプロセスにおいて事業分野を拡大し続けており、社員は学び、応用することで常に創造することが求められるからである。

問：ソニーの事業開発担当者の業務はどのようにスタートするのか？

答：事業開発担当者は一般的にチームワークや実務経験を通じて全体のプロセスを学び理解する必要がある。イノベーションによる発展を続けてきたソニーの歩みにおいて、新事業の1つひとつが新たな挑戦であり、開発担当者らは基礎から段階的に革新性を備えた成果を挙げていく。

## 感想

ソニーの発展の歩みや経営理念には多くを考えさせられた。設立時のモットーを長年守り、絶えず発展し、ハードウェア分野から多様な分野へ拡大発展する、こうしたイノベーションや卓越した追求には感服させられた。そしてショールームの見学の際には製品や技術の進化を目にし、ハイテクノロジーの背後にあるのは弛まぬ学習、イノベーションそして実践であることを知った。また社員の学習能力への重視からも、急速に発展している現在においては、自身の学習能力を高め続け、学んだ知識を実務に応用することでのみ将来的なキャリアにおいて立脚できることを知った。こ

れにより私たちは専門知識の学習に努め、実習の機会を積極的に模索し実務経験を増やすとの決心が今まで以上に固まった。いつか、ソニーのようなイノベーションそして活力に満ちた企業で自身の価値を発揮できることを願っている。それと同時に、試行錯誤に伴う高いコストと前向きに向き合うソニーの姿勢もまた、目標を追求する上で挫折は付きものであり、重要なのはポジティブさを持ち続け勇敢に進んでいくことであるとの点を私たちに告げていた。

## 学生たちの感想文から

学生たちは毎晩、一日のスケジュールを終えてから日記形式の感想文を書き、第 27 回訪日の記録とした。以下、その一部を紹介する。

**日 付：11月27日（水）【1日目】**

**大学名：北京師範大学**

**氏 名：李珂**

この日の正午、私たち一行は北京首都国際空港で集合した後、引率の先生と共に ANA（全日空）の便で大阪・関西国際空港に向かった。また出発の前に私たちは全日空から、「I love ANA」とプリントされたエコバッグと可愛らしい ANA のロゴが入った飛行機の模型をいただいた。

以前面接の際に、日本語学科を選んだ理由は日本料理が好きだからであると述べたことがあった。そのため私の最初の日記では主に日本における美食の旅について記したいと思う。

まず私はプレートの上に和風の定食のように料理が小分けされた機内食に驚喜させられた。ごまだれであえたエノキと青菜の惣菜はとても美味しかったが、残念ながら分量がわずかだった。

夕食は大阪の「時鮭」ですき焼き定食を堪能した。すき焼きは私が最も好きな日本料理の 1 つだった（前の面接の際にもこのことを述べた）が、日本に到着して最初の食事がすき焼きだとは思っても寄らなかつた。

以下は日本のすき焼きに対する私の感想である。私が以前中国で食べたことがあるすき焼きと比べ、日本のすき焼きはスープが濃厚且つさわやかで甘みがあり、牛肉がより厚く、食感もしっかりしていた。鍋の中の緑色のややパサパサした野菜はこれまで食べたことがなく、中国では一般的に春菊やほうれん草が使われる。最も意外だったのは鍋の中の「日本の豆腐」で、柔らかさがありつつも歯ごたえもあり、中国で使っている千枚豆腐に比べスープがたくさん染み込むなど、このすき焼きの中で個人的に最も美味しい食材であった。

最後にこの日の夜の宿泊体験に関して述べる。日本に来てから、中国と異なる多くの部分を感じたと言うよりは、むしろ多くの新たな生活設備の機能を発見したと言える。ベッドサイドライトや特にトイレには様々な機能のボタンが 6 つもあり、これには生活における細部に特にこだわり設備の機能を充実させ、生活の質を高めるという日本社会の特徴が感じられた。私のように初めて日本を訪れた人がこうした体験をした際はきっと、最初は驚き、次いで「なるほどこういうことか」と思い、最後には気付かないうちに「これは本当に便利」だと感じるであろう。

今回の日本訪問では大阪での一晩のみが 1 人 1 部屋で、バスルームの使用に関して他の団員と時間を調整する必要がなかったため、私は待ちきれずお風呂を体験した。お風呂は温かくまた湯船に浸かっていると筋肉がお湯の中でゆっくりとほぐれ、特にこの日移動で疲れた脚の張りが不思議と温かさに満ちた浴室内に消え、20 分後に湯船から出ると脚は夕食時の梅の漬物のように紫がかかっていて、軽快に歩くことができるなど、脚の状態が良くなった。

就寝前、私はベッドに横たわり、夕食時の日本の新米の香りを心地良く思い返しながらかこの日記を完成させた。

**日 付：11月27日（水）【1日目】**

**大学名：对外経済貿易大学**

**氏 名：喬彬**

今日は自分の人生において特別な、初めて日本を訪れる日である。对外経済貿易大学日本語学科の 2 年生である私は、以前より日本に憧れを抱いていた。そして今日ついに日本の地を踏むことができるため、心の中は興奮と好奇心に満ちていた。そして午後、全日空の便で出発することになったが、搭乗の時点ですでに日本式サービスの細やかさと温かさを感じる事ができた。乗務員の笑顔からはとても親しみが感じられ、その一挙手一投足にはプロの精神と気遣いが現れていた。また料理の盛り付けからもこだわりが感じられ、たとえ機内食であってもその見た目は非常に上品であった。飛行中、窓の外の雲海は綿あめのように柔らかそうで、日差しの下で金色に輝くなど、まるで童話の

世界に居るかのようだった。私は座席に座り風景を見ながら、間もなく始まる日本での旅について思いを巡らせたが、興奮のせいで思いは尽きなかった。

夜、私たちは無事日本の空港に到着した。時間がすでに遅かったため、私たちは空港近くのレストランで夕食をとった。驚いたことに、日本での最初の食事はすき焼きであった。店員が運んできた際の濃厚なスープの香りは瞬間に私の食欲を刺激した。ぐつぐつと鍋の中で煮込まれた柔らかな牛肉、滑らかな豆腐や様々な新鮮な野菜、そして甘めのタレが合わさることで、本当に美味しい鍋となっていた。私はまた煮込んだ牛肉を生卵につけて食べてみた。食べる前はやや迷ったが、食べてみると口当たりがとても滑らかで、味わい深く感じられた。こうした食べ方は個人的にとっても目新しくまた面白く感じた。食事をしながら皆は日本に対する第一印象について語り合ったが、皆それぞれ日本のあらゆる部分に新鮮さを感じていた。

食後はホテルに戻り休息となった。ベッドに横たわり今日のすべての出来事を思い返したが、依然として夢を見ているように感じられた。初めて日本の航空会社の飛行機に乗り、正真正銘の日本式サービスを体験し、本場のすき焼きを堪能したなど、これらすべての「初めて」に私はこれ以上ない幸せを感じた。これから先の数日間でより多くの新たな体験ができることを考えると、私の期待はより高まった。

以上が私の日本での初日であり、わずか数時間だがすでにとても印象深いものとなった。これから先の数日間でこの国の文化や魅力をより深く感じられることを願っている。

**日 付：11月28日（木）【2日目】**

**大学名：清華大学**

**氏 名：熊宝博**

今朝はホテルで和風の朝食を体験した。自分にとって朝食にお米を食べることはこれまであまりなかった。味噌汁は自分的にややしょっぱく感じるものだが、日本人は本当にこの味噌汁が好きなのだ今回改めて気付かされた。千年の古都、京都の朝の光景の中、私たちは島津製作所を訪れた。そこでは人事部人財開発室副室長、中国人職員1名及びその他の職員から熱烈な歓迎を受け、さらに同社の分析計測機器に関する紹介をいただいた。島津製作所の理念は科学技術で社会に貢献するというもので、この社には強い感銘を受けた。目まぐるしく変化する現在の世界情勢において、大型の科学研究機関がこうした初心を守り続けているのは並大抵のことではなく、この点は私たちが学ぶべきそして再認識すべきものとなった。その他、代々の島津の人々は懸命に科学研究における最高峰を追求しており、100年以上前の有人軽気球の独自開発から、その後沢山生まれた日本初ひいては世界初の研究成果、そして2002年に田中氏がノーベル化学賞を受賞するに至るまで島津製作所は歩みを停めることなく、常に発展やブレイクスルーを続けていた。清華大学の学生、特に基礎科学分野を専攻する者として私たちは自身の研究に関する写真をどのように描くべきなのだろうか。これまでの自身の体験から言えば、科学研究には根気が必要なだけでなく、蓄積による量的変化を質的变化に変える閃きが必要であり、これには任重くして道遠し、と感嘆を禁じ得ない。幸いだったのは、島津製作所のヘルスケア関連拠点であるKYOLABSにおいて、科学研究や技術革新を推進する別の方法であるオープンイノベーションの様子を目にすることができたことである。島津製作所は協働、共有、共創との研究環境を構築し、実験プロセスを可視化そしてオープン型にすることで、より多くの人に協力への参加を呼び掛けている。夏休み期間に私はケンブリッジ大学の分子生物学研究所 LMB や Francis Crick Institute 等の生物科学分野におけるトップの研究機関を見学したが、そこでも同様に研究者間の交流と協力、特に異なる分野間の意思疎通がとても重視されていた。

お昼は本場の日本料理を堪能した。お刺身や京都ならではの豆腐等、日本料理はとても上品に作られている他、使用している食器にも古風な趣の美しさが備わっていた。そして午後、私たちは京都大学に向かい、到着後はまずギャンパスを見学した。そこでは時計台と80年余りの歴史を持つクスノキが印象深かった。次いで京都大学の先生から同大学の校風に関して簡単な紹介があったが、これは実のところ午前に見学した島津製作所と呼応するものであった。京都大学の教員や学生らは国に対する概念にあまりとらわれていないようで、より多くの精力を研究に注いでお

り、且つ本当の意味で献身的な精神を備え、1つの小さな分野で何十年も研究を続けることができる。京都大学の学生らとの交流はとても楽しく、私たちはグループ討論のテーマ以外にも学業や生活、将来のプランといったことについても語り合った。皆はとても友好的で、これには我が家に戻ったように感じられた。残念だったのは楽しい時間は常に短いということであり、私たちは彼らとお別れせざるを得なかった。幸運だったのは、お互いに連絡先を交換できたことで、今後も深い交流が続けられることを確信している。

**日付：11月28日（木）【2日目】**

**大学名：中国石油大学**

**氏名：賀雨欣**

・島津製作所

共創ラボの理念は個人的に最も驚いたと同時に共感できた部分であった。かつては大部分の先端技術は独占的であり、1つのわずかな技術の不備によりサプライチェーンの断裂を引き起こしていた。しかし島津製作所は本社にわざわざ共創ラボを設立し、開発中の技術を展示している。職員からの紹介によると、その目的は皆の思想をより良くぶつけ合うことで製品をより早く市場に投入するためとのことであった。島津製作所が現在においても依然として「科学技術で社会に貢献する」との社是を実践していることを、この点は良く証明していると思つた。

同社のDESIGN JAMに展示されている書籍に関しては、開発者により多くの他分野の知識をもたらすため専門の人員が厳選しており、ファッション分野の書籍も置かれていた。こうした点も共創ラボにおける「共創」であり、共創とは絶対に人と人の交流が必要という訳ではなく、書籍内の思想と交流することでも可能であると感じた。

・京都大学

まず京都大学で地理学を専攻するMoriiさんからキャンパスを案内してもらった。キャンパス全体はとても大きく、中国と異なる部分としては、彼らの大学では実験室や教室がほぼ一緒になっていて、講義棟は学科別に区分されると同時に、至る所で彼らの日々の学生生活が様々なポスターにより紹介されていた。その後の京都大学に関する紹介の場においても、国のために貢献するのではなく、学外からの束縛を受けず、学内で1つにまとまる同大学の特徴である「自由」について詳しい説明があった。ここでは自分が正しいと思う思想について好きなように表現できる他、特定の物事のために「無意味」かもしれないあらゆる学術研究を十数年ひいては何十年も行うことができる。これこそが日本のモノづくり精神の表れであり、『菊と刀』では、日本人が途中で何かを諦めた場合は他人から軽んじられると書かれている。私は、こうした観念がすでに彼らに浸透していることから、彼らは他人の理解やいかなる理由も必要とせず1つの事を結果が出るまでこつこつとやり遂げることができるのだと思つた。これは、リズムの速い現代社会において私たちが大いに学ぶべき点である。

その後の討論では京都大学のMoriiさんそしてKotaさんと親交を深めることができた。夕食の席においても一緒に「立食」を体験し、互いの生活習慣や文化における相違点について語り合ったり冗談を言い合ったりしたことで、自分のこれまでの日本人に対する慎み深いとの固定観念に変化が生まれた。今日の午前には訪問した島津製作所人事部人財開発室の副室長さんとてもユニークで面白い方だった。そのため、1つの国や文化を知るための最良の方法は、やはり現地の人と交流することだと思つた。

**日付：11月28日（木）【2日目】**

**大学名：北京語言大学**

**氏名：楊蘊涵**

今日は大阪から千年の古都である京都に向かった。窓から早朝の大阪の様子を目にしたが、色彩がとても美しかった。道端には秋の紅葉が残っていて、道路は風情に富んでいた。その後島津製作所では同社の先進的な技術と医療設備製品について知見を得た他、博物館を見学しさらに分離技術を体験し、とても衝撃を受けた。日本企業の製

品や運営方法について知見が深められたのは非常に特別な体験であった。

お昼は懐石料理を堪能し、日本料理の色彩の美学と庭園の風情を体感した。午後は京都大学に向かい、美しいキャンパスや特徴ある吉田寮等を見学した。また講座を拝聴し、京都大学における自由の学風を体感した他、京都大学の学生らと友好的な交流を行い様々な見解が得られたと同時に、楽しい会話を通じて一部の学生と親交を深めることができた。

**日 付：11月29日（金）【3日目】**

**大学名：北京師範大学**

**氏 名：杜佩桐**

朝食を済ませた後、私たちはバスで高台寺に向かい、日本の座禅と茶道文化を体験した。この日の天気はとても良く、高台寺の紅葉、黄色く色付いた葉、緑の葉、青い空、竹林そして錦鯉のいずれも美しかった。私はこれらすべてを自分のスマホに収めようと写真を撮たくさん撮ったが、それと同時に自分の目で直に見たいという思いも重なり、とにかくせわしなくしていた。座禅の際、ある団員からの質問に答えた住職の言葉はとても印象的だった。修行の際、孤独や寂しさを感じることはありますか、との団員からの質問に対し住職は、寂しさは常に付きものであり、たとえ恋愛中で愛する人が傍に付き添っていても、時に寂しさを感じることもあると答えた。茶道体験では始まりから終わりまでのあらゆる手順において、主人の客人に対する尊重及び客人の主人に対する感謝そして皆の「一期一会」を大切に思う思いが感じられた。

温泉ホテルでは日本の浴衣を身に着け、その後ホテルの1階で夕食をとった。このホテルには美しい庭園があったが、見学などができなかったのはやや残念であった。それでも懇親会では美味しい日本料理を堪能した他、出し物を披露するなど、皆は一緒に賑やかな談笑の声の中で互いに親睦が深まり、とても幸せで楽しい時間を過ごすことができた。食後私たちは温泉を体験した。これまで教科書の中でしか知り得なかったことを実際に体験できたことはとても貴重であり、驚きと喜びが入り混じった感覚がした。

**日 付：11月29日（金）【3日目】**

**大学名：对外経済貿易大学**

**氏 名：肖瑩盈**

今日、私は茶道、座禅、高台寺の参観そして箱根温泉といった日本の伝統文化を体験した。

#### 1. 茶道

朝早くから、私は興奮を胸に茶道体験を始めた。茶室は質素且つ古風で、一種の静寂が感じられた。茶道の先生が様々な手順を披露する中で、私たちは抹茶の点て方、飲み方に関する作法を学んだ。全体を通してそれらはとても厳格かつ優雅で、日本の茶文化の魅力を強く感じる事ができた。お茶を飲む際に私は茶の香りもじっくりと味わったが、先生からはまた、茶碗の底に残ったお茶をしっかりと吸い切ることでお茶のおいしさと主人への尊重を示すことができるお話があった。お茶を飲む前にはおいしいお茶菓子もいただいたが、旺旺の煎餅に近い味がした。その他先生からは、一杯目のお茶は仏様に捧げるものとの説明があった。だが実のところ、中国の茶道は日本の茶道の源である。茶葉は当初中国において発見され薬用そして飲用されていたが、その後次第に独特の文化である茶道に発展していった。そして唐の時代になり中国の茶文化は最盛期を迎え、茶道はこの時期に完成した他、僧侶の渡日に伴い日本に伝わった。日本の茶道は特に茶葉や茶器の使用そして部分的な作法の面で中国の茶道の影響を強く受けている。これには、日本は中国文化の部分的要素を残しているのみならず、そこから独自の文化的・精神的根底を形成していることを私は認識し、5000年の歴史や文化を持つ中国としてはどのように伝統文化と現代文化のバランスを取るべきなのかについて改めて考えさせられた。

#### 2. 座禅

住職の案内の下で私たちは寺院の禅堂を訪れた。室内の日差しは柔らかく、また淡い白檀の香りが立ち込めてい

た。私たちは住職の指示に従い座布団の上に胡坐をかき、両手を組み、目を閉じて、暫しの心の旅を始めた。最初、座禅は自分にとって一種の挑戦であった。私の両脚は座禅を始めて間もなく痺れと痛みで襲われ、背筋を伸ばすことも難しくなった。また心の中の雑念は手綱を切った馬のように制御できず、平静を保つことができなかった。そのため私は呼吸に集中しようと努めたが、様々な考えに邪魔されて集中できずにいた。そこで時間の経過に伴い私は、深く息を吸ってゆっくり吐き出すように呼吸を整え、息の体内での流れを感じるようにした。正念を保ち、辛さや喜びを問わず現在の感覚を受け入れるようにとの住職の声が禅堂内にこだまし、暫しの頑張りの後、私は次第に一種のリズムが見つかり、身体の不快感が和らぎ始め、心も段々と平静を保てるようになった。そして私はこれまでにない静寂を感じ始め、まるで自分が周囲の世界と1つに融合し、すべての悩みや不安が禅堂の空気の中に消え去った気がした。座禅が終わり、私は心の洗礼を受けたかのように大きな満足感と落ち着きを感じた。今回の座禅体験において私は、本当の落ち着きは外界の静けさによるものではなく、心の中の静けさによるものであることをしっかりと認識できた他、日々の慌ただしい生活の中でどのようにひと時の静寂を見つけ、混乱した世界の中でどのように穏やかな心を保つのかを学ぶことができた。今回の体験は今後の自分の人生において貴重な精神的財産になっていくと確信している。

### 3. 高台寺の参観

午後、私たちは高台寺を訪れた。高台寺は1606年に開創された日本で有名な景勝地である。寺院内の高く聳える歴史ある樹木そして一面の紅葉からは、まるで自分たちが美しい絵巻の中に居るような感覚がした。高台寺は日本の禅宗文化を融合した独特な建築スタイルを採用していて、見るのに夢中になった。

### 4. 箱根温泉

夕刻、私たちは箱根温泉に到着した。ここは環境がとても優美で、水質も透き通っていて、温泉に浸かると1日の疲れがきれいに取れた。温泉では日本の伝統建築を觀賞しながら、大自然の恵みを体感することができた。今回の箱根温泉での経験を通じて、私は日本の温泉文化に対して強い興味が生まれた。夜に私たちは懇親会を催したが、私たち5大学の団員は正にこの夜から次第に親睦が深まり、親しくなり始めたと思う。

まとめ：

この日、私は日本の伝統文化の魅力を強く感じる事ができた。茶道や座禅から高台寺の参観さらには箱根温泉の体験まで、これらすべてを通して日本文化への知見を深めることができた。今回の旅により私は、文化はコミュニケーションにおける懸け橋であり、お互いの文化を知りそして尊重してこそ、友情が深まり交流が促進されることが分かった。これから先、日本やその他の国の伝統文化について知見を深めることで、自身の人生経験を豊かにしたいと思う。

**日 付：11月29日（金）【3日目】**

**大学名：中国石油大学**

**氏 名：肖金雪**

今日、私たちは悠久の歴史を持つ高台寺を訪れた。高台寺は絵画のような風景を擁する京都にあり、その静けさと多くの文化的要素により数多の観光客を魅了している。高台寺では座禅を体験した。これは古くからある瞑想による修行方法で、静座により心の平静を実現し自己反省することを目的としている。住職の指導の下、私はいかに呼吸を整え、正しい姿勢を保ち、心を今現在に集中させるのかを学んだ。こうした体験を通じて私は、まるですべての悩みや雑念が遥か彼方に消えたかのように心の中の暫しの静寂を感じた。次いで茶道体験に参加した。茶道はお茶を入れる芸術であるのみならず、それ以上に一種の精神的修練そしてマナー文化の表れである。茶室において私は抹茶をいただく際の正しい作法を学んだ。茶碗を温める、茶碗をきれいにする、そして抹茶を点てるといったあらゆる所作には正確さと優雅さが求められるなど、儀式的な緊張感が満ちていた。先生からはこれらの作法の意義及びいかに茶道を通じて根気、尊重そして感謝の心を育むのかについて詳しい説明があった。今回の体験は味覚における享樂であるのみならず、それ以上に心の洗礼であった。

高台寺に別れを告げ、次に私たちは風光明媚な箱根に向かった。箱根は有名な温泉地であり、天然の温泉と美しい自然風景で名高い。そして私たちは山を背に建てられた和風旅館に宿泊することになった。旅館の庭園は非常に

優美で、周囲の自然景観と調和し一体となっていた。そこではまた温かな温泉そして周囲の静寂を堪能し、世界全体が静まり返ったように感じた。庭園は紅葉で埋め尽くされ、色とりどりで、その美しさは息をするのも忘れるほどであった。秋風がそよぎ、葉がゆっくりと舞い落ちる様はこの温泉地に若干の詩的情緒を添えていた。私は他の団員と庭園を散策し、秋の爽やかさと大自然の美しさを堪能した。山上にある神社はまたこの景色に神秘さと荘厳さを添えていた。神社の建築様式は洗練された古風なもので、周囲の自然環境と互いに引き立て合っていた。石段を登っていると、その一步ごとに神様と対話しているように感じるなど、日本文化における自然と神様への畏敬の念を実感することができた。

この日、私は日本の伝統文化の魅力を体験し、座禅における静謐や茶道における優雅さ、温泉や庭園の静けさのいずれからも、心が洗われ昇華するのを感じた。これは個人的に忘れられない体験となった。これらの素晴らしい記憶を心の奥底に留め、次の探求の旅を待ちたい。

**日 付：11月30日（土）【4日目】**

**大学名：清華大学**

**氏 名：袁嘉惠**

今回、自分にとって初めてのホームステイを経験した。実際対面する前に文書で4人のホストファミリーの情報を見た時、とても典型的な家庭だと思った。旦那さんが奥さんより1つ年上で、30歳近くの時にお子さんが生まれ、6歳の男の子と4歳の女の子がいる、これより典型的な家庭はあるだろうか。

豪華なホテルニューオータニで対面した後、私たちは電車で浦和に向かった。そして駅を出るとすぐにサッカーの雰囲気の色濃く感じた。駅近くのサッカー関連ショップ、地上のサッカーボールの装飾、道路沿いの浦和レッズのフラッグは浦和のサッカー文化を示していた。私のホストファザーもサッカーファンで、大学時代にサッカーをしていて、浦和に住むことになったのもこのサッカーの雰囲気の影響を受けたからとのことであった。他のホームステイ先とは異なり、私たちは観光地には全く行かず、彼らの日常生活をリアルに体験した。

お昼は、コスパがとても高い寿司店で食事をし、午後はショッピングセンターを回り、家に戻ってからは近くの公園で子どもらとサッカーや野球をし、それから家に戻り食事の準備をした。その際私はトマトと卵の炒め物を作った。食後は子どもらと色々なゲームで遊び、苦勞しながらも英語とグーグル翻訳で交流した。ここでは私の心は本当の意味で落ち着き、自分の家に戻った感覚がした。一般的な日本人家庭の日常生活について知見を深める、これこそがこの活動の本来の意味なのかもしれない。

**日 付：11月30日（土）【4日目】**

**大学名：清華大学**

**氏 名：張恒睿**

日本には朝に温泉に浸かるという伝統があるが、この日の朝はどうしても起きることができず、しかもスケジュールが迫っていたこともあり、朝の温泉を体験することはできなかった。この日、私たちは東京に移動し、ついにホストファミリーと対面することができた。ホストマザーは吉林省延辺出身で、厦門大学の本科卒業後に日本に留学し、その後日本に留まっている。息子さんは早稲田大学の1年生で、ほとんどの期間を日本で生活しているが、中国語は交流には十分なレベルで、思い出せない単語がある時は英語で交流できた。そのためホストファミリーとは言語的にまったく障害がなく、楽しくおしゃべりすることができた。

ホテルから出発した私たちはまず浅草寺に向かった。浅草寺の建物や風景はとても美しかった。私たちはここで焼き団子を食べた他、おみくじを引き、大吉を引き当てることができた。浅草寺の門の辺りは商店街になっていて、様々な美味しい食べ物や記念品が売られていたが、とにかく人が多かったため、隅々まで見て回ることができなかった。

次いで私たちは東京スカイツリーに向かい、そこではまずスカイツリー傍の商業施設で昼食をとることになった。私は昼食に牛丼を選んだ、というのもこれまで中国で何度も食べていて、日本で本場のものを食べたいと思ったからで

ある。その際、ホストファミリーはまた彼らが気に入っているたこ焼きを買って私に食べさせてくれた。外側はパリッとしていて、箸で少し剥がしてから卵を入れるととても美しかった。その後、私たちはチケットを買いエレベーターでスカイツリーを登った。スカイツリーから東京全体を見下ろすと、たくさんのランドマークを目にすることができるなど、その景色はとても壮観だった。

その後、ホストマザーは用事があるとのことで、私と息子さんは一緒に池袋に行きボウリングをした。この娯楽施設はとても人気があり、番号を受け取ってから1時間待つてようやく遊ぶことができた。後で分かったのだが、ここは息子さんがアルバイトをしている施設の系列店で、この施設では従業員に優先権があるとお客さんに思われぬよう自身の勤め先の店を利用することを禁止しているため、今回わざわざ遠くの店に来たとのことであった。順番を待つ間、私たちはゲームセンターで遊んだ。中国のゲームセンターと比べ、ここにはたくさんのゲームがあった他、遊び方もやや異なっていたなどいずれのゲームも楽しく遊ぶことができた。またボウリングは個人的に苦手だったが、1ゲーム目は驚くべき手の感覚と運で彼に勝つことができた。だが2ゲーム目には化けの皮が剥がれ、あっけなく負けてしまった。

夕食はホストファミリー宅近くのお店で鉄板焼を食べた。そこでは特に和牛が美味しく、食感が非常に良かった他、柔らかく肉汁も溢れていた。食後私たちはスーパーを見て回り、家に戻ってからは暫し語らい、マンション内の自習室で一緒に宿題をするなど、家庭内の雰囲気はとても暖かかった。

**日 付：11月30日（土）【4日目】**

**大学名：北京師範大学**

**氏 名：楊宇軒**

朝食を済ませた私たちは天成園を離れ、バスでホテルニューオータニ東京へ向かった。道中では、ホストファミリーはどういう方々だろうかと考えを巡らせつつ対面への期待に胸が弾んでいた。またバスの中では暫しの日本語学習ブームが起きていた。「ありがとうございます」については皆が数日前に習得していて、今では「初めまして、私は〇〇です。どうぞよろしく申し上げます」のような挨拶を学んでいた。

ホテルニューオータニに到着し私たちはとある部屋に案内された。その部屋にはホストファミリーの皆さんが座っていて、私たちは前の方に立ち、先生から名前を呼ばれた人から順番にホストファミリーと共にホームステイ活動を始めるという流れであった。私は部屋の中を見渡し、誰が私のホストファミリーなのか予想していた。以前のメールでは2人のお子さんがいるとのことで、私は同じ服を着た2人の男の子に目がいき、ひょっとしたら彼らかもしれないと思った。その後先生から「楊宇軒」と名前を呼ばれると、結果はやはり私の予想通りであった。ここ最近連絡を取り合っていた方々と初めて対面することができた。皆さんはとても親切に挨拶してくれて、私は胸を躍らせながら彼らと一緒にホテルを後にした。

彼らは、私がたくさんの風景を見られるように助手席に座らせてくれた。また道中、彼らは様々な建物や風景について熱心に紹介してくれた他、私が理解しやすいように話す速度を抑えてくれていた。

そして私たちはまず浅草寺に向かった。メールで連絡をした際にうどんを食べたいと言っていたため、私たちの最初の目的地はうどん店となった。これまで数日間和食やパンを食べてきた後に熱々の麺を食べた私は涙が出るほど感動した。日本では麺をすする音を出すのはその麺が美味しいことを意味するため、私もそれを真似てすする音を出してみた。食後、私たちはとある屋台の前で福島県の甲冑の体験をし、さらに無料の記念バッジをいただいた。そして寺に入る前に手を洗ったが、寺の中の「神様」が誰なのか実は私にも分かっていなかった。暫く見学した後、皆は常香炉に向かい手を使って煙を自分の身体に浴びせた。ホストファミリーの話では、こうすることでご利益が得られる他、邪気を払うことができるとのことであった。そこでは皆が自身の頭に煙を浴びせ、「頭、頭」と言っていたため、私もそれを真似てみた。その後私たちはおみくじを引き、私と2人のお子さんは吉で、大人2人は凶であった。凶を引いた場合は、そのおみくじを寺院内の特定の場所に結ばなければならず、吉の場合は持ち出すことができた。

浅草寺を後にした私たちはチームラボプラネッツというアートミュージアムを訪れた。ここでは靴や靴下を脱ぎ、空間内の作品群に身体ごと没入し、自身と周囲のアートとの一体感を感じる事ができた。私にはアートの鑑賞力がなく、

わあと驚くことしかできなかつたが、それでもとても楽しむことができた。これもまた設計者が望んでいることだと思う。

その後私たちは車でホストファミリー宅に戻った。道中、私は京都とは異なる高層ビルの他、きれいな街並み、海面、紺碧の空を目にしたが、車内で流れる音楽を聴いていると次第に眠くなった。50分ほど経ち周囲の景色も高い建物から次第に田畑に変わる頃、私たちは家に戻る前にスーパーに立ち寄った。スーパーではたくさんのお菓子の他、鍋の食材を買い、会計を済ませた後2人のお子さんは徒歩で、私たちは車で帰宅した。

ホストファミリーの住まいはとてもきれいな一戸建てで、私の印象の中の日本人の住まいとは異なり、とても大きくモダンな内装であった。まず家の中全体そして私の寝室を案内いただき、それから1階に戻り、皆でドラマ「仁」を観た。その後、鍋の支度を手伝い、大根の皮を剥いた。日本の鍋は中国の火鍋とは大きく異なる。日本の鍋は水中で昆布を煮立たせた後で昆布を取り出しスープとしており、それはほぼ澄んだ水に近い。そこに食材を入れ煮立たせ、火が通ったら取り出し醤油のようなタレにつけて食べる。中国の火鍋のような濃厚さはないが、油っこさがない分さっぱりしていて、とても美味しくたくさん食べる事ができた。食事の際は学校内の話や中日両国の食事の違いなど様々な話題について交流した他、皆に中国語の短い文章を教えるなどしたが、残念ながら夜に外国語のコンテストがあったため、2階に上がりその準備をすることになった。ホストファミリーはコンテストが終わる夜10時過ぎまで私を待ち、飲み物をいれてくれた他、明日向かう秋葉原の紹介をし、さらにはお風呂の準備まで整えていた。彼らにはとても感謝している。

**日付：11月30日（土）【4日目】**

**大学名：中国石油大学**

**氏名：林星翰**

朝早く、私たちは心を込めて選んだお礼の品を手箱の根のホテルを後にし、ホストファミリーと対面すべくホテルニューオータニ東京に向かった。私のホストファザーは年配の方で、外国人留学の橋渡しをする企業に勤めている。偶然だったのは、中国石油大学の聶曉宇先輩も昨年彼のお宅でホームステイしており、これには今回のホームステイに対する私の期待も高まった。私を前にしたホストファザーは嬉しそうに笑顔を見せ、私たちはその場で記念写真を撮った。それから彼は私をかのかの有名な浅草寺に連れて行ってくれた。そこは多くの人でごった返し、香炉の煙が立ち込めていた。私たちは寺の一番奥へお参りに向かい、両手を合わせて願い事をした。浅草寺の荘厳さと静けさからは日本の宗教文化の魅力を感じることができた。次いで、ホストファザーは上野公園の遊覧に連れて行ってくれた。緑の木々が生き茂り、鳥がさえずり、そして花が香るこの場所では日本の環境に優しい文化を身にしみて感じる事ができた。そして私たちは公園内を散策し大自然の恵みを楽しんだ。昼食には本場のお寿司を堪能した。私がこれまで食べていたものと食感がやや違っていたが、これまでにない体験でもあった。

午後、私たちは電車で国立美術館の見学に向かった。美術館内の逸品ぞろいの芸術品に私の視野は大いに広がり、日本のしっかりした文化的根底や芸術の雰囲気を感じることができた。それぞれの作品はまるで感動的な物語を伝えているかのようで、私はそれらの作品にのめり込んだ。夕方、私たちは東京都庁を訪れエレベーターで45階に上った。高い展望室から東京全体を見下ろすと、そこには美しい景色が広がっていた。夕陽に照らされた富士山は非常に壮麗で、私はその景色に魅了された。またこの時、まるで自分がファンタジーの世界に居るよう感じ、とても大きな満足感が得られた。その後ホストファザーの古い友人も来るとのことで、私たちは一緒にホストファザー宅へ向かい夕食をとることになった。夕食はホストファザー手作りの得意料理であるたこ焼きだった。味は本当に美味しく、彼は3回に分けて数十個作ってくれたので、私はお腹いっぱい食べる事ができた。また私たちはビールを飲み、楽しく和やかな雰囲気となった。食事の際はお互いのことそして見聞きしたことについて紹介し合い、日本現地の風土と人情を本当の意味で感じる事ができた。その夜、ホストマザーが客間に布団を敷いてくれた。布団はとても柔らかく快適で、すぐ眠りにつく事ができた。この日の経験は驚き、喜びそして感動に満ちたもので、私は日本に対する知見や認識をより深める事ができた。これから先の日程でより多くの収穫や経験が得られることを願っている。

日 付：12月1日（日）【5日目】

大学名：北京師範大学

氏 名：劉夢楠

楽しい時間は常に短いもので、この日はホームステイ最終日であった。朝 7 時、起床したホストファミリーは 30 分ほど経済ニュースを見て、ホストマザーは 7 時 20 分頃に子どもらと起床した。その後ホストファミリーは朝食の準備を始め、ホストマザーは家事を行い、子どもらは自ら服を着て顔を洗い歯磨きをし、8 時頃に一家全員で朝食をとった。日本の一般家庭の朝食における主食は通常、パンかご飯のどちらかとなっている。彼らの朝食は栄養バランスにとっても配慮されていて、全体的な量はさほど多くはないものの種類が豊富で、特に代表的な「漬物（中国でいうところの塩漬け）」は欠かせないものになっている。その他に「味噌汁」もまた日本人の朝の食卓における常連となっている。日本の小型家電の品質はととても優れていると聞いていたので、私は自分の父親用に「シェーバー」を買う予定だった。朝食を済ませた後、ホストファミリー一家はその「シェーバー」を買うため私を連れバスで品川区の商業施設に向かった。日本のバスは人々が日頃利用する移動手段の 1 つであり、彼らは一般的に Suica を使って交通機関を利用する。バスにはまた専用の観光バスがあり、1 日乗車券を買うことで、バス路線に従い浅草や東京タワー等で観光することができる。こうしたチケットは終日利用が可能のため東京観光に訪れた観光客にとっては非常にありがたい存在であり、またホテルで観光バスの乗車券を直接購入できることから、とても便利である。

売場では「シェーバー」の種類が多かったが、私はラベルや紹介文から大雑把なことしかわからず、ホストファミリーはわざわざ店員さんに各製品の違いについて問い合わせ、それらの長所と短所を私が可能な限り理解できるように伝えてくれた。このプロセスにおいて私は、刃の形状や数によりそれぞれの機能が決まる、また様々な人向けの持ち手が存在するなどの、これまで知らなかった「シェーバー」に関するたくさんの知識を得ることができた。

買い物を終えた後は子どもらと一緒に公園に向かった。そこで私はとても衝撃を受けた。日本は土地が狭いことから都市でも大きな公園は稀であり、私は当初、面積が単に小さいだけで公園を構成するもの自体はそろっていると思っていた。しかし今日訪れた公園は私から言わせれば単に子ども用の遊具が設置された植生のない空き地であったが、驚くことに日本の人々はこれを「公園」と呼んでいた。またそれ以上に驚いたのは、このような何も無い場所でも子どもらがとても楽しそうに遊んでいたことであった。

その後、私たちは天祖神社にお参りに行き、現地の「祭り」を体験した。中国では、大都市（例：北京）においてこのように文化イベントとショッピングの属性を兼ね備え、さらに固定の開催場所を擁する小型の定期市はあまり見かけない。対して日本では、こうした大小様々な神社は数えきれないほど多く、また通常は住宅街近くにあるため、日本の人々の日常生活に多くの利便性と楽しさをもたらしている。

「祭り」を見学し終えた私たちはラーメン屋で昼食をとることになった。そこで私は「中華そば」（訪日前にちょうど中華そばの由来について学んだ）を食べ、その後ホストファミリー宅に一度戻り休憩し、最後に彼らは一緒に電車に乗りホテルまで付き添ってくれた。ホストファミリーの子どもらはわずか 4 歳と 6 歳だったが、どうしても私を見送りたいと言ってくれただけでなく、すすんで私と手をつないでくれた。昨日の彼らの恥ずかしがる様子はまだ記憶に新しかったが、今ではもう自然に私に様々なことを尋ねて交流したり、一緒に遊んだり、私と手をつないで道路を渡るようになっていた。もちもちとした子どもらの手のひらからは彼らの温度が感じられ、私の心の中もより一層暖かくなった。

12 月の東京の天気はととても良く、こうした美しい日は本当にお別れには相応しくないと思った。

日 付：12月1日（日）【5日目】

大学名：对外経済貿易大学

氏 名：汪婧儀

おそらく前の日に疲れすぎたせいかわ、日頃早起きな私は 9 時近くに目が覚めた。階段を降りるとホストマザーはすでに盛りだくさんの朝食を作り終えていた。彼女の料理の腕前は文句のつけようのないほど素晴らしく、昨日の夕食そして今日の朝食のいずれも手が込んでとても美味しかった。私はそれらを写真に収めたかったが、その一方で写

真を撮るのが申し訳ないという思いもあり、写真に収められなかったのはやや残念であった。だが、私はありったけ食べられたので、私のお腹でこの美味しさを記録したいと思う。

事前のメール連絡で私が公園を散策するのが好きだと知ったホストマザーは、私のためにわざわざ公園のリストを作り、私が行きたい公園を選ばせてくれた。そして客間で娘さんとお別れをし、互いに感謝を伝え、再会を誓い合った。その光景を見たホストファザーは笑いながら「感謝会」のようだと言っていた。

娘さんは期末試験が近く自宅で試験勉強をするとのことで、私はご夫婦と共に美しい稲毛海浜公園に向かった。そこはあらゆる場所が想像通りの夢のような美しさだった。予想外だったのは海辺の歩道からの眺望で、雪に覆われた美しい富士山を眺めることができた。静かな公園内では樹木その他、海岸の景観も楽しめるなどたくさんの見どころがあり、散策やおしゃべりをしながら素敵な午前の時間を過ごした。海風が吹き付けると潮の香を感じ、海鳥が空を飛んでいる。優しいご夫婦と静かで素敵な時間を過ごせたことは、個人的に東京での独特な、忘れ難い、そして大切にしたい思い出となった。

公園内のレストランで食事を済ませた後はすぐに都心に向け出発することになった。ホストファザーは首都高速で車を走らせ、ホストマザーは道中ユニークな場所を見かけると「見て、東京タワーだよ！」といった感じで私に窓の外を見るように知らせてくれた。そのおかげで私は東京のたくさんの名所を目にすることができた。車内で私は間もなくお別れとなる名残惜しさをひそかに覚えつつ、1秒1秒の時間を静かにかみしめることしかできなかった。

その夜パンを食べたくなり、事前に情報を集めていた有名なパン屋を続けて3軒回ったが、どれも売り切れていて無駄足となってしまった。仕方なく早稲田大学近くを散策し、食べたかったイタリアンレストランも満員だったため、さらに歩き回った結果、最終的に沖縄料理のお店でそば定食を食べることになり、そこではさらに泡盛も注文した。以前教科書で見かけた沖縄の特産物が目の前に生き生きと置かれ、お店のご主人はとても温和で優しく、泡盛もとても美味しかった。食後は早稲田大学内の WASEDA-SHOP でワセダベアとその他関連グッズを買いホテルに戻った。こうしてまた幸せな1日に円満なピリオドを打つことができた。

**日付：12月1日(日)【5日目】**

**大学名：対外経済貿易大学**

**氏名：馬莉姫**

今朝は早くに目覚めたが、1階に降りるとホストファザーがすでに食事の準備をしていた。

ホストファミリーの家庭は他の一般的な日本の家庭とはやや異なっていて、ご夫婦共に仕事をしているが、奥さんはさらに学業があるとのことで、家事のほとんどを旦那さんがしていた。

朝食はとても豪華で、焼き魚、卵焼き、チャーハン、豆腐のスープなどテーブルの隅々まで料理が並んでいた他、食後にはフルーツやヨーグルトもあった。私たちはNHKのニュース番組を見ながら食事をし、ニュース内の様々な問題について話し合った。それは普段の家庭の形そのもので、ありきたりながらも幸せであった。そしてホストファザーはまた彼お手製のさつまいものお菓子を持ってきてくれて、それはとても美味しかった。

食後にお茶を飲んでいたら、テレビでは日本が開発したロケットの発射画面が流れ、ご夫婦も立ち上がって画面に近づいて観ていたが、残念なことに発射は失敗に終わった。いずれの国の民衆は皆自分たちの国がより良く発展することを願っている。中国はロケットの発射を何十回としているが、失敗するケースはほとんどないため、現在中国では多くの子どもが「宇宙飛行士」になる夢をもっているということを私はそこでやや自慢げに伝えた。

日本のニュースには1つユニークな点があった。それは中国やアメリカといったそれぞれの分野で発達している国と日本を比較した上で、日本の各分野に存在する問題への批評をしていたことである。日本は国土的にとても小さな国であり、あらゆる面で他をリードするのは困難であるはずなのに、ニュースでは常に自国の各業界を世界トップ基準と比較することで、自身の発展を促していた。こうした点は私自身としても学びそして認識を改めるべき部分だと感じた。

食事を終えた私たちは浅草寺に向かった。ホストファザーはとても博識で、見学中彼は様々な観光スポットの歴史や文化そして由来について教えてくれて、私は多くの知見を得ることができた。彼は仕事では素晴らしいリーダー、生

活では素敵な旦那さん、料理では良いコックさん、そしてとても優れたガイドであった。

私が京都にいた時点で京都の料理は味が薄いということを伝えていたため、昼にホストファザーは東京で150年の歴史を持つ料理店に私を連れて行ってくれた。店内は伝統的な座敷形式を採用していた。また料理にはねぎがたくさん添えられていたなど、メインやデザートを問わず関東の味付けは関西よりもやや濃く、個人的にはこの関東の味付けの方が好みであった。

**日付：12月1日(日)【5日目】**

**大学名：北京語言大学**

**氏名：李浩楊**

今日はホームステイ2日目で、日本に来てから5日目となる。1晩ぐっすり眠れたことで、日本に来てからの数日間で溜まった疲れは完全に吹き飛んだ。そして昨日立てた計画通り、私たちはまず神保町を訪れ、主に書店を何軒か見て回り、そのついでに周辺地域も散策することになった。神保町で私たちは古本を専門に経営している澤口書店、150年以上の歴史を持つ東京堂書店、そして名前を忘れてしまったがチェーン経営の書店を訪れた。3つの書店が重視している点やスタイルはそれぞれ異なっていたが、いずれのお店でもサービス意識や配慮は例外なく優れていた。これらは些細な点に示されていて、例えば澤口書店の店員は私が初めての訪日で、なるべくたくさんの記録を残したいことを知ると、店内で写真撮影をしたいとの私の要望を快く叶えてくれた。また東京堂書店の店員は専用の紙を使いとても丁寧にしっかりと本をラッピングしてくれた。こうしたサービス意識や配慮は従業員に限ったものではなく、店を訪れるお客さんにも自然と浸透していた。澤口書店で本を選んでいる時、私が近づいてくることに気付いた足の不自由なご老人が、私が言うより先に「すみません」と言いながら道を譲ってくれた。これには私自身本当に驚きそして嬉しく思ったと同時に、本好きな人はやはり皆優しいのだとつくづく感じた。

お昼になり、私たちは神保町で有名な馬子禄牛肉面で昼食を取った。この店では牛肉面のスープが本場のものである他、麺の太さやセットメニューを自分で選ぶことができる。こうした点は中国国内でファストフード化された多くの「蘭州拉面」系列店では実現不可能である。1杯のラーメンを思う存分お腹に入れると、慣れ親しんだ味がお腹の中で広がり、先日あまり口に合わなかった日本料理により「傷を負った」胃腸がにわかに活力を取り戻したような気がした。嬉しそうに食べている私を見て、ホストマザーも安堵の笑顔を見せていた。

食後、私たちは引き続き神保町周辺を散策し、しばらくすると御茶ノ水付近の絶景の川に着いた。そこでは重機による都市開発作業を間近で見ることができる他、総武線、中央線、丸ノ内線という3つの電車がビルと川筋との間で1つの画面を構成する素晴らしい景観を目にするチャンスがある。最終的に今回はタイミングの問題で、丸ノ内線と中央線の電車が通過した時の風景をそれぞれ撮影したにとどまり、やや残念だったが、それでも写真には十分に都会的な雰囲気があった。

その後、私たちは秋葉原を散策した。そして私が気になった商品を買おうか迷っていた時、時間はすでに、ホテルに戻らなければいけない午後3時20分になっていた。そのため、残念さと名残惜しさを抱えながらホストマザーと彼女のお母さんにお別れを告げ、急いでホテルに戻り団員らと合流した。

**日付：12月2日(月)【6日目】**

**大学名：清華大学**

**氏名：邵瑞超**

今日の午前、私たちはホテルニューオータニで同ホテルのごみ回収システムそして水処理及び給電システムを見学した。その際私たちは、ホテルニューオータニには独自のごみ回収システムがある他、脱水、生物分解等の方式を通じてホテルで生み出されるすべての生ごみを肥料に変えていることを知った。またさらに、これらの肥料はホテルと契約している農家が購入し、その農家が生産した作物は最終的にホテルの社員食堂用として活用されていた。私は、ホテルニューオータニが20年ほど前からすでにこうしたごみのリサイクルの理念を持っていたこと、そして現在でも全

ホテルの中で別格の存在であることにとても驚いた。こうした点からは、ホテルニューオータニの持続可能な発展及び環境保護への重視そして社会的責任感を感じた。この他、私たちはまたホテルの予備用発電システム及び厨房排水の処理システムを見学した。だが率直に言って、ホテルニューオータニは進んだ環境保護や持続可能な発展の理念を有してはいるが、これらの設備の多くはすでに10年以上使用していることから多少老朽化しており、一部の技術については先進的とは言えなくなっている。そのため将来的にはホテルニューオータニとしてもこうした持続可能な発展の理念を継承すると同時に、時代と共に発展する形で設備に対する更新や高度化を行い、より優れた経済効率及び環境便益を実現することを検討しても良いと思う。

午後、私たちは中華人民共和国駐日本国大使館経済商務処を表敬訪問し、経済商務処の郭参事官と面会した。郭参事官からは近年における中日両国間の貿易状況の他、産業の高度化のプロセスにおける中国企業の成長と日本への投資、及び世界情勢の中日関係への深刻な影響について詳しい紹介があった。こうした紹介を通じて私は、両国の貿易についての知見がより深まったと同時に、中日両国間の「和すれば共に栄え、争えば共に傷つく」という関係性を感じた。だがそれと同時に、目下の中日関係には依然として大きな課題が存在していることも感じた。その1つとして非常に際立っているのは、中日両国間の人員の往来に関し、中国人による日本への観光が多数を占める一方で日本人が中国を訪れるケースは少なくなっており、しかもビジネス目的がメインとなっているという点である。この結果、日本社会における中国社会への理解に多くの偏りをもたらし、それによりまた誤解を生むことにもつながっている。そのため、日本に対するビザ免除政策の実施に伴い、より多くの一般の日本人が中国を訪れ、真に中国を感じ、そして知見を深めることを願っている。そうすることでのみ両国関係の持続的発展と永続的な友好関係が可能になると思う。

夕刻、私たちは著名な住友商事を訪れた。講座形式の紹介により、私たちは住友家の創業のプロセスや住友グループの経営における信用を重んじ、確実を根本理念とし、目先の利益に走らないとの経営モットーの他、自利利他公私一如、将来を見通す及び勇敢に新しいことに取り組むという精神について知見を得ることができた。正にこうした独特な経営の理念やモットーにより、住友グループの企業は成長を続け、現在では日本の経済社会において最も重要なグループの1つとなっている。同社からの紹介を通じてはまた住友商事の多分野におけるグローバルな事業展開及び商社という日本独自の事業形態についても知見を得ることができた。懇親会では住友商事の従業員とより踏み込んだ交流をし、彼らの日本本社及び世界各地での勤務経験について知見を得ることができた。私たちとしても多くの日本人従業員が中国を訪れたことで、中国をより深く知りそして好きになったことをとても嬉しく思っている。この点は両国における民間交流の重要性と必要性を改めて裏付けている。

**日 付：12月2日（月）【6日目】**

**大学名：対外経済貿易大学**

**氏 名：江嘉鎧**

「濯水利山東、濟天下公私一如、前日与祖同」。

「友みたい、命を負いて、いつまでも」。

今日私たちが訪問した企業はフォーチュングローバル500で第12位の住友商事であった。住友商事を訪れる以前、中国には「商社」という形態の企業が存在しないことから、私自身も「商社」の概念について詳しく理解はしていなかった。資料を見た私は当初、住友商事はリソースを統合し工場と消費者の懸け橋となる中間業者の役割を担っていると単純に考えていたが、住友商事への訪問を終えた際には「商社」という言葉に対しより深い知見を得ることができた。

住友商事株式会社の本社ビルに到着するとすぐに、現代風と古風という特徴が共存した建物が印象的に感じられた。この本社ビルは東京の都心に位置しており、外観的にはあでやかな観光スポットと比べると控えめ且つ味わい深いものであったが、私たち一行がゲートから中に入ると、内部の装飾からは木製建築と現代的なシンプルさが融合する様子が感じられ、こうしたスタイルは個人的にこれまで目にすることがないものであった。

広くて明るい会議室で私たち一行は住友商事の代表者らから熱烈な歓迎を受けた。初めに、17世紀に開いた小規模な書店から現在では世界的に有名な総合的企業グループに発展しているという住友グループの悠久の歴史について紹介があった。また住友商事の事業内容（鉄鋼、資源、エネルギー、機械、化学品等多くの分野を含む）の他、それらの世界市場における重要なポジションについて紹介があった。これらの紹介により私は、住友商事が鉄鋼や資源分野で多くの蓄積があり、進んだ採掘技術及び豊富な鉱物資源を擁している他、エネルギー分野では再生可能エネルギーの開発と応用に積極的に携わるなどエネルギー構造の最適化を推し進め、機械及び化学品分野では絶えず技術革新や製品開発を行うことで顧客に高品質の製品やサービスを提供していることを知った。

住友商事の事業内容の紹介において個人的に最も印象的だったのは住友商事の中国政府との提携事業で、具体的には住友商事の山東省政府との水道水の浄化に関する提携事業である。私は山東省生まれで実家は山東省青島市にあり、2011年から私の生活用水の浄化とリサイクルにおいて住友商事の協力があつたことを今回知り、言葉で表すことのできない思いが私の心の中で激しく沸き上がった。住友商事による関わりは私の故郷に進んだ浄水技術をもたらしたのみならず、現地市民の生活の質を大きく高めるものであつた。住友商事の山東省政府との提携は水道水の浄化のみならず、さらに環境保全、エネルギー等多くの分野に及んでいる。こうした全面的な提携は現地の経済発展を促進すると共に、中日両国の友好交流にも大きく貢献するものである。

山東省生まれの私は自分の故郷にこのような提携パートナーがいることを誇りに思っている。住友商事による関わりは私の故郷に進んだ浄水技術をもたらしたのみならず、現地市民の生活の質を大きく高めるものであつた。これから先、住友商事の山東省政府との提携はより深まり、双方の人々により多くの幸福をもたらすと私は確信している。

私の感謝の気持ちを示すため、文頭に自作の俳句をしたためる。こうした提携はビジネス的なもので互いに必要とするからこそのもではあるが、市民生活に恵みをもたらす行いであると言える。

**日 付：12月2日（月）【6日目】**

**大学名：中国石油大学**

**氏 名：陳依揚**

私たちは朝早く起きてホテルニューオータニ屋上のレッドローズガーデンを見学した。巨大なフランス窓の前からは東京全体を見渡すことができ、それはまるでいしへのアメリカ映画『ウォール街』のような光景であつた。その後私たちはホテルスタッフの案内の下、ホテルニューオータニの生ごみ回収施設と排水処理施設を見学した。ホテルニューオータニは流石東京のホテル業界のトップに君臨するだけあって、回収システムの各プロセスを一体とし、リサイクル利用を実現していた。また排水処理施設は発電業務にも関係することから、さらに大きかった。スタッフの紹介では、自家発電した電気はホテル全体の3分の1を賄うことが可能で、もし東京で電力供給に関し不測の事態が発生した場合、ホテル自身の発電能力で最低限の運営を維持することができるのとことであつた。ホテル業界をリードする技術そして一貫した環境保全の精神は私たちにとても強い印象を残した。

設備の見学を終えた後、私たちは同ホテルの日本庭園を訪れた。日本の秋の風景を見る度に改めて驚きを感じ、古典的な滝と紅葉の景観が近代的な非常に高いガラス建築のビルを引き立てている様は格別な趣があつた。その後少し空き時間ができたため、同行の先生は私たちを皇居に連れて行ってくれた。この日は皇居東御苑の開放日ではなかったが、眼鏡橋から内部の宮廷建築を目にすることができ、話によるとここは最も美しいロケ地とのことであつた。ここでは多くの市民が散歩やジョギングをしていた他、高校生やカップル、そして犬を連れた人や青い眼の外国人観光客の姿を目にするなど、広々とした皇居の芝生が東京の幸せの象徴のように見えた。次いで私たちは中華人民共和国駐日本国大使館を表敬訪問することになり、先生曰く「1時間ほどの帰宅」ができるということであつた。大使館では参事官から非常に丁寧な説明があつた他、中日両国は「和すれば共に栄え、争えば共に傷つく」という関係であり、過去の歴史がすでにそれを証明しているとお言葉をいただいた。

住友商事では私たちを迎えるために様々な準備をしていて、初めに長時間の解説を行い、その後中国での勤務経験がある3名の従業員をわざわざ招き、私たちにとっての参考となるよう住友商事入社以後の業務経験などの紹介を

行った。3名ともに親しみやすく、また優れた人材であり、私たちは職業選択や個人のキャリア形成に関し多くを学ぶことができた。中国には「商社」の概念がないため、訪問以前から最も気になっていたのは住友商事であった。そして企業からの紹介を通じて商社について知見を得ることができたが、私たちの知るシステム以外にこうした非常に効率的な運営方式が存在していたことにとっても不思議な思いがした。懇親会は非常に楽しかった。出席した従業員らはいずれも中国語が堪能で、しかも話し上手で喜んで様々な紹介をしてくれたので、本当に多くを学ぶことができた。

**日 付：12月2日（月）【6日目】**

**大学名：北京語言大学**

**氏 名：楊思思**

日本での6日目は時間が流れる水のようにあっという間に過ぎていった。朝早く私たちはエコ理念で名高いホテルニューオータニの見学を始めた。同ホテルはそのエコ技術及びリサイクルにおける卓越した実績で広く名を知られている。

ホテルスタッフから同ホテルの発電設備に関する詳しい紹介があり、これらの設備は地震等の緊急時にホテルの最低限の運営を維持する電力を供給することができるとのことであった。私たちはまたホテルニューオータニの進んだ排水処理技術について知見を得ることができ、同ホテルでは厨房排水に対し攪拌・沈殿及び微生物処理をすることで油脂を取り除いており、毎日約1000トンもの排水を処理しているとのことであった。

生ごみの処理に関してもホテルニューオータニは同様にその環境保全の姿勢を守っている。生ごみはホテル内で肥料に変えられた後で契約農家が作物の栽培に利用し、それらの作物は最終的にホテルの社員食堂用として戻ってくる。発電機の余熱は生ごみの乾燥に利用され、乾燥後の生ごみは発酵処理により肥料に変わる。肥料に変えられない分解できない物質は無臭の可燃ごみとなり、さらなる圧縮によりレンガに変わり埋め立てに利用されている。金属については処理設備に挟まりやすいことから、ホテルでは各飲食店に対し運搬時は特に注意するよう求めている。ホテルニューオータニでは毎日約5トンの生ごみを処理しており、そこから5万円ほどの収益を得ている。

午後、私たちは中華人民共和国駐日本国大使館経済商務処への「帰省」をし、今回の日本訪問を通じた感想について紹介した。大使館の代表者からは先ず中日両国における経済、貿易及び技術協力といった面における緊密な関係性について紹介があった。中国は日本から進んだ家電製造技術を導入し、また高速鉄道技術についても当初は日本から学んでおり、現在では自動運転、電気自動車、スマートオーダー及びオンライン決済等において大きな発展を遂げている。また日本は省エネ環境保護及び高齢化問題対策において他をリードしており、これらは両国の協力に関し大きな可能性を提供している。しかしながら、中日両国の協力はアメリカの影響を受けており、具体的には次の面に示されている。例えばハイテク分野においては、一部の中核技術に関する交流と共有が阻害され、進んだ技術資料や設備の獲得が困難になっている。また高等教育における協力に関しては、学術交流活動が妨害を受け、共同での学校運営事業の進展が困難になり、学生や学者の相互交流も様々な制約に直面するなど、これらは協力の度合そして範囲に不利な影響をもたらしている。そうした中、中東や中央・南アジア地域では中国と日本には競争関係が存在しているが、中国の機械面の優位性と日本のブランディングを組み合わせ効率の融合を実現することで、ウインウインの局面を作ることが可能である。

次いで、5つの大学の代表者からそれぞれ発言があり、清華大学の代表者は世界文化における日本の影響力を強く指摘すると共に中国文化のPR強化について改めて考えるべきとの意見を述べた。北京師範大学の代表者は慣れ親しんだ・馴染みのない、驚きと喜び・敬服との視点から、日本訪問期間における感想を紹介した。対外経済貿易大学の代表者は文化の保存、日本人の秩序と辛抱強さ、根気よくやり続けるなどの品性から日本に学ぶべき点について紹介した。中国石油大学の代表者は中日両国の教育における違いについて中国として改善すべき点を述べた。そして北京語言大学の代表者は文化保護の視点から、中国はそれらの保護をより強化していく必要がある。日本へ観光に行く中国人の数は800万人に達している一方で中国を訪れる日本人はわずか200万人と、こうした数の不均衡は中国が世界におけるイメージに関して直面している課題を反映したものであり、私たちはこうした隔たりをなくす努

力をする必要があるとの意見を述べた。

その夜、私たちは住友商事を訪れ、同社の企業文化、組織構造そして人間本位の価値観について知見を深めた。「親睦会」では幸いにも素晴らしい日本の友と知り合い、私たちはとても楽しくおしゃべりすることができた。友人をまた増やすことができた私はとても嬉しく思った。

**日 付：12月3日（火）【7日目】**

**大学名：清華大学**

**氏 名：王婉琳**

今日私たちはみずほ銀行を訪問し、松本楼で昼食を取り、そして一橋大学の学生と交流した。みずほ銀行は日本最大の銀行であり世界規模の事業展開をしている。今回私たちと交流したのは主に中国事業を担当している行員だったが、個人的に印象深かったのは、とある女性行員であった。彼女は学生時代に金融ではなく法律を学んでいたが、中日交流の懸け橋になりたいとの夢があり、みずほ銀行が対中事業を強化していることを知り、意を決してみずほ銀行へ入行した。その後、彼女は2度に渡り対中投資業務に携わりたいとの申し出をし、最終的にその願いが叶った。今回の活動の主催者のような機関以外にも、多くの一般の人々が実際の行動により中日交流の懸け橋の構築に努めていることに私は思わず感慨を覚えた。

松本楼は梅屋庄吉氏と孫中山氏の深い友情を受け継いでいる中日友好の証人的存在であり、胡錦濤前国家主席もこの地を訪れている。梅屋庄吉氏と孫中山氏には共通した理想と信念があり、孫中山氏が中国を救うために革命を行いたいことを知った梅屋庄吉氏はためらうことなくその私財を投げうって支援をした。これまで私はこうした歴史を知らなかったが、中国の新生には梅屋庄吉氏と切り離せない関係があることを知った私は、感銘を受けると同時に歴史の多面性についても深く考えさせられた。そしてこの歴史はより多くの中国人そして日本人に知ってもらわなければならない。

一橋大学は商科で名を馳せている大学で、私たちの交流対象は主に中国人留学生又は華僑であった。私たちはそれぞれ自身の背景、生活について交流した他、若者が直面している問題や中日両国に共通した困難について討論し、多くの類似点及び相違点を見つけ、さらに提案を行った。そして最後にお互いに連絡先を交換し長い関係性を打ち立てた。

**日 付：12月3日（火）【7日目】**

**大学名：北京師範大学**

**氏 名：安懿**

今日の午前、私たちはみずほ銀行を訪れ、そこでは私たちの将来的なキャリア開発について役員の方からアドバイスをいただいた。1つめは、自身の状況を踏まえてどこで働くのかを選択する必要があるとの点で、日本の企業は求職者の専攻が合っているかをさほど重視していないため、求職者としては職探しの際に特定の企業に絞る必要はなく、自身の性格や特徴及び好きな職場の雰囲気や踏まえて自分が入りたい企業を選択することができる。2つめは、3つの言語を習得する必要があるとの点で、私たちは日本語をしっかりと学ぶと同時に英語能力も高める必要がある。そうすることでグローバル業務に携わる際の競争力が得られる。また、語学力を高めることはハイレベルの認定書を得ることでなく、コミュニケーション能力及び専門分野における語学力を高めることであり、そうすることで言葉の役割を本当の意味で発揮することができると思う。3つめは、自身の特徴や長所を明確にするとの点で、正に多くの日本企業では専攻が合っているかをさほど重視していないため、個人の特徴や長所は特に重要である。この点については個人的にこれまで考えてこなかった部分であり、自身の専攻以外に自分にはどのような長所があり、何をするのに適しているのかを真剣に考え、実際の行動で自身の長所を発揮し、仕事にも応用できるようにする必要があると感じた。4つめは、転職を前提に最初の企業に入社し、最初の数年は経験を積み、それから自分により適した場所で勤務しても構わないとの点で、これは私自身のキャリアプランに関する考え方を変えてくれた。これまで私は、卒業後にあらゆる

面で自分に適した企業に入りたいと思っていたが、これは様々な要素の影響を受けることから明らかに難しいことである。今回このアドバイスを聞いた私は彼の観点到に賛同し、転職は悪いことではなく、人生において順風満帆であることに執着した場合、自身の人生における選択肢を狭めてしまい、人生における成長プロセスを制限してしまうと思った。5つめは、人付き合いや部署運営等に関する基礎知識を学べることから、先に機関内で数年務めてから企業に行くのも悪くはないとの点であった。

この他にも、現在日本の若者は公務員になりたがらないとの話があり、それは本当なのか興味が湧いた私は午後に一橋大学でとある中国人留学生にそのことについて訊いてみた。彼女曰く、比較的安定しているため実際のところは機関内に入りたい人は多いが、中国に比べるとそれほど熱狂しているわけではなく、また機関内に入る人はいずれも非常に優秀とのことで、個人的には彼女の見解に賛同できた。

次いで、みずほ銀行の4名の行員から順に自己紹介があり、さらに私たちとのグループ別の座談会を行った。その中のある男性行員は自己紹介の際に山東省済南市出身と言っていたので、嬉しくなった私は同じく私も同郷ですと伝え、彼はそれでは後ほど改めて交流しましょうと言っていたが、座談会開始当初は彼と同じグループではなく、その後同じグループになった際も彼と席が離れていたため、直接交流する機会がなかった。だが思い掛せず、座談会終了後になんと彼は進んでWeChatの交換をしてくれた。私はとても驚き、また嬉しく思ったと同時に、このような有名企業に勤める人が私のようなちっぽけな大学生のことを思い交流しようとしてくれたことに感動した。彼は私の年齢や専攻、どこの学校なのかを問わず、真の善意と若者と交流したいの思いから私を対等な人と見なした上で私と接していることを私は感じた。私は彼にとっても感謝している。これから先、私も彼のように自身の地位や経験の如何を問わず、誠実にまた対等に他人と接したいと思う。そして、今後は経験豊富な先輩と知り合うことに尻込みすることのないようにしたい。多くの人は喜んで若者の悩みに答え、そしてサポートをしてくれるのである。

お昼、私たちは日比谷松本楼を訪れ、映像を通じて梅屋庄吉氏が孫中山氏の革命を支援したとの美談について知見を深めることができた。

午後、私たちは一橋大学を訪れ、日本人学生そして中国人留学生と踏み込んだ交流を行った。私たちは互いに多くの質問を提起した他、彼らとの交流を通じて私は日本の大学生活、就職活動及び社会の現状について知見を深めたことで、部分的な従来の印象が変わり、より立体的に日本を知ることができた。

## 日 付：12月3日（火）【7日目】

大学名：北京語言大学

氏 名：金百川

7日目、私たちはまず日本の三大銀行の1つであるみずほ銀行を訪れた。みずほ銀行では、中国営業推進部の方と出会い、私は彼の話しぶりから常人とは異なる、成功者特有の自信を感じた。また彼からは、彼自身も中国に興味があり、かつて中国で長年勤務していたとの話があり、個人的にとっても感動した。中国好きな日本人に出会う度に私はとても嬉しくなる。

みずほ銀行の歴史についての簡単な紹介が終わり、日本の三大銀行の中で中国事業を最も重視している銀行であるみずほ銀行は、中国と非常に深いつながりや関わりを持っていることを私たちは知った。その後、彼は私たちに自らの経験から5つのアドバイスを授け、それらのいずれからも多くの収穫が得られた他、それ以上に私たちの視野が広がった。例えば、彼からは日本における就職活動の基本状況について紹介があり、日本では就職の際に学習成績をさほど重視せず、人としての能力を重視している。勤務において必要な技能は入社後に改めて育成するため、日本では1つの会社で定年まで勤め上げる人も少なからずいるとのことであった。だが彼はそれを薦めず、私たちに転職することを率直に薦めた。最初の企業で数年間経験を積み、それからより良い企業に転職する、こうすることで能力の向上や視野の拡大に役立つ他、それ以上に大きな実績を挙げることができるとのことであった。その他のアドバイスに関しては、彼からは外国語の習得がとても重要で、3つの言語を習得することで人材市場において優位性を持つことができるとのことであった。

お昼、私たちはみずほ銀行に別れを告げ日比谷松本楼で昼食を取るようになった。そこでは中日友好に関する美談について知見を深めた。辛亥革命を起こした人物である孫中山氏の日本の友人として梅屋庄吉氏は、孫中山氏の革命活動を終始支援し続け、彼のために私財を投げうって資金援助をした。また日比谷松本楼は孫中山氏と宋慶齡女史の結婚式の場となっている。このお話を通じて私たちは、中日友好は終始続いており、この時代の中日友好を今後も継続し発展させていく重責は私たち新時代の大学生が担っていることを自覚した。

その後、私たちは今回の活動で2校目となる一橋大学を訪問した。日本で有名なトップレベルの学校である一橋大学は街の中心部からやや離れた場所にあったが、周囲の環境はとても美しかった。イチョウと秋の日の舞い散る葉そして彩りを添える紅葉、これらすべてが日本の風情を醸し出していた。私たちは一橋大学の学生の案内の下、同大学の講堂や図書館を見学し、日本の学生が学習に励んでいる様子を目の当たりにした他、卒業写真の撮影をしている卒業を控えた学生らの姿も見かけた。夜の懇親会は非常にスムーズで、私たちは現在各国の若者が直面している問題や課題について一橋大学の学生と意見交換をした。この交流を通じて私たちは彼らと深い友情を育むことができ、とても嬉しかった。

**日 付：12月4日（水）【8日目】**

**大学名：中国石油大学**

**氏 名：王毅竜**

旅の終わりが静かに近づくに伴い、私たちは日本への深い愛着を抱えながら最後の企業見学となるソニーを訪れた。ソニーは1946年5月に創業したテクノロジーの巨頭であり、その比類なき創意と最先端技術により、尽きない感動と喜びを世界に届けている。

ソニーの社屋に足を踏み入れると、私たちはまるで未来感に満ちたテクノロジーの殿堂を訪れたような気がした。展示エリアは撮影禁止だったが、様々な最新テクノロジー製品を直に体験できた私たちはとても心が躍った。ハイレベルで精密且つ先端的なハードウェアから様々な多岐にわたるコンテンツサービスまで、ソニーは13兆208億円という膨大な売上高によりその強大な実力を世界に示している。そして11万3000名の従業員の知恵と汗は、ソニーの今日の輝きを共に作り出している。

ソニーにおいて私たちは「input output 改善」との考え方及びそれを業務に運用する卓越した能力を強く感じた。ソニーは常に戦略の方向性を調整し、ハードウェア製造からコンテンツサービスへの転換をすると共に、予測の範囲内で絶えず卓越を追求するなどモデルチェンジを成功させている。ソニーは事業開発担当者に対し全体のプロセスを学び理解するための大きな舞台を提供しており、従業員が実践を通じて事業の発展を推し進めることを奨励している。運や試行錯誤に伴うコストはイノベーションのプロセスにおいて避けられないものであるが、ソニーは終始ポジティブさを持ち続け勇敢に進んでいる。

見学終了後、私たちはソニーへの敬意と名残惜しさを胸にホテルニューオータニに戻り、心温まる感動的なお別れのセレモニーに参加した。私たちのホストファミリー、そして日本側の関係者の皆さんが時間通り会場に到着し、この忘れ難い時間を共に過ごした。私はリードとして団員の皆と『遇見』を歌い、その歌声には今回の経験に対する思いと感謝が満ちていた。そして美食を楽しんだ後、私たちはしみじみとした思いでホストファミリー、日本側の関係者の皆さんとお別れをし、心の中は名残惜しさでいっぱいだった。

そして私たちは全日空NH963便に搭乗し、羽田空港からゆっくり飛び立ち帰国の途に就いた。飛行機が雲の層を通り抜けている時、私たちの心の中は感謝と名残惜しさに満ちていた。今回の旅は終わったが、中日両国間の友情と交流は永遠に続いていくことを私たちは知っている。

たくさんの収穫と感動を胸に、私たちは祖国に戻った。今回の旅を通じて私たちは日本の魅力を知ることができたのみならず、それ以上に中日両国の人々との深い友情を強く感じることもできた。今後、私たちは引き続き開放的且つ寛容的な心を守りながら中日両国の友好交流に自らの力を捧げたいと思う。

日 付：12月4日（水）【8日目】

大学名：北京語言大学

氏 名：鄭小芳

見学企業の最後はソニーであった。やはりフィナーレを飾るだけあって一味違って、初めにギャラリーの入口で宣伝映像を観る際、皆は隣の小さな入口がギャラリーの入口だと思っていたが、映像が終了しスクリーンが真ん中から分かれた瞬間、皆は思わず歓声を上げた。これまで多くの日本の優秀な企業を訪れてきたが、ソニーの登場の仕方はやはり個人的にとっても印象深かった。

そして解説の女性が私たちを連れ、ソニーが生み出してきた多くのハイレベルで精密且つ先端的な製品を紹介してくれた。その中には、昔からあるソニーの代表的なオーディオビジュアル製品の他、スポーツ等の分野において生み出した新製品もあった。だが個人的に最も興味を引かれたのはやはりあちこち動く aibo であった。これまで授業やネット上で関連の報道を見聞きしたことはあったが、実際にこの可愛い犬を目にして直にその体温を感じるといった体験はやはり大きく違うもので、本当に衝撃を受けた。元々ゲームやテクノロジーといったものにあまり興味がなかった私ですら、知らぬ間にテクノロジーで世界を変え、世界をより良くするとの思いが心に芽生えた。こうした影響力に私はソニーという企業の活力と生命力を感じた。これで企業訪問はすべて終了したが、個人的に最も気に入った日本企業を1社選ぶとすれば迷うことなくソニーを選ぶと思う。

最後のお別れのセレモニーでは、私のホストファミリー全員が会場に足を運んでくれた。ホストファザー、ホストマザーそして娘さんたちは皆お休みを取って私の見送りに来てくれたことを私は知っていて、特に多くの団員のホストファミリーが様々な都合で来られなかったことから、彼らがわざわざ遠路はるばる見送りに来てくれたことに、私は本当にとても感動した。今回の活動はこれで一段落つくことになるが、これが最後の対面ではない。中島さんがお別れの際に言っていたように中日両国は一衣帯水の隣国であり、飛行機でわずか3時間ほどの距離しかなく、空間的距離はこれまでもこれからも近いままである。私たちがすべきは、両国の人々の心の距離を引き続き近づけ、これまで存在していた誤解という壁をなくし、お互いの住む場所をお互いの陽の光と温かさで包むことである。時間は十分にある、再会の日を楽しみにしている。

## 学生たちの観た日本

大学名：清華大学

氏名：邵瑞超

### テーマ：4. 日中間の交流

今回の8日間にわたる日本訪問期間中、私たちは多くの日本企業、大学及びホームステイ先などを訪れ、沢山の方々と交流や討論をしたが、こうしたプロセスにおいて私は中国と日本の二国間交流の重要性及び目下直面している課題などについて自覚することができた。

まず嬉しかったのは、日本の友人らの多くが中国に強い興味を持っていることであった。ホームステイ先のホストマザーは中国での勤務経験があり、現在も中国語を学んでいた。彼女曰く、毎日中国のテレビドラマを観て中国語を学んでいるとのこと、私は彼女のそうした情熱に強く心を打たれた。住友商事では夜の懇親会において上海での勤務経験がある方と楽しく交流することができた。彼は中国の多くの都市を訪れたことがある他、中国の美食がとても好きで、将来また中国を訪れたいとのことであった。また京都大学と一橋大学では多くの同年代の学生と知り合ったが、彼らは皆様々な理由から中国との関係が生まれ、中国に対し好感を持っていた。こうした実際の例から私は、中国と日本人の間には幅広い交流における基礎があり、互いの交流においては良好な関係を築けることが多いことを強く感じた。またこの点は中日関係の基礎は民間にあるとの道理を改めて裏付けていた。

しかしそれと同時に、現在中日両国間の交流は多くの課題と困難に直面していることも知ることができた。3年間のコロナ禍により両国間の人々の往来は大幅に減少したが、それ以上に際立った問題として、両国間の人々の往来には深刻な一方向性が生まれており、中国の人々が日本へ向かう割合が80%を占め、日本人が中国へ向かう場合はそのほとんどがビジネス目的となっている。こうした現象は現在の日中交流における深刻な問題を反映している。日本は多くの中国人観光客にとって最も人気のある海外旅行先であるが、対して中国に観光に訪れる日本人は少ない。様々な理由で中国と関わってから中国を好きになる、そして日本から中国への観光客数の低迷、この2点の間に存在する巨大な現実的障壁については今後の中日交流事業において対応すべき点だと思う。今回私たちの訪日前に中国は日本へのビザ免除政策を再開したが、これをきっかけとして、日本人が中国を訪れ、中国を深く体験し、中国を知りそして好きになってもらうために、私たちにはどのような取り組みが必要なのかを考える必要があると思う。

私は常々、両国間の交流が最も重要であり、双方がお互いに交流してこそ相手を知り、誤解をなくし、共通の利益を見つけ、友好的な協力を実現すると共に、将来的なリスクや課題に対し手を携えて立ち向かうことができると思っている。そして私たちの今回の日本訪問は私たちが日本を知るプロセスであると同時に、多くの日本人が中国を知りそして理解するきっかけだと思っている。近い将来、より多くの中国の若者が日本を訪れ日本を感じると共に、より多くの日本の若者に中国を訪れ中国を知ってほしい。こうした双方向の交流と理解が両国の人々をより親しくし、中日関係のさらなる発展に尽きることのない原動力をもたらすことを願っている。

大学名：清華大学

氏名：王婉琳

### テーマ：1. 国民性についての理解

#### 2. 集団帰属意識の強さ

### 3. マナーのよさと思いやり

日本訪問において印象深かった点は2つある。

1つは、いずれの企業にも長年受け継いでいるモットーがあったという点である。しかも従業員からの紹介の際に度々引用されたことから、こうしたモットーは決して表向きのものではなく本当の意味で従業員一人ひとりに浸透していて、彼らの業務に徹底されている理念であることが分かった。こうした理念については住友グループのように、その家族における先祖の遺訓を起源としている場合もあり、島津製作所では創業者である島津源蔵氏の「科学技術で社会に貢献する」とのモットーを今日まで継承しており、人材募集の際にはこの企業理念に賛同する人材を受け入れている。よって同社の各製品は社会のニーズを満たし人々の幸福感を高めるものとなり、自然と人気を博し日本でも指折りの企業となっている。企業のモットーは彼らの経営戦略であるのみならず、それ以上に志や理想を同じくする人々が集うシンボルであると感じた。

もう1つは、日本人の国民性である。日本人からは全体的な「民度の高さ」を感じた。きれいな道路やトイレは清掃員の掃除によるものではなく一人ひとりが自主的にそうした環境を維持している。また日本人はマナーもよく、常々「すみません」と口にする他、感謝の際にお辞儀をする、お別れの際に「相手が見えなくなるまで手を振る」、食事の前に「いただきます」と言う、ひいては茶道において茶碗の模様を客人の正面にし、お茶を飲み終える際は音を立てて吸い切りをすることでお茶が美味しかったとの意思表示をするなど、こうしたマナーについては慣れないこともあり、「身に余る」が故の気まずさも感じたが、日本人が示してくれた誠意に私はとても感銘を受けた。

ここで私たち自身を顧みると、中国はここ数十年において経済が大きく発展し、世界的に発展している企業も一部出てきているが、現在の就職における習慣では、そのほとんどにおいて給与待遇のみが重視され、「この企業の発展理念は自身の理想と合っているか」といった問題が提起されることはまずない。そのため私は、企業と個人の価値観の一致を実現できるように有名企業を多数輩出している日本の経験から学ぶことが必要だと思う。それと同時に、経済が発展してきた今、私たちは日本の経験から学び、中国の街、中国の人々の民度が世界から称賛されるよう国民の民度の育成に注力するべき時だと思う。

大学名：清華大学

氏名：熊宝博

テーマ：1. 国民性についての理解

#### 4. 日中間の交流

多彩だった今回の日本訪問の旅において印象深い点は多かったが、スペースの都合によりその中から特に印象深かった2つの点について述べたいと思う。

1つめは私の日本民族に対する見方であり、以前目にした「どちらも漢字を使っているが、日本人の心の中の世界は中国とはきつと異なっている。長い歴史において異なる種族の人々がこの島で交わり、地震や津波に直面した際の無力感と絶望、厭世が遺伝子に刻まれていると同時に、広く果てしない草原がもたらすさすらいや孤高さそして野性、霧雨の江南地方のようなおぼろな物悲しさ、桜のような儂さ、死を全く恐れない態度を併せ持っており、これは対立するが融合も可能な、礼儀正しさと荒々しさ、堅実と自由奔放、情熱と無関心が交わった文化であり、中国のような何代にも渡り受け継がれる、永遠に後世まで伝わる、勇敢に突き進む、決して失敗を認めない、楽観的で運命に身を任せ、寛容でおおらかとの文化とは実際には雲泥の差がある。1つは島のやるせなさであり、もう1つは大陸の積極性と包容力である。本来根を同じくして生まれたにも関わらず、海を隔てたことで、海の向こう側は見知らぬ国になっていた」との言葉そのものであった。そして実際に訪れて感じたのはディテールへのこだわりであり、トイレの人間本位の

設計やティッシュペーパーの利便性の高い設計、また日本人の接客時のマナー等のいずれからもこの民族の細やかさを感じることができた。だがそれと同時に街や電車の中では疲れ切った人を目にし、また学生に訊ねた時にもらった回答では、日本人同士は一見良い付き合いをしているように見えるが、人と人の隔たりや孤独感はとて強く、特に日本人が家庭を持った後は自分の家庭が主となり、自身の父母や同僚等との関わりにおいてさえ心の中をさらけ出すことはないとのことであった。

2 つめは日本の学生と言論の自由について討論したことである。日本の学生からは、中国が言論封鎖をしていることで中国の国民は不自由さを感じるのかとの質問があった。例えば日本の民衆は自由に自分達の政府を批判でき、大学の学生や教員さえも自由にデモをしたり横断幕を掲げたりすることで自身の校長を批判するといったことができる。この質問に対し私は、よりハイレベルな自由は一定の境界において実現できる。中国が高等教育を実施して以降、国民の素養は大幅に高まったが、教育の普及はさほど進んでいない。そのため綿密な論理的思考能力や十分な知識レベルを持つ大衆が未だ少なく、企みをもった言論による扇動に乗りやすく、特に人口が膨大な中国独自の国情においては、ひとたびこうした人々が企みをもった扇動に乗った場合、非常に恐ろしい社会的影響をもたらす。また現在、人々は様々な主義について知ってはいるが往々にして生半可な知識であり、例えば先頃ネット上で話題となった中等専門学校の女生徒が数学コンテストで受賞した出来事に関しては、他人の不幸を利用し利益を得ようとするメディアやインフルエンサーのプロガーの他、フェミニズムを煽る個人メディアが現れ、一般の民衆はそうした言論の影響を受けやすいことから、中国においては一部の言論を封じ込める必要があるが、これは人々が不自由であることを意味するものではないと答えた。自国の社会現象に対しては、交流を通じてこそ異なる国の人々がはっきりとした知見を得ることができることをこの点はより物語っていた。

**大学名：清華大学**

**氏名：袁嘉惠**

#### **テーマ：4. 日中間の交流**

今回の日本訪問の旅を一言で言い表すならば、それは幻想的というものであった。

今回私は多くを目にし、そして学んだ。旅においてこうした収穫には、辛く、細々とした、煩わしい事前準備や様々な予想外の出来事への対応が一般的に付きものだが、引率の先生方、見学先の各企業や学校そしてホストファミリーの細やかで完璧な段取りにより私たちのそうした不快に感じる要素はすべて取り払われ、旅や学習における興奮、驚きそして楽しさだけを感じることができた。この1週間余りの旅を振り返ると、私の衣食住と移動はこれ以上ないほど充実した素晴らしいものとなっていて、私はただ他人の労働を享受し、体験と学習に力を尽くすだけであった。

全体的な印象としては、中国には日本と未だ大きな差がある部分が多いと感じた。子どもの教育について言えば、ホストファミリーの2人の子ども、そして交流した2つの大学の学生にはいずれも自由で自信に満ちた「自立的」との共通点があり、さらにスポーツの趣味があった。ホストファザーは疲れを知らないかのように子ども達と一緒に野球、サッカー、バドミントンをし、スポーツ観戦そしてレゴブロックで遊ぶなどしていたが、中国ではここまでできる父親はおそらく多くはないと思う。中国の保護者は心配性で特に子どもの学習成績への管理欲は一般的により強く、自発的に任せることはしない。それによる結果は、中国の大学生は身体能力が良くなく、生活や将来に対し情熱がなく、自分の将来を選択したり設計したりする決断力を失いがちになるということである。同じ東アジア国家として私たちは文化的には日本と近いが、こうした違いが生まれる原因としては、中国における発展度合が未だ不十分、リソースが不均衡、国民の民度が全体的に低いといった点と関係があるのだと思う。

もう1つ印象深かったのは、日本はとてディテールを重視している国であったということである。この点については日常の付き合いにおける礼儀や食事の盛り付けから推して知ることができた。文房具等の日用品においては日本の

ブランドは中国でとても人気だが、その理由は日本の製品の機能は様々なニーズを満たすことができ、あらゆる点に配慮されているからだと思う。島津製作所、ソニー、ホテルニューオータニ等の企業では日本人の製造業に対する根気とひたむきさを体験したが、そうして生み出された製品は様々な試練に耐えることができるものであった。私が日記で述べたように、中国は追いつくのが容易な、成果が早く現れる分野ではすでに多くの先進国に匹敵している、ひいてはそれらの国を追い抜いているが、現在最も欠けているのは「手間をかけただけ出来栄が良くなる」分野である。これについては根気と自己制御能力を備え、謙虚に学び、進歩を続ける必要がある。

今回の旅の記憶は一生忘れないものになると思う。その理由は前述の要因以外にも、良い仲間たちと同行できたからである。彼らと共にこうした旅に参加できたことはなんと貴重な経験であったことか。優秀な人が集まったことで今回独特な交流をすることができた。

お別れの際はとても悲しかった。その理由は自分にとって居心地の良い国を離れたからで、将来またいつ彼らと再会できるか分からず、学校に戻ればまた山のようなカリキュラム、宿題、展示、試験と向き合い、この先の人生においてもこうした非の打ちどころのない体験をする機会があるか分からないからであった。1週間という時間はなんと長いことか、私たちはこれほど多くの事柄について見て、話して、学ぶことができた。1週間という時間はなんと短いことか、初日に大阪で食べたすき焼きの甘じょっぱい味わいが今でも舌先に残っているように感じられた。そして、この1週間で自分が何をしたのか上手く言い出せない気がすると同時に、この1週間で自分が何をしたのかをすぐにでもしゃべり続けられる気がした。これこそが夢の感覚なのだろう。飛行機が間もなく着陸し夢も覚めようとしている。この夢をしっかりと楽しみ記憶しようと思う。

大学名：清華大学

氏名：張恒睿

### テーマ：3. マナーのよさと思いやり

日本人がマナーや秩序をととても重んじるという点については日本に来る前から知っていたが、日本を訪れた後においても改めて驚かされた。

日本人の言葉遣いを基に言えば、日本人の言葉遣いはとても礼儀を重視している。私自身は日本語が話せないが、日本語学科の学生の話では、日本語における多くの言葉遣いはとても礼儀や場面を重視していて、わずかな違いの言葉がそれぞれ異なる場面で使われているとのことであった。それ以外にも、私自身は日本語をほとんど聞き取ることができないが、日本の人々が「すみません」、「ありがとうございます」等の丁寧な言葉を口にしてのしをしばしば耳にした。

さらに日常生活における例を挙げる。バスの乗り降りや人を待つ或いは道を歩く際、他の人が通れるように道を空け、他の人の邪魔にならない場所で待つか或いは横並びで歩かないよう日本の先生方からしばしば注意喚起があった。私は当初、これは日本における1つのマナーだと思っていたが、その後、一部の日本人は私たちに道を塞がれた後も強引に通ろうとせず、また「道を譲ってください」と言うわけでもなく、私たちの後をゆっくりと歩いていたとの場面に遭遇した。またさらに自転車に乗っていた若い男性は、私たちに道を塞がれた後に自転車を降り手押しで歩いていた。エスカレーターではどれだけ人が混み合っても皆がきれいに左側に立ち、道を急ぐ人用に右側を空けていた。京都に向かう途中で渋滞に遭遇した際、高速道路を降りるランプには長蛇の列ができていたが、もしこれが中国であれば出口付近まで進みランプで割り込みをする車が出てくるが、ここでは割り込みをする車は1台もなく、すべての車がきれいに列を作っていた。このことから、日本人が他人を非常に思いやり、マナーを重視し、他人に迷惑をかけるのを嫌がるとの点が改めて分かった。

もう1つ印象深かったのは、私たちが訪問先の方々とお別れをする際、彼らは私たちのバスの傍まで見送りをし、

姿が見えなくなるまで手を振ってお別れをしてくれて、その際私たちも彼らに手を振ってお別れをするようガイドさんから指示があったことである。これはマナーであるのみならず、日本人のおもてなしや物事への情熱を表していて、私たちはとても心が温かくなるのを感じた。

それ以外にも、日本には非常に多くの素晴らしいユニークな設計が存在することに私は気が付いた。日本の地下鉄では朝晩のラッシュ時に女性用の車両を用意するなど、女性にとっても配慮されていた。またホストファミリーとスーパーに行った際、小さな子どもが子ども専用のカートを押しているのを見かけた。そのカート自体は小さかったが、高い旗が付いており子どもがその場にいることが一目で分かるようになっていて、気付かずに子どもに危害が及ぶとの事態が起こらないようにしていた。こうした設計はとても親切だと思った。スーパーのセルフレジにはビニール袋を広げるためのスタンドがあり、買った物が入れ易くなっていた。ホストファミリーとボウリングに行った際、長かった爪が割れてしまったが、ボウリング場では利用者用に爪切りが使えるようになっていた。日常生活における日本人の他人のニーズに対する細やかな観察と配慮については推して知ることができる。

大学名：北京師範大学

氏名：劉夢楠

テーマ：1. 国民性についての理解

2. 集団帰属意識の強さ

4. 日中間の交流

1. 日本人の国民性に関しては、ディテールや秩序を重視していて、集団意識が高いと思う。私が見学した企業などからは日本の人々の仕事に対する極めて高い責任感とサービス意識が感じられた。島津製作所の見学では、品質管理や絶えず進歩を求める企業の姿勢が印象的だった。その他、家屋内の物品の配置に関しては、大きなものでは部屋の区分から小さなものでは子どものおもちゃの配置ひいては台所用品の収納まで、それらいずれもが整然と秩序だっていた。日本企業の集団意識は非常に強く、これは企業の成功の要因の1つだと言える。住友商事を例にすると、日本の大型グローバル企業である同社の事業範囲は多岐にわたり、グループ内の他の企業や部署との協力も非常に重要になっている。こうしたグループ内での協力の精神は、住友グループが複雑な市場環境に直面した際にリソースの柔軟な制御と分配を実現することで、企業の発展における新たな変化と機会に適応することを可能にする。住友商事が採用している管理モデルには柔軟な調整の余地が多く存在しており、これは従業員個人のキャリアアップに幅広い可能性をもたらしている。住友商事ではさらにゲームエリア、カクテルパーティー、チームビルディング等の活動の場を設けており、上層部と従業員の関係における潤滑剤となるなど、住友商事内部の職場環境を決定づけている。もちろん日本企業内ではチームワークが一般的にとっても重視されている。ソニーや住友商事といった異なる企業においてもチームワークと企業文化の緊密な関係性がいずれも感じられた。同じチーム内の従業員らが皆共通の目標のために奮闘しており、1つの製品がお目見えするその背後にはチームメンバーらの心を1つにした努力があった。その他、ホテルニューオータニでは日本のサービス業の高度な専門化と礼節やおもてなしの精神を感じ、細やかなサービスからスタッフの態度まで、それらいずれもが日本民族の高い文化的素養を示していた。

2. 中日交流。日本企業の見学を通じて、私は中日両国のビジネス文化における共通点と相違点を強く感じた。中日両国には歴史、言語、社会慣習において大きな違いが存在するが、企業管理や協力の面では両国共に質、チームワークそして長期的戦略プランを重視している。今回見学した企業のいずれにも中国での勤務経験のある日本人が多数在籍していて、彼らとの交流を通じて私は、中日交流のプロセスには文化の違いにより誤解が生まれる状況が時折発生するが、こうした事態は逆に両国の企業の世界市場における協力を一定の度合で促進していると言える。例えば、現在ソニーと中国の協力は製品の販売のみならず、技術、イノベーションそして文化交流においてもより緊密

になっている。日本企業の細やかな管理と中国企業の柔軟性が融合することで、グローバル競争においても強い優位性を形成することが可能となる。また、近年の中国市場の急速な発展に伴い、多くの日本企業が中国との協力をより重視しており、相互の訪問や学習、中国支部の開設、中国事業担当部署の設立等を通じて、中国市場のニーズや消費者の変化について次第に理解を深めている。こうした交流は両国の経済発展を後押しするのみならず、両国の人々の文化的また社会的側面での相互理解も深めている。

大学名：北京師範大学

氏名：杜佩桐

## テーマ：2. 集団帰属意識の強さ

日本人の集団帰属意識の強さ：伝統と現代における変化

日本社会は長きにわたってその強い集団意識と集団主義文化を特徴としており、こうした文化は家庭や学校そして企業等の社会における様々な面に浸透している。伝統的な大家族であれ大企業の職場環境であれ、一般的に個人は自身のアイデンティティと行為を集団の目標や命運と結びつける。しかしながら、社会の現代化やグローバル化の進展及び若者世代の職業における自由や差別化といった追求に伴い、従来の集団意識が依然確固たるものとして存在しているか、又は集団主義が新たな時代背景においてどのように転換するのかについては研究に値する問題となっている。

日本の集団意識にはしっかりとした文化的基盤があり、その起源については封建社会の時代まで遡ることができる。家庭であれ職場であれ、集団主義文化は常に主導的地位を占めており、個人の行為と決定は常々集団の利益と目標の制約を受け、集団の共通認識や帰属意識は個人の生活において必要不可欠なものとなっている。日本では、家庭そのものが小さな「集団」であり、その中の各メンバーには明確な役割と責任がある。日本の教育システムでは幼い頃から「集団主義」が強調され、子ども達は学校において仲間と協力する、グループのルールを守る、個人を優先するのではなく集団の利益を重視するといった指導を受ける。教師や親もこうした集団文化の教育を通じて子ども達の社会的責任感や集団意識を育む。日本の企業文化においては集団意識が特に明確になっている。従来の「終身雇用」制度と「年功序列」制度は従業員と会社間の「家庭的」関係を推し進め、企業において従業員らのアイデンティティと帰属意識はとて強くなっている。日本の大企業は一般的にチームワーク及び会社と共に発展するとの理念を重視し、個人は往々にして自身の事業と会社の成功を切り離せないものとしている。こうした文化により企業は仕事をする場所であるのみならず、従業員の生活における中核部分となっている。

しかしながら、グローバル化、技術の進歩及び情報化が進むに伴い、従来の集団意識に対する若者世代の共通認識に変化が生まれている。特にインターネット業界、クリエイティブ産業等の分野では多くの若者がより差別化した自由なキャリアを追求し始め、従来の終身雇用制度や長期間の企業への忠誠というものは彼らが最優先するものではなくなくなっている。こうした変化は日本社会における集団意識に対する試練となっており、また集団意識の現代化や多様化を推し進めている。近年、若者は親の世代のように自身の生涯を1つの会社に捧げることがなくなるなど、職業における流動性が大きく高まっている。日本の調査データによると、より良い待遇や職場環境又は自身の興味に合う雇用機会を求めるために転職をする若者がますます増えている。とは言え、これは若者が集団意識を完全に放棄したことを意味するものではなく、新たな職場環境において彼らは依然としてチームと協力関係を構築することを望んでおり、ただこうした関係が単なる企業への忠誠ではなく柔軟性及び共同の価値観への賛同をより重視するものであるにすぎない。現代の若者はベンチャー分野において帰属意識を求める傾向がますます高まっている。従来の大企業と比べ、ベンチャー企業や小・中規模の企業は往々にしてより柔軟で、従業員が仕事においてより多くの個人的価値を示し、さらにチームと共により有意義な成果を創り出すことが可能である。こうした環境における集団意識は集団の

目標の実現と個人の発展の融合をより強調するものであり、従業員はより多くの自由度を享受すると同時に、チームへの強い帰属意識を感じるができる。

現代社会における変化は集団意識の従来の形式に変換をもたらしているが、それらは完全に消失したわけではない。反対に、集団意識は現代社会のニーズに適応するプロセスにおいて、個人と集団の目標とのバランスと相互作用を強調するといった新たな様相を呈している。新たな企業文化の出現に伴い、多くの企業が社会的責任及び集団的価値観を重視し始め、特にテクノロジー、環境保全、ソーシャルイノベーション等の業界では大量の若者を呼び込んでいる。これらの若者は集団主義を完全に拒絶したわけではなく、集団意識を社会的責任感やイノベーション精神等の要素と結びつけ、新たな集団における共通認識を形成していると言える。こうした企業において従業員は企業の目標に賛同するのみならず、企業が担う社会的責任をより重視しているため、彼らの集団意識は多元的意義を有している。従来の企業文化とは違い、現代の企業は従業員の自主性と創造性を重視しており、特にハイテク、クリエイティブ及びサービス業界において従業員個人の発展とチームワークは企業が成功する上での鍵となる。たとえ企業が個人の創造力と柔軟性を強調しても、従業員らは依然としてこうしたチームの中で帰属意識を見つけるのである。なぜなら協力と共同での取り組みがあつてこそ、より大きな目標の実現が可能になることを彼らは十分承知しているからである。

確固とした文化そして伝統である日本の集団意識は現代社会において顕著な変革を遂げている。若者世代の個人主義の観念と職業における自由への追求により、集団意識は従来の忠誠と犠牲からより柔軟で多様化した形式に転換している。とは言え、集団意識は消失したわけではなく、現代社会のニーズに適応するプロセスにおいて、段階的に変化すると共に新たな活力を生み出している。将来的に、従来の集団的な精神を守ると同時に個人の自由と多様化した発展をいかに促進するのが、日本社会及び企業文化の発展における重要な方向性になると思われる。集団意識の現代化は日本の社会や文化の発展における縮図であるのみならず、集団主義と個人主義の間の動的バランスをも示している。新たな時代背景の下、集団帰属意識は依然として日本の社会そして職場において軽視できない力であり、こうした力は今まさにたゆまぬ適応と変革を通じて、より柔軟で寛容な文化形態を形成している。

**大学名：北京師範大学**

**氏名：安懿**

**テーマ：3. マナーのよさと思いやり**

私は日本語を学ぶ過程において初めて日本人がマナーを非常に重視していることを知った。日本語における複雑な敬語体系は対象や場面の違いにより柔軟に変化するが、こうした特性は外国人学習者が特に難しく感じる点であり、たとえ日本人であっても常に気を付ける必要がある。今回実際に日本を訪れ大阪や京都そして東京等の地を巡り、企業や大学また文化施設について知見を深め、各界の、また年代の異なる人々と交流したことで、私は日本のマナーについて全面的且つ深い理解をすることができた。

日本の企業では上層部の人そして現場の従業員のいずれも非常に高いプロとしての素養や親近感を見せていた。彼らは私たちのことを社会に出たばかりで経験や知識の乏しい若者と見なすことはなく、終始真剣に、そして誠実な姿勢で私たちからの質問に丁寧に答えてくれた。こうした平等と尊重による交流方式により私は日本人の礼儀正しいスタイルを深く体感すると共に、私自身も同様の姿勢で他人と接したいと思うようになった。特筆すべきは、たとえ役職の高い従業員であってもエレベーターに乗る際は私たちが入りやすいように進んでドアを押さえてくれたことで、こうした細やかな気配りは中国ではあまり見かけないものであった。日本では、彼らは私たちをゲストと見なし非常に高い敬意をもって接してくれた。こうした品性の素晴らしさに私はとても感銘を受けた。

ホームステイでは日本の家庭生活におけるマナーを直に体験することができた。日本人は日頃から家族にも「ありがとう」、「おかげさまで」、「いってらっしゃい」、「いただきます」、「ごちそうさまでした」等の感謝や挨拶を伝える。

これらは一見簡単な言葉だが、彼らの他人への感謝との思考を育んでおり、また彼らを他人の困難に気付きやすくしている。こうした相互理解の精神は社会の安定と調和にとって極めて重要である。

ホテルやレストラン等の公共の場所ではまた頻繁に日本人と遭遇したが、彼らはエレベーターに乗る際は常に「すみません」との言葉を口にし、たとえ他人に迷惑をかけていなくてもその言葉で他人への尊重とお詫びの気持ちを伝えていた。その他、ホテルのスタッフそしてレストランのもてなしのいずれにおいても、彼らは常に心のこもった「こんにちは」との言葉で1人ひとりのゲストを迎え、ゲストが帰る際には「ありがとうございました」との言葉で見送っていた。こうした互いに挨拶をし合うとのマナーは、互いの尊重を表すのみならず、サービス業への差別視を効果的に減らすことにもつながる。また中島先生が以前言っていた「相手が見えなくなるまで手を振る」とのマナーは、それ以上に日本人のマナーへの追求における極みを表している。

当然、マナーを過度に求めた場合はマイナスの影響をもたらすかもしれないが、全体的に言えば、マナーは日本人の全体的な民度を高め、人と人の調和のとれた交流を促進しており、個人や他人ひいては社会全体にポジティブな影響をもたらしている。

**大学名：北京師範大学**

**氏名：楊宇軒**

## **テーマ：2. 集団帰属意識の強さ**

北京師範大学日本語学科の2年生である私は、今回幸いにも訪日代表団の一員として「走近日企・感受日本」の旅に参加することができた。今回の旅では多くの感想が得られたが、ここでは日本企業における従業員の帰属意識について述べたいと思う。島津製作所、みずほ銀行及び住友商事の見学を通じ私は日本人従業員の集団帰属意識を特に強く感じた。中国企業の従業員と企業が相容れない関係にあるのとは対照的に、日本企業の従業員と企業の絆は清らかな泉のようで、静かに私の心に流れ込み、日本の企業文化に対するまったく新しい認識を与えてくれた。

私たちが訪問した最初の企業は島津製作所で、その名前自体に創意と伝承が秘められた場所であった。島津製作所において私たちはノーベル化学賞受賞者である田中耕一氏の実験室を目にした。科学界におけるきらめく存在である同氏はスポットライトの下で名声を享受するのではなく、昔どおりに島津製作所の実験室での仕事に没頭している。そうした同氏の姿勢からは個人の栄誉を超越した帰属意識を感じた。それは科学研究事業への愛であり、またそれ以上に島津製作所という大きなファミリーへの深い感情である。こうした帰属意識こそが、島津製作所の発展に自身の力を捧げるべく同氏を研究の道において常に前進させていると言える。

住友商事、この聞いただけで無限の可能性が感じられる場所では、従業員1人ひとりが探検家のようで、彼らが住友商事について語る際、その言葉からはこの場所への愛と思いが感じられた。住友商事は才能を発揮する舞台を提供するのみならず、それ以上に夢を現実にする場所であり、住友商事において従業員は興味のある分野を見つけ常に開発そして探求するなど、自身と企業との結びつきと気持ちのつながりを感じることができる。住友商事において従業員は同僚である以上に家族であり、共に住友商事の輝かしい未来を描いている。こうした帰属意識により、彼らは手を携え共に課題に向き合い、より素晴らしい未来を創造している。

その次はみずほ銀行の見学であった。ここで私たちと交流をもった役員の方はすでに金融に携わってから30年以上と時代の証人のようであった。その顔には歳月の跡が残っていたが、瞳の中には仕事への無限の情熱と執着が宿っていた。私たちが彼に「みずほ銀行での長い年月において転職を考えたことがありますか」と訊ねたところ、彼からは「私は中国が好きで、ここでの仕事では中国について知見を深めることができます。今の自分の仕事が好きなので転職をする必要はありません」との回答があった。みずほ銀行の行員らが仕事について語る時に最もよく使っていたのは「面白い」、「楽しい」という言葉であった。この言葉自体は簡単なものだが、その背後には仕事への愛と尊

重及びみずほ銀行という大きなファミリーに対する帰属意識と誇りが秘められている。こうした帰属意識により、彼らは仕事において楽しさを見つけ、絶えず卓越性を追求するなど、みずほ銀行の着実な発展に貢献している。

特に印象に残っているのは、あるみずほ銀行の行員がしみじみと語った「私はここであまりにも多くの善意とサポートを受けたので、日本を離れたい」との言葉で、この短い言葉は無数の日本企業の従業員の心の声を述べているかもしれないと思った。彼らはこの土地に強い思い入れがあるのみならず、それ以上に自分が所属する企業や自身の事業に手放すことのできない感情を持っている。こうした帰属意識により、日本企業で働く1人ひとりがまるで心の拠り所を見つけたかのように、仕事において思い入れや価値を見つけることを可能にしている。

日本訪問を終え帰国した私の心には感慨が溢れている。日本企業の雰囲気の良いは進んだ管理制度や高い業務効率のみならず、骨の髄まで浸透したあの集団帰属意識に示されている。こうした帰属意識により、従業員と企業の間で言葉にできない呼吸の良さや力が形成され、企業の発展を共に後押ししている。またこうした帰属意識は日本の企業文化における要であり、グローバル競争において日本企業を不敗の地に立たせている要因の1つでもある。

私はこれこそが私たちの今回の日本訪問における最大の収穫かもしれないと思っている。将来的に私たちもまた自分らが好きな、愛する職場、そして自分自身の帰属意識が見つかることを願っている。それと同時に、より調和のとれた素晴らしい中国の企業文化構築のために共に努力そして貢献をしていきたいと思っている。

大学名：北京師範大学

氏名：李珂

テーマ：1. 国民性についての理解

3. マナーのよさと思いやり

4. 日中間の交流

日本の文化は古代中国を起源としているが、遣唐使による交流が終了した後、日本は茶道や仏教宗派、浮世絵等日本としての独自性を持つ文化を次第に形成した。高台寺において座禅や茶道を体験した際に、私は日本人の国民性における「1つの道に精通している」との点をより強く感じた。

人は思考もできれば呼吸もできるため、呼吸に集中することができる。長い時間呼吸に集中できれば、あらゆる事に集中することが可能になる。座禅が体現するこうした精神は日本の職人氣質の源なのかもしれない。京都の街を歩くと至る所で100年以上の歴史を持つ老舗を目にする。学術界において1つのテーマについて掘り下げて研究する人は、成功するまで何十年も研究を続けることができる。1つの企業が100年間止まることなく時代と足並みを揃え続けることができる。日本は国土が狭く、産物も乏しいことから、彼らはいかなる些細な物事も非常に大切にすると共に、そうした物事を掘り下げて研究する忍耐力を備えている。

正にあらゆる些細な物事について研究することが可能なため、こうした細やかさはまた日本人の人付き合いや物事と接する態度にも表れており、彼らは互いに相手の気持ちの些細な部分にも配慮することができる。たとえ他人の傍を通る時でも邪魔になることを恐れるため会釈をして謝る。電車では他人の休息の妨げにならないよう絶対に電話に出たり大声で話したりしない。それは家族内でも同じで、日本の子どもはとても聞き分けが良かった。そしてホームステイの際には、その理由が父母と子どもの間で平等な付き合い方をしているためであることを知った。子ども達は幼い頃から父母の穏やかな教育の下で生活することで自然と日本社会におけるマナーやルールを学んでいく。日本人は日頃から他人の立場で物事を考え、もし相手が不便さを感じていることを察知した場合はすぐにお詫びをする。「すみません」や「ごめんなさい」はおそらく使用頻度が最も高い言葉かもしれない。

私たちが訪問した5つの企業の社是はいずれも2つの共通性を示していた。1つは優位性維持の方法として人材の発掘を重視していて、もう1つは発展目標が特定の部分に制限されておらず、より幅広く視野を広げており、全人

類そして地球全体の未来を自らの責務としていた。中国と日本は隣国であると同時に世界でも上位 5 つに入る経済体の中の 2 つの主体であり、互いの協力関係は軽視できない。

現在の中日関係はアメリカという覇権主義国家の干渉により見通しが立たない状態になっている。歴史の視点から見ると、中国とアメリカはいずれも日本に対する大きな影響力を持っている。古代日本は中国から文化や政治制度等を学んでおり、それが数百年続く中で中国から伝わった仏教や茶道等の文化が日本人の国民性の中核的要素となった。しかし近代においては、黒船来航に伴い日本は明治維新を始めた他、戦後の日本はアメリカの管轄を受けアメリカ文化の影響の下で現在の流行文化「Cool Japan」を形成しており、日本の現在の漫画や音楽などはいずれもアメリカの影響を強く受けている。またそうした文化やその他様々な影響を受けた日本の若者はよりアメリカを好む傾向にある。

大使館の参事官からの紹介によると、現在中国を訪れる日本人はとても少ない一方で、日本の漫画やアニメ等の文化が中国に伝わっていることで多くの中国人観光客が日本を訪れている。東京の繁華街や渋谷、銀座、秋葉原の街は世界各地の人でごった返しており、その中には中国人も少なからずいた。「原神」といった中国で人気のゲームのポスターが秋葉原の街中に貼られていたが、こうしたゲームもまた日本文化の影響を強く受けており、「中国文化の特徴」を備えた部分が不足している。中国が必要としているのは、より若者を引きつけると同時に中国独自の特徴を持つ文化が日本に伝わることで、より大きなメディアにより私たちに対する日本人の見方を変えることだと思う。

こうした基盤の上で、中日両国の平和的発展にはさらに多くの国民による賛同が必要である。中日両国の間にはどのような過去があろうとも、私たちは将来的な世界の発展の流れを直視しなければならない。中日両国の友好的関係は人類全体そして世界全体に今まで以上に安定した発展をもたらすことができることに、中国そして日本人々が気付くことを願っている。

現在の中国と日本は蜜月期の到来を待っており、中日両国は経済や文化など各方面においてより大規模な協力を必要としている。両国により多くの活力をもたらす契機を、首を長くして待とうと思う。

**大学名： 对外経済貿易大学**

**氏 名： 汪婧儀**

**テーマ： 2. 集団帰属意識の強さ**

**3. マナーのよさと思いやり**

**6. 今後ますます中国でニーズが高まる技術**

今回の 8 日間の旅において、私は日本人の集団帰属意識を特に強く感じた。企業訪問では従業員らの発言を通して企業の精神や文化について知見を深めることができ、企業は従業員にとっての大きなファミリーのように感じた。その他、日本の友人らとの交流においても、彼らがスポーツチーム内の一員としてチームへの思い入れが非常に強いことを知り、彼らの「勝ち負け問わず、必ず共に戦う」との精神に私はとても感銘を受けた。こうした点はまた私たちがチームの一員として学ぶべき点である。

私が学校の日本文化関連の授業で学んだ内容や『菊と刀』で読んだ「日本人はルールを非常に良く守る」との点に示されるように、日本人は自律性が極めて高い。地下鉄を利用する際に左側通行のルールを守ることであれ、また日常の通勤において道路を横断する時に信号無視をする人がいないことであれ、それらいずれもがルールを守ることによってシステム全体が正常かつ効率的に動作し他人に迷惑をかけないとの日本人の配慮を表している。日本人はマナーにおいても非常に細やかであり、日常の会釈や挨拶、お辞儀等の 1 つひとつの言動は日本人の心の中に備わったマナーを表している。悠久の歴史を持つ礼儀を重んじる国として私たちは自国の優れたマナーを受け継いでいく必要があると思う。

ホテルニューオータニのエコ施設の見学では、排水の循環利用と生ごみの堆肥処理技術に驚かされた。技術スタッフからも、島国である日本は資源が乏しいことから、人々は「常に災害に備える」との意識を持っており、資源利用や環境保護については特に厳しく行われているとのお話があった。現在急速に発展している中国が「カーボンピークアウト」や「カーボンニュートラル」といった目標を完全に実現する上で、こうした資源の循環や廃棄物の処理による利用技術は今後ますますニーズが高まる技術になるかもしれない。

大学名：対外経済貿易大学

氏名：肖瑩盈

テーマ：5. アニメなどのソフトパワー

近年、日本のアニメは世界における影響力が日増しに高まるなど日本文化におけるソフトパワーの重要な担い手となっている。日本のアニメは独創的なストーリーを備えており、豊かな想像力の他、ストーリー展開に紆余曲折があり人を夢中にさせる。『ドラゴンボール』から『ナルト』さらには『進撃の巨人』まで、これらの作品はいずれもその独特なストーリーの魅力で無数のファンを惹きつけている。

また、日本のアニメはキャラクターが非常に個性的で一目見たら忘れられない存在であり、『ワンピース』のルフィや『スラムダンク』の桜木花道等のキャラクターは多くの人々の心の中で模範となっている。

さらに、日本のアニメは素晴らしい制作技術を備えており、画面や音響効果また特殊効果等の面でいずれも高いレベルに達するなど、視聴者に最高の視聴体験をもたらしている。『千と千尋の神隠し』や『君の名は。』等の作品の画面の美しさは人をうっとりさせるほどである。

そして最後に、日本のアニメは人々の心に広く受け入れられる価値観を備えており、こうした点も若者の支持を得ている重要な理由の1つとなっている。

日本のアニメ産業はすでに日本経済における重要な柱となっており、巨大な経済効果をもたらしている。またグッズやテーマパーク等のアニメ関連商品の開発はその経済効果をさらに高めている。日本のアニメはその独特な魅力で世界中のファンを惹きつけており、多くの国や地域においてアニメはすでに日本の代名詞となるなど、日本のナショナルイメージの向上に一役買っている。日本のアニメ作品には忍者、武士道、茶道等日本の伝統文化の要素が多く含まれており、アニメという担い手を通じて日本文化は世界中に広まっている。それと同時に、文化や言葉の垣根を越える交流方式であるアニメは、様々な国や地域との距離を縮めており、多くの国や地域の人々は日本のアニメの視聴を通じて日本に強い興味を持つ他、さらには国際交流の促進にもつながっている。

以上から、中国が文化におけるソフトパワーを高めるために必要な点については以下のものが挙げられる。1つめは自国の文化的リソースの開拓で、中国には5000年の歴史による豊かな文化的根底があり、私たちはそうした自国の文化的リソースをしっかりと開拓する必要がある。2つめはテクノロジーレベルの向上で、アニメを例にすると、アニメの制作過程において私たちは技術革新による作品の質の向上を重視する必要がある。3つめは市場の開拓と国際提携、4つめは知的財産権保護の強化、5つめは社会的便益と文化の宣伝の重視である。

大学名：対外経済貿易大学

氏名：馬莉姬

テーマ：2. 集団帰属意識の強さ

今回の日本訪問では日本人従業員との交流や彼らに対する観察を通じて、日本企業には中国企業と異なる部分が多く、私たちが学ぶべき優れた点が非常に多いと感じた。

日本企業の従業員は企業に対する共感や帰属意識がとて強く、従業員による企業紹介の際、彼らの語気からはいずれも誇りと幸福感が感じられた。中国には優れた人材が多いが、極度な内向き競争の環境そして企業の不合理な給与制度により、多くの人が中国を離れざるを得ない若しくは企業や仕事に大きな不満を持つとの状況につながっている。また中国企業における随時の解雇との問題は、従業員が帰属意識を持つことを困難にしている。

目下、中国における大企業の多くはインターネット企業だが、対して日本の大企業は製造業やサービス業等様々な分野にわたっている。こうした多様化した発展モデルは日本企業が市場の変化に直面した際のより柔軟な対応を可能にする。中国には日本の商社のようなタイプの企業は存在しない。中国経済は持続的に成長してはいるものの、多くの企業は世界市場の開拓に努めるなど国際化戦略を強化し、海外市場を開拓することで持続可能な発展を実現していく必要がある。日本に来る前に、日本の本土には日本があり、海外にも日本があるとの言葉を耳にしたことがある。これは、日本の海外におけるビジネスネットワークが非常に発達しているという意味である。中国の企業もまた互惠との原則を守りながら海外市場を積極的に開拓するなど、真に世界に進出することが求められる。

その他、日本企業は従業員の育成と成長を非常に重視している。日本企業は従業員の技能や素養を高め続けることでのみ企業としての競争力が維持できると確信しているため、従業員に対し様々な研修や講座及び機会を定期的に提供するなど従業員のため学習と成長を後押ししている。一方、中国企業はこうした面で未だ大きな改善の余地を残している。

また、日本企業は管理においても独自の特徴を持っている。日本企業はチームワークと意思疎通を重視しており、従業員同士のサポートや協力を奨励している。それと同時に、細部や品質管理も重視するなど完璧な勤務態度を追求している。こうした管理の理念や方法はいずれも中国企業が参考にすると共に学ぶべきものである。

ホテルニューオータニの見学では、日本企業の社会的責任感の高さを感じることができた。特に驚いたのは、日本企業の環境保護における基準が、国が企業に対し示している基準よりも厳しいことであった。中国が質の高い発展に向けた転換をしている現在、中国企業としてもこうした社会的責任の意識を確立し、あらゆる面で絶えず進歩を求める必要がある。

いずれにしても、今回の日本訪問では日本企業の従業員の共感、多様化した発展、育成や成長及び管理理念等の面での優位性を強く感じることができた。もし中国企業がこうした優れた点を参考にさらに改善し、自社の発展に応用できれば、きっと今まで以上に優れた成果を収めることができると確信している。

**大学名： 対外経済貿易大学**

**氏 名： 江嘉鏗**

**テーマ： 2. 集団帰属意識の強さ**

**3. マナーのよさと思いやり**

悠久の歴史と独自の文化を持つ国である日本の社会構造と人間関係は「集団意識」（集団帰属意識）やマナーの中に根付いている。今回の日本訪問以前に私は学校での授業において日本のマナー文化について一定の知識を得ていたが、「本の知識だけでは足りない部分があり、真に理解するには自ら実践する必要がある」との言葉通り、今回の日本訪問の旅を通して私は教科書には存在しない多くの知識を確かに学ぶことができた。集団と調和を非常に重視する日本の社会において、個人の行為や態度は往々にして全体的な環境の影響を受ける。そして全体はまた個人により構成される。そのため個人の視点から見て、日本人の集団帰属意識と他人へのマナーは私が日本の人文社会を研究する上で最もベースとなる、また最も重要な部分となっている。

日本において、集団意識は一種の強い集団帰属意識であり、それは日本社会の様々な面に浸透している。そして個人と集団の緊密な関係を強調するこうした集団意識により、人々は個人の利益と集団の利益を一体のものに見なしている。こうした集団意識は家庭や学校、企業等様々な分野に表れており、例えば私たちが初日に訪れた島津製作所では、従業員が自己紹介をする際に自分の名前の前に必ず「島津製作所〇〇部署の」とのフレーズを入れていた。また京都大学や一橋大学で交流した学生らも、まず初めに大学名、次いで学部名、最後に自分の名前の順で自己紹介していた。こうした習慣は日本人の集団帰属意識の表れであり、日本人は日頃から自分を集団の一部と見なし、個人の利益よりも集団の利益を重視する行動を心掛けている。ホストファミリーとおしゃべりした時にも、こうした集団意識の形成については日本の歴史や文化と密接な関係があることを知った。日本の伝統文化は調和と共存を強調している。日本の学校では子どもらに対し儒教における大同思想に似た教育をしており、学生らは幼い頃からクラスメイトと協力し、他人を尊重し、チームワークを育むとの教育を受けている。そのため、集団意識は社会の要求であるのみならず、日本人の個人の成長プロセスにおける重要な構成要素でもある。

日本では、マナーは人と人のコミュニケーションにおける懸け橋と見なされており、他人への尊重や配慮を表している。公式の場や日常生活を問わず、日本人は皆マナーにとっても気を遣っている。例えば人と会った際のお辞儀は一般的な挨拶の方法であり、お辞儀の角度や時間は相手側の地位や関係性によって決まる。こうした細やかなマナーは日本人の社会的地位や人間関係に対する高い感度を表している。その他、食卓でのマナーも同じく非常に重要で、食事の前に皆は両手を合わせて「いただきます」と言い、食事を終えた後は「ごちそうさまでした」と言う。これは食物への感謝であるのみならず、食事の準備をしてくれたことへの感謝でもある。また食事中に料理を分け合う、お互いにお酌をする等は一般的なマナーである。こうした行為は形式上のマナーである以上に他人への配慮であり、日本社会におけるマナー文化への重視度合を示している。今回の8日間の日本訪問では、バスの運転手やコンビニの店員また偶々遭遇した人などを問わず、日本の人々は皆、先にすみませんと言ってから丁寧な口調で私と意思疎通をしていて、私もそれに対し敬語で返答していた。日本のマナー文化は今回の旅においてとても印象的であり、私にとってはこのマナーの授業は必ず将来にも活かすことができるものであった。

日本社会における集団意識、マナーや他人への思いやりについての観察を通して、こうした要素は日本人の日常生活を構築していると共に彼らの人付き合いや社会活動にも影響を及ぼしていると感じた。グローバル化している今日、文化的差異は依然として存在しているが、日本人によるマナーや思いやりへの重視は私に多くの大変貴重な参考となる経験をもたらしてくれた。個人の成長を追求すると同時に、いかにより良く集団に溶け込み、他人を尊重し、調和を守るか、これらは将来的に私が中国社会において学びそして経験を積み、自身を向上させる上で絶えず考え実践すべき課題である。

**大学名： 对外経済貿易大学**

**氏名： 喬彬**

**テーマ： 5. アニメなどのソフトパワー**

#### 1. アニメ文化の幅広い浸透：秋葉原での見聞

秋葉原を散策する中で私は初めて二次元文化の魅力をはっきりと感ずることができた。この街はアニメ関連のポスター、ガレージキットそして様々な店で埋め尽くされ、多くの観光客で賑わい、活力に満ちていた。アニメは一種の娯楽であるのみならず、それ以上に日本という国の文化における独自のシンボルとなっている。『ドラえもん』における友情というテーマであれ、また『君の名は。』における感情の機微であれ、これらの作品は独自のストーリー展開と美しい画面で世界中の視聴者の心を虜にしている。秋葉原で私は、これらのアニメ作品がどのようにして多様で包括的なコミュニティを形成し、世界中から人々を引き寄せ、日本文化への愛を共有するのかを目の当たりにした。

アニメは「観る」という側面に留まらず、それ以上にその双方向性と没入感で人々の生活に影響を及ぼしている。二次元をテーマとしたゲームショップや喫茶店では、アニメと日常生活の融合を体験した。そのストーリーから関連グッズ、さらにはそこから派生する没入型体験まで、アニメ文化は完全な1つの連鎖を形成しており、日本の文化産業における創造力と経済的価値を示していた。

## 2. アニメ文化の背後にある精神力：企業の革新と努力

ソニー本社の見学において私はアニメ文化の背後にある精神力について知見を深めることができた。イノベーションで名を馳せる企業であるソニーは長年、アニメやゲームそして映画産業への技術支援を行っており、代表的な『ファイナルファンタジー』から『鬼滅の刃』といった映像制作まで、ソニーはこれらの作品に対し技術的な後押しをしている。

ソニーの従業員は若さや活力そして情熱を原動力としており、彼らの仕事への情熱に私はアニメ作者のモノづくり精神を連想した。無数の優れたアニメ作品の背後には作者のディテールへの追求や品質へのこだわりがある。この点から見た場合、アニメは一種の娯楽であるのみならず、それ以上に情熱と専門性が完全に融合した文化の表れであると言える。ソニーの従業員の仕事への姿勢からは、日本のアニメ文化の成功は、こうした創意や品質への強い尊重に起因することを知った。

今回の旅において私は、ソフトパワーの意義は単なる発信という部分ではなく、一種の対話の可能性を構築するという部分にあることが分かった。新時代の青年である私たちは、どのように「ストーリー」を述べるのかを日本のアニメから学ぶ必要があるだけでなく、それ以上に自身の文化的分野において同様に生命力や発信力を持つ作品をどのように生み出していくのかを模索していく必要がある。

大学名：中国石油大学

氏名：賀雨欣

## テーマ：2. 集団帰属意識の強さ

集団意識（又は集団帰属意識）は個人が集団において共感し溶け込みさらに集団との関わりを維持するとの一種の心理状態である。今回の日本訪問では異なる文化的背景や環境における集団意識の形成方法及び集団意識の個人や集団に対する意義について知見を深めることができた。

### 日本社会における集団帰属意識の体験

島津製作所や住友商事への訪問を通じて、私は日本企業の強い集団意識を感じる事ができた。島津製作所のKYOLABSでは意見交換により製品開発を後押ししている他、住友商事では包容力のある企業文化により様々な思考を取り入れることで、従業員が会社の発展の方向性と合った興味を見つける手助けをしているなど、彼らは従業員同士の意見交換を重視しているのみならず、分野の垣根を越えた協力も奨励していた。こうした従業員の「個性及び思考の統一」を重視するモデルは集団帰属意識の育成における日本企業の深い意図を非常に良く表している。

その他、日本における就職状況もまた印象的であった。学歴や専攻を問わず、企業は従業員が企業の価値観に賛同するかどうか、連携して助け合うことができるかどうかをより重視している。こうした個別化や帰属意識への重視は、従業員と企業の共生関係を促進するのみならず、集団意識をもより一層強化している。

### 集団における個人の帰属意識と役割

今回の訪日団の活動では、個人としての帰属意識もまた知らないうちに形成されていた。例えば、京都大学の学生との交流そして一橋大学での討論では、互いに相手方の文化や理念を学んだ他、チームワークにおける信頼と開放

の重要性を自覚することができた。Moriiさんと親交を深める中では、共通の目標（文化交流）を通じて形成される帰属意識は個人の文化的差異を遥かに上回ることを感じた。こうした目標によりもたらされる共通認識は集団における私自身の役割意識を強化した他、私自身としてもより積極的に集団に溶け込み責任を負うようになった。

#### 文化や環境の集団意識に対する影響

新幹線の精確な運行や高台寺の静まり返った環境の下での茶道体験からは、日本社会における秩序と文化的ディテールの集団意識に対する感化との影響を感じた。こうした環境において人は社会との関係がより密接になり、集団に対する個人としての賛同もより構築しやすくなる。例えば座禅や写経の際の様々なマナーの体験からは、日本人の秩序や儀式的な緊張感により集団における共通認識を形成する方法について知り、またこうした共通認識は同様に企業文化にも表れていた。

#### 国際交流における集団意識の重要性

日本人家庭との交流を通じ、私は文化交流の集団意識に対する促進作用についてより一層自覚することができた。東京のホストファミリーと一緒に金魚すくいをしたり、たこ焼きを作ったりする中で、私たちの間の文化的差異は消えてなくなり、異文化の気持ちのつながりが形成された。こうした家庭的な交流により私は、一方的ではなく交流により段階的に確立される帰属意識の重要性についてより深く理解することができた。

#### 中国の大学生への提言

今回の日本訪問での経験を通じて、私は中国の社会や企業では集団意識の育成が不十分だと感じた。例えば日本企業は従業員の長期的な成長と帰属意識を重視している一方で、中国企業は今現在の業績やパフォーマンスをより重視している。こうした違いに私は、集団意識の構築には目標や効率への重視の他、さらに個人と集団の気持ちのつながりや文化への共感が必要であることを自覚した。私たち大学生は将来のキャリアにおいて個人の目標と集団の利益を融合し、自身の努力により集団の中での帰属意識を見出すと同時に、集団に対し自身の価値を捧げる必要がある。

**大学名：中国石油大学**

**氏名：王毅竜**

#### **テーマ：3. マナーのよさと思いやり**

今回の奥深さと様々な要素に満ちた日本訪問の旅では、金融のきらびやかさと歴史の奥深さを体験した他、日常生活における細部では、日本人の国民性において最も感動的な風景である、あらゆる場面で見られるマナーや他人への細やかな配慮を目の当たりにし、それは春の小雨が静かに大地を潤すかのように私たちの心を育てていた。

「和」を思想とする日本では、その国民性における謙虚や尊重というものはマナーにおいて完全に表現されている。みずほ銀行の優秀な行員との対話やソニーでのテクノロジーへの探求を問わず、日本人のお辞儀や挨拶からはいずれも春風が顔をなでるような温もりと誠実さが感じられた。彼らが話に耳を傾ける姿勢は謙虚の芸術であり、彼らの回答時の言葉遣いは礼儀の詩であった。こうした礼儀の中で私たちは尊重されることの価値を感じた他、日本人の内面に対する修練へのたゆまぬ追求を目にすることができた。

またより感動的だったのは、日本人の他人への思いやりの細やかさが絹織物の絹糸のように強くても柔軟であったことである。ホテルのスタッフの笑顔でのサービスから街で遭遇した見知らぬ人の手助けまで、彼らは常に尋常ではない感度で他人の要望を察知し、行動でその思いやりを示す。これは言葉上の礼儀である以上に心の奥底での共鳴であ

り、気付かないうちに明りを灯し前方の道を照らしてくれる優しい心である。

こうしたマナーや思いやりは日本の「和」の文化そのものであり、その国民性において最もきらびやかな部分である。日本では「和」は崇高な価値観であるのみならず、それ以上に生活における哲学であり、謙虚を鎧、尊重を剣、思いやりを翼とし共に社会の調和を実現することを人々に教えている。こうした文化の薫陶により、傾聴に長け、理解力があり、また優しい心で他人を真摯に思いやるとの日本人独自の性格が形成されている。

またこうしたマナーや思いやりは中日交流における懸け橋にもなっており、両国の人々の心をより一層近づけている。毎回の踏み込んだ対話において私たちは互いの尊重と理解をベースとした深い友情を感じ、それは帯紐のように中日両国を密接に繋ぎ、将来的な協力における確かな土台を構築している。

微視的視点から見て、日本人の国民性の魅力は絵巻のようにゆっくりと展開されるもので、それは日本人の日常生活そのものであるのみならず、それ以上に彼らが世界や他人に向き合う際の姿勢の表れである。調和や温かみそして思いやりに満ちたこの土地において、私たちはよりリアルな、感動的な日本の姿を目の当たりにした。これから先、中日両国が手を取り合い、心を1つにして共にこれまで以上に輝かしい未来を構築していくことを願っている。

**大学名：中国石油大学**

**氏名：肖金雪**

#### **テーマ：4. 日中間の交流**

今回の日本訪問において、日中両国の交流は文化の交流や融合に表れているのみならず、互いの歴史、社会及び現代における発展理念に対する理解や尊重に根付いていることを知った。飛行機から見た日没の美しい風景から大阪のすき焼き、そして京都の老舗企業から温泉の静けさまで、これらからは両国の文化の融合と互いへの影響が感じられた。

初日の行程では日本文化の奥深さと細やかさを体感した。大阪のすき焼き店では伝統的な和風の夕食を堪能し、熱々のすき焼きは冷えた身体を温めてくれただけでなく、私自身としても日本人の食文化を直に体験することができた。私が以前中国において食べた日本料理とは異なり、ここのあらゆる料理からは日本人の食材へのこだわりと料理に関する伝統技法が感じられた。その後のホストファミリーとの交流においても、私たちは両国の食文化の違いについて語り合うなど互いに美食に対する知識と好みを紹介し合った。

また京都大学などで学術交流をする中で、私は学術界には同様に国境は存在しないと感じた。京都大学の友人らとの交流の際、私たちに共通する興味や目標というものは言葉や地域の隔たりを越えることができるということを実感できた。知識への探求であれ、また学術への追求であれ、中日両国の学者らは皆より良い未来のためにたゆまず努力している。私たちは教育理念や未来のテクノロジーについて心置きなく語り合い、互いに異なる角度から知恵を得るなど、一種の異文化思想の交流と融合を体感した。

今回の日本訪問では、日本の伝統と現代文化を直に体験したと同時に日中両国の歴史と文化についての知見をより深めることができた。食卓での交流であれ、また学術や企業といった分野での討論であれ、さらには禅の修行や温泉の体験といったものであれ、これらからは中日文化の様々な側面における深いつながりを感じる事ができた。こうした微視的な文化交流を通じて、両国の人々の理解や友情はきっと今回の旅のように、今後さらに広まりそして深まっていくと確信している。

日中両国の交流は正に今回の旅における様々な出来事のように、異なる時空や背景において行われているが、テクノロジーや教育さらには文化を問わず、相互の学習と尊重はすでにこの歴史のプロセスにおいて最も美しいものとなっている。

大学名：中国石油大学

氏名：林星翰

### テーマ：1. 国民性についての理解

今回の訪日団の活動はまるで心の洗礼のようで、日本及びその国民性について私自身としても新たな知見を得ることができた。その中で最も印象的だったのは、心温まる数々の瞬間そして日本人特有の感情の表現方法であった。ホームステイでは日本の人々の誠意と優しさを強く感じた。私がお菓子の「白い恋人」を買いたいと言ったところ、ホストファザーは苦勞を厭わず一日中私に付き添ってあちこち探し回ってくれた。この些細な願いのために昼食すらとらなかつたが、最終的に北海道関連のお店で見つけることができた。こうした諦めない気持ちと心遣いに私はとても感銘を受けた。彼の行動は私個人の要望を満たすことである以上に、日本の人々のおもてなしや喜んで手助けをするといった真の姿を示している。その他、日本人が感情を表現する上で独自の方法を持っていたこともとても印象深かった。私たちが良い仕事をした又は何か称賛に値することをした際、彼らは気持ちを抑えることなくいつも「すごい」等の言葉で褒めることで彼らの評価と激励の気持ちを表していた。こうしたポジティブな感情のフィードバックに私たちは異国の地で温もりと自信を感じただけでなく、それらはより日本文化における他人の業績への尊重と評価を体現していた。こうした感情的価値が満たされることで、私は日本人の人付き合いにおける細やかさと気遣いを強く感じた。彼らは他人の優れた点を発見し褒めることに長けており、誠実な称賛によりポジティブエネルギーを伝えることで、調和した前向きな社会の雰囲気を作り出している。こうした雰囲気は1人ひとりが称賛と激励の中で絶えず成長することを可能にする他、それ以上に社会全体の調和と進歩を後押ししている。今回の日本訪問を通じて、私は日本人の国民性における独自の部分についてこれまで以上に知見を深めることができた。日本の人々のおもてなしや喜んで手助けをするとの心、そして彼らの感情表現における細やかさと気遣いといったいずれからでも、私はこの国の温かみと魅力を感じることができた。こうした素晴らしい品性に私は日本に対して新たな認識が得られた他、さらに私自身これまで以上に開放的で寛容な心で様々な文化や人々を見ていくことを教わった。今後、これらの素晴らしい経験や理解を自身の生活に取り入れ、今まで以上に前向きな姿勢で人生における様々な試練に向き合っていきたいと思う。それと同時に、中日両国の人々が引き続き交流と協力を強化し、より調和した美しい世界を共に創っていただけることを願っている。

大学名：中国石油大学

氏名：陳依揚

### テーマ：5. アニメなどのソフトパワー

日本を訪れる以前に私はかつて、共に悠久の歴史と明確な文化的特徴を持つ東洋の国である中国と日本において、なぜ日本はその文化を世界的に広め、流行文化や伝統文化のいずれも西洋の国々にとっての東洋文化のシンボルとすることができているのか、という問題について考えたことがある。そうした中、今回日本を訪れた私はこの問題についておおよその自分なりの答えを得ることができた。まず流行文化に関して、確かに日本の流行文化の発展は当時の経済状況や世界情勢とも関係しているが、こうした文化的雰囲気が今日まで続いている要因としては、優秀な作品の他、それ以上に自由な雰囲気が挙げられる。日本では街を散策すると至る所でアニメのポスターを見かけ、池袋のアニメイトではアニメの関連グッズを買い求めるたくさんの親子の他、スーツを着た中年の人が自分の好きなグッズを手にも列に並んでいる様子も目にした。日本では、アニメは父母から好まれない趣味ではなく、主流文化の一部分となっている。人々はこうした気軽な、流行っている、あまり真面目ではないかもしれない文化に対し偏見がなく、アニメはこの土地で様々な形で隅々まで又は大きく発展するなど、アニメ文化の多様性を自然と高めている。確かにエン

ターテインメントがすべてを支配する時代において私たちには流行文化に対するある程度の手引きや制限が必要だが、十分な自由があつてこそ文化の活力を維持することができるという点についても私たちは同様に覚えておく必要がある。次に流行文化の背後にある伝統文化に関しては、中国としても大いに学ぶところがある。多くの若者の話を通じて私は、彼らがよくアニメの中で目にするとの理由で日本の特定の伝統文化に興味を持っていることを知った。世界的に見て、日本のアニメは日本文化の発信において偉大な功績がある。しかしアニメ作品自体には「こうした文化を広めたい」との目的性はなく、往々にして作者が特定の文化に思い入れがあり制作しているか或いは日常の場面に日本の風習に関する内容を盛り込んでいるにすぎない。今回の旅において私たちはまた、日本が未だに多くのお祭りや記念日等の風習の他、茶道や祭祀、花火大会といった人々に素晴らしい体験をもたらす遺産を残しており、それらはまた時代と共に進化し人々の日常生活に溶け込み、人々から愛されていることを知った。伝統文化が気軽に観られまた愛されてこそ、それらが自然と自国の流行芸術作品にも登場し、さらには世界にも広まるのである。中国としてはこの点に関し学ぶところが大いにあると言える。

大学名：北京語言大学

氏名：鄭小芳

テーマ：1. 国民性についての理解

3. マナーのよさと思いやり

4. 日中間の交流

今回の訪日活動の名称は「走近日企・感受日本」だが、今回の活動が終了して私はようやくこの名称の優れた総合性と簡潔性に気付いた。「走近日企」は私たちが日本の様々な有名企業を訪問することを介して、この経済大国における現在の企業の発展状況について知見を得ることを意味しており、「感受日本」は今回の活動が単に日本をざっと見て回って終わるというものではなく、メインの企業訪問以外にも大学訪問での交流、温泉や茶道等伝統文化の体験といったものを通じて、私たち訪日団一行が日本の経済や教育そして文化といった社会全般について可能な限り理解を深めることを意味している。そのため、今回の訪問は実際のところ様々な側面に及んでいて、私自身も毎日の訪問や学習において新たな感慨が湧いた。現在この8日間の行程を振り返り、個人的に最も感慨深いのは今回の訪日活動で改めて形成された私の日本人への認識である。

今回の活動において中華人民共和国駐日本国大使館を表敬訪問しそこで私が感想を述べた際にも言及したが、今回の日本訪問は私の日本への固定観念を打ち破るもので、私の中で今まで以上に全面的で立体的そして客観的な日本が改めて形作られた。日本語学科の3年生である私はこれまで日本の社会、文化そして経済に関する内容に触れたことがあり、さらに北京語言大学にはもとより多くの日本人留学生在籍していることから、風の便りなどを耳にする中で次第に日本への第一印象が形作られていった。私はこれまでずっと、日本人のほとんどは遠慮がちで他人との距離を取りたがり、他人との衝突を避けるために自分の心の中の本当の気持ちを押し殺していると思っていた。当時私はまた、日本人家庭では父親は威厳があり寡黙であるとのイメージがあったため、ホストファミリーと初めて対面する際にはとても緊張し、特にホストファザーの前で慌てふためき、自分が何か失礼なことを言うのではないかととてもひやひやしていた。だがそうした考えは大間違いであったとすぐにわかった。まず日本人家庭について述べると、ホームステイ体験の期間はわずか1日だったが、日本人家庭において父親は非常に子どもを愛していて、とても親しみやすく、子どもと何時間も一緒に遊んだりしていた。積極的に話題を見つけて盛り上げようとしていたホストマザーに比べれば彼らの口数自体は少ないが、それでも実際には黙々と気を配っていて、それらを言葉で表していないだけであった。ホストファミリーのご夫婦には9歳と7歳そして4歳の3人の娘さんがいた。ホストマザーが夕食の支度をしている間、ホストファザーは子どもらを連れて家の近所で「鬼ごっこ」をし、私も一緒に誘われた。私は娘さんたちと一緒に

遊び、ホストファザーは「鬼」に扮した際、4歳の娘さんに対しては毎回捕まることのないように敢えて手加減をし、速く走れる私に対しては全力で追いかけるなど、私自身日本の伝統的なゲームの楽しさを満喫することができた。ゲームを楽しむ中で私は子どもらの様子を観察していたが、こうしたゲームは実際のところ子供らにとっての日常であり、うわべを取り繕ったものではないと感じた。その後、他の団員のホストファミリーの状況についても聞いてみたが、他のホストファザーも同様であったと知り、これには思わず深い感銘を受けた。と言うのも、中国ではこのように子どもと一緒に遊ぶ、威張らない父親の姿をほとんど目にすることがない、或いは中国ではこのような父親は日本よりはるかに少ないからである。また似た事例として、京都大学や一橋大学の学生ら、そしてこの8日間でたまたま出会った日本の人々との交流において、私は彼らの心からの誠意と優しさは表面的に装うことのできないものだと感じた。この8日間で私が出会った人の数は日本人全体として見た場合はとても少ないかもしれないが、少なくとも日本人の国民性に対する私の従来の固定観念には確実に問題があったことは理解することができた。1つの国の社会や文化を自ら体験することなく、前もってそれらにレッテルを貼る行為は絶対にあってはならないことである。これ自体は簡単な道理で大多数の人が同意するものであるが、また大多数の人が犯しやすい間違いでもある。そのため、今回の活動を通じて自分自身に戒めを与えることができたことをとても嬉しく思っている。今後は日本又は他の国を問わず、或いは他人との付き合いや交流を問わず、そうした固定観念や誤解を取り払うよう常に自分を戒めたいと思う。

今回の訪日活動において私たちをサポートしてくれた中国及び日本側のすべての関係者にはとても感謝している。活動最終日、皆はきっと私と同じように名残惜しく、日本を離れたくなかったと思う。だがこれが最後の対面ではない。灰太狼（中国アニメのキャラクター）の「また必ず戻ってくる！」とのセリフをここで使う。

**大学名：北京語言大学**

**氏名：楊蘊涵**

### **テーマ：3. マナーのよさと思いやり**

今回の8日間の日本訪問を通じて、私は日本人のマナーのよさと他人への「配慮」を強く感じ、それらは「礼儀正しさ」そして「おもてなし」という2つの言葉で表すことができた。礼儀については主に日常生活の様々な面に表れていて、ホームステイ期間中における神社に入る際のお辞儀や手を洗うとの伝統についての理解から食事の前の「いただきます」との挨拶、そして贈り物をする、食事をする、部屋に入る、お茶を飲むなどの際の様々な礼儀まで、私は礼儀が存在する意義そして礼儀のこの国に対する影響について強く感じるすることができた。その他、私はまた日本のサービス業における「おもてなし」の姿勢やその根底を実感することができた。日本を訪れてから最も多く耳にしたのは「ありがとうございます」そして「すみません」との言葉で、場所を問わずあらゆる店の店員が正しい敬語そして温かい笑顔で接客をしていて、私はそうした接客を受ける中で非常に大きな心の満足を得られた。ここで2つの事例を挙げたいと思う。1つめは、ある晩に私が地図を持ちながらローソンで道を尋ねた際、私はその店で何も買っておらず、またその意図もなかったにもかかわらず、店員のお兄さんは簡単な説明で終わらせることなく、制服を脱ぎ、少しの間職場を離れると仲間に伝え、とても親切に私を目的地まで連れて行ってくれた。これにはとても驚かされた。そして2つめは、ホテルニューオータニ東京において、一部の客室にルームキーによる電源システムがない理由を団員が尋ねた際、これはゲストへの配慮からくるものであり、ホテルとしては冬場や夏場においてゲストが客室に戻る前に空調が作動していることでゲストが客室に戻ってすぐに快適な室温を楽しめるようにしたい。さらにホテルでは独自に給電システムを設けており、それによりホテルの正常な運営を保証するなどゲストが停電の影響を受けないようにしているとの説明がホテルの担当者からあったことである。こうしたサービス意識は私自身これまでほとんど実感したことがなかったものであった。私はもし中国のサービス業が日本のこうした礼儀やマナーそしてサービス精神を学ぶことができれば、今まで以上に発展できるかもしれないと思った。

大学名：北京語言大学

氏名：李浩楊

- テーマ：1. 国民性についての理解  
2. 集団帰属意識の強さ  
3. マナーのよさと思いやり

終了間もない第27回「走近日企・感受日本」の活動において、北京語言大学の代表者の1人として私は日本の文化や社会を深く体験でき、大きな感銘を受けた。今回の活動において私は日本企業のプロ意識を目の当たりにした他、日本人のサービス精神、国民性そして集団意識について強く感じる事ができた。

まず日本に到着した当日、全日空の乗務員から空港のスタッフまであらゆる細かな部分からは日本人の行き届いたサービスの素晴らしさが感じられた。こうしたサービス精神は今回の行程全体にわたって感じられ、交通機関であれまた様々なサービススタッフとの交流であれ、いずれも私は強い感銘を受けた。

島津製作所や京都大学の見学では、日本企業及び学術機関のレベルの高さについて知見を得ることができた。島津製作所は技術開発において卓越した実績があるのみならず、その「科学技術で社会に貢献する」との経営理念及び環境への配慮もまた印象的であった。京都大学の学生らの誠実かつ友好的な姿勢からは、日本の教育独自の魅力を知ることができた。

また茶道や座禅などの伝統文化活動を体験した私は、日本文化における細部や儀式的な緊張感への重視を強く感じた。これらは形式上の美しさであるのみならず、それ以上に客人に対する尊重と工夫の表れである。

ホームステイでは、日本の一般家庭の優しさや誠意を感じた。また神保町の書店や秋葉原では、日本人の書籍や文化への愛そして生活における細部へのこだわりを直に体験することができた。

住友商事やみずほ銀行そしてソニー等の企業の見学においては、これらの企業の世界的な影響力や進んだ理念について知見を深めることができた。特にソニーでは日本のソフトパワーを強く感じた。これらの企業はテクノロジーやビジネスにおいて他をリードしているのみならず、それ以上に文化の発信やイノベーションにおいて非常に大きな役割を果たしている。

今回の訪日活動において私は日本人の国民性、サービス意識等について深く理解することができた。こうした経験は私の知識をより豊かにしたのみならず、視野も広げてくれた。これらの見聞や体験は今後の私の学習やキャリアプランに大きな影響をもたらすと確信している。日本人の緻密さ、誠意そしてイノベーション精神のいずれも、私たちが手本とすべき、また学ぶべきものである。

大学名：北京語言大学

氏名：金百川

- テーマ：3. マナーのよさと思いやり

古来より、中国は儒家思想の薫陶を強く受けており、人付き合いにおける礼儀やマナー及び内部と外部を区別するとの原則を重視している。しかしながら現代社会に入り、戦争や変革等様々な要素の影響を受けたことにより、中国の礼儀やマナーに対する重視の度合は次第に弱まっているが、それでも依然として基本的な礼儀をもって他人と接するとの伝統文化を守っている。

私たちが今回訪れた日本は同様に大化の改新の後に中国の儒家思想の影響を強く受けたが、中国と異なるのは、現代の日本は礼儀やマナーに対してよりこだわりを持っているという点である。今回日本を訪れる以前から私は、

日本では職場においては上下関係が重視され、外部では尊重と礼儀が重視されるという話を耳にしたことがあった。日本語に敬語や謙譲語が存在しているという点は、彼らの礼儀やマナーへの重視度合をはっきりと示していた。私はかつて日本人の友人から、たとえレストランのスタッフでも、料理を運んだりお皿を下げたりする際にお客さんに対し正しい敬語を使えなければ叱られるとの話を聞いたことがある。今回実際に日本において高級な西洋レストランから伝統的な日本料理店、お寿司のチェーン店から路上の屋台まで様々な食堂を訪れたが、それらは誠意や優雅さ、また堅苦しさなどの特徴をそれぞれ持っていたが、少なくとも言葉遣いは皆しっかりとした敬語で、とても丁寧であった。

言葉の面以外にも、日本人の礼儀やマナーは彼らが他人の気持ちにとっても配慮し、他人に迷惑をかけたり他人に不快な思いをさせたりするのを嫌がるのと点にも示されている。例えば飛行機又は電車内のアナウンスにおいては必ず、他人に迷惑をかけないようにスマホをマナーモードに設定してくださいとの注意喚起がされる。エレベーター又は電車の乗り降りの際は片側を空けて人が通れるようにする。地下鉄では、乗客が多い場合は意識的に鞆を背負うのを止めて手前側に持ってきて、さらに自分が降りやすいからとドア付近に留まることなく自発的に車両の奥に進むなどがある。私はさらに日本人の有給休暇の利用率がわずか50%ほどで、それは彼らが同僚やクライアントに迷惑をかけたくないからとの理由であることをホストファミリーから聞いた。その他にもたくさんの部分で日本のマナー文化が示されている。例えば他人が自分のために何かをしてくれた時（道を譲ったなどの時）、彼らは会釈で感謝を伝え、不注意で他人の道を塞いでしまった場合も会釈でお詫びをする。これらについては日本に来る以前から耳にしていたが、実際に日本を訪れこうしたマナーを体験するとやはりとても心地良かった。こうしたマナーについては過度のもので疲れるという人もいるが、私は他人に丁寧に接するこのような文化的習慣がとても好きで、日本で生活すればすぐにこうした礼儀と譲り合いの世界に溶け込むことができる。彼ら自身も注意深くこうしたマナーを守りそして実践しているわけではなく、皆がこうにするとの社会的雰囲気の下では、人は知らないうちにそれを真似るのである。今回私も多くの日本人に尋ねたが、外から見て不思議に感じる日本のマナー習慣は皆、無意識に守っているとのことであった。

日本のように礼儀やマナーを極める国は自然と限られ、私は日本においてこうしたルールや風習を守る、互いに礼儀をもって接するとの雰囲気を享受したが、これらは実際には人と人が互いに尊重し合う、社会文明が高度に発展しているとの基盤の上で成り立っている。国は皆それぞれ独自の特色があってよく、必ずしも日本のように極めなければならぬというわけではないが、基本的な相互尊重や比較的高い教育レベルは必要である。現在、中国はそうした方向に向かっており、上海等大都市のほとんどの場所ではすでに、人々が意識的にルールを守る、他人を優先する、他人に迷惑をかけないとの雰囲気や習慣を目にすることができる。これは中国における教育の現代化に伴う段階的成果であると言える。私はかつて、日本のように高度に文明化した社会は活力と人文的風情に欠け、停滞しているように見えるとの観点について耳にしたことがあるが、私自身の体験を基に言えば、そうした観点については賛同できない。反対に私は、日本の人々は礼儀やマナーを通じて他人との間で一種の快適な距離感と信頼感を守っており、これらはいずれも私たちが学ぶべき点であると思っている。それと同時に、私たちの地域における文明や文化もまた次第に、着実に進歩していると言える。

**大学名：北京語言大学**

**氏名：楊思思**

**テーマ：3. マナーのよさと思いやり**

#### **4. 日中間の交流**

日本での8日間の旅において私たちは日本文化の真髄、特にその礼儀や人との接し方について深く探求することができた。今回の旅では中日両国の文化的差異について観察する上での貴重な視点が得られただけでなく、それ以上に日本文化の独特の魅力を体験することができた。

日本のマナー文化は生活のあらゆる部分に浸透している。日本人がゲストをもてなす際に示す礼儀や周到さは、

表向きのマナーではなく、心からの尊重と他人への配慮からくるものである。企業訪問そしてホストファミリーとの交流のいずれにおいても、私たちはこうした文化の力を感じることができた。私のホストマザーは、優しい笑顔と心のこもったおもてなしで家庭の暖かみを感じさせてくれた。彼女のおかげで私は日本の伝統的な美食の他、日本における日常生活を体験することができ、こうした親しみ深く分かりやすい交流を通じて日本文化に対しより知見を深めることができた。

日本での交流において、日本の人々はコミュニケーションの際に言葉そのもの以外の表現をより重視していることに私は気が付いた。彼らは穏やかな語気や礼儀正しい言動の他、注意深く相手の話を聞くことにより、相手方への尊重と理解を伝える。こうしたコミュニケーション方法は感情があまり現れないものではあるが、強く人の心を打つものであり、一種の無音の共鳴を形成する。対して私たちの交流方法はより直接的そして開放的であるため異文化交流において時に誤解をすることもあるが、たゆまぬ交流と学習により、私たちは次第にこのような細やかなコミュニケーションの方法を理解し認めることができる。

その他、日本の人々の公共の場でのマナーもまたとても印象的だった。サービスを提供する際の彼らの丁寧さや礼儀及び歩行者に注意喚起をする際の穏やかな声色などのいずれも、日本社会における他人への深い配慮が反映されていた。こうした文化的背景の下では、個人の行為は往々にして他人に迷惑をかけないために抑制そして自制したものとなる。このように日本社会における集団主義の傾向が体现されていた。

それと同時に、中日両国の経済、文化、教育及び観光等多くの面での交流や相互作用についても知見を得ることができた。こうした交流は両国の人々の相互理解を増進しているのみならず、双方の提携や発展における確かな基盤をもたらしている。経済の面では中日両国の交流及び協力の歴史は長く、特に1972年の中日国交正常化後、政治、経済、文化教育、テクノロジー等の面での両国の交流は増え続けている。世界的な経済大国である日本の経済の発展は自国の文化と密接な関係があり、中国は近年における急速な発展により世界における重要な経済体となっている。両国の経済分野における協力は、各自の発展を促進しているのみならず、地域経済ひいては世界経済の安定と成長にも貢献するものである。

文化交流の面では、中日両国は地理的に近く、言語的にも相通じ、歴史上の密接な交流は両国の文化交流に確かな基盤を構築している。古代日本による遣唐使の派遣から、現代における学术交流そして知識共同体の確立まで、文化面での両国の交流はますます深まっている。また日本文化の中国における普及度合は新たな次元に達しており、特に日本の流行文化は中国において広く受け入れられているなど、文化交流の活発性を示している。

教育交流は中日両国の人文交流における重要な構成要素である。学術研究、学生の相互訪問、語学学習等の分野における両国の協力は強化を続けており、例えば中国における日本研究に関しては、環境法から金融学、文学から歴史といった幅広い分野を網羅するなど、学术交流の深さと広さを反映している。こうした交流は学術の発展を後押しするのみならず、両国の若者世代の相互理解と友好の基盤を打ち立てるものでもある。

観光交流は中日文化交流における重要な手段である。社会や経済の発展及び生活レベルの向上に伴い、観光はすでに両国の人々の相互理解と相互交流における重要な方法となっている。中日両国は互いに重要な旅行目的地であり、観光業の発展は文化交流を後押ししている他、関連産業の繁栄ももたらしている。旅行を通じて両国の人々は相手方のライフスタイルや社会風習を直接体験することができるなど、相互の理解や尊重の増進につながっている。

これらの交流からは、中日両国には歴史、文化、社会等の面で違いが存在しているものの、相互の尊重、学習そして協力を通じて両国は地域ひいては世界の平和と発展を共に後押しすることができるということが分かる。今回の旅では日本の自然や美しい風景そして進んだテクノロジーについて知ることができた他、それ以上に日本の文化や風土、特にマナーや人との接し方について知見を深めることができた。中日両国の文化には違いが存在するが、相互の理解や尊重の増進により、私たちは文化の壁を越えて今まで以上に調和した関係を構築することができるとの点を今回の経験を通じて改めて認識した。今回の日本訪問の旅は、私たちの異文化交流能力の向上そして世界的視野の拡大において間違いなく貴重な経験と教えをもたらしたと言える。

## 視察・交流先、行事



関西国際空港: 入国手続きを終えた一行はバスに向かってスーツケースをひいて移動。2列目中央が趙団長。



バス: ホテルへ移動するバスの中では、随行員による日本滞在中の注意事項の説明に続いて、学生全員が自己紹介。



島津製作所本社: サイエンスプラザで鄒様(右端)が1875年に創業して以来の同社の歩みや事業内容を説明。



質疑応答では学生たちから専攻に関連した質問が続き、木戸副室長(左端)が丁寧に答えられた。



京都大学: 百周年時計台記念館を背景に、出迎いの学生や職員の皆様と一緒に記念撮影。



京都大学: グループに分かれて学生の案内でキャンパス内の図書館や吉田寮などを見学。



京都大学:中国側の各大学の専攻に合わせたテーマをディスカッション。日本側からは約30名の学生が参加。



座禅体験:和尚から「呼吸に集中する」といった説明を受けたあと、座禅を組んで鐘の合図と共に瞑想した。



茶道体験:お点前体験ではいち早く挙手した学生三人が茶を点て、団員が味わった。



箱根湯本温泉:全員浴衣に着替えて懇親会を開催。大学ごとに出し物を披露し、最後に舞台上で記念に一枚。



ホテルニューオータニ:排水浄化設備や生ごみ堆肥化プラントなど敷地内のエコシステムを見学。



ホテルニューオータニ:エコシステムを見学後、庭園の滝の前で記念撮影。



中国大使館：各大学代表者が企業訪問やホームステイを通して感じたことを郭参事官に伝えた。



中国大使館：郭参事官(2列目中央)・馮書記官(2列目右から4番目)を中心に本館玄関前で記念撮影。



住友商事：本店ビル26階にて中国での業務経験を持つ社員による仕事内容の紹介を聞いた。



住友商事：学生に向けて同社の17世紀まで遡る歴史や「住友の事業精神」に基づく経営理念や行動指針を説明。



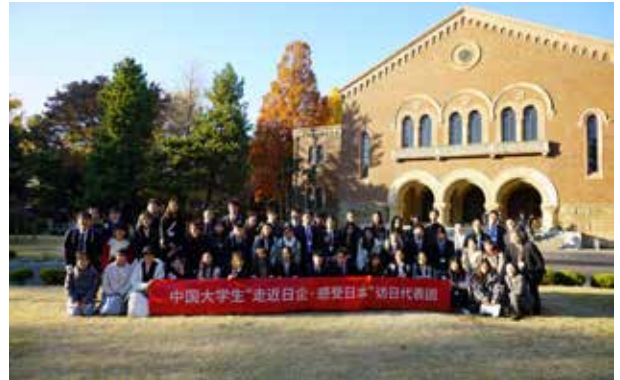
みずほ銀行：中国営業推進部の手嶋執行理事が、中国駐在経験を踏まえてキャリアデザインについて講義された。



みずほ銀行：講義に続き、学生の日本での就業や生活に関する質問に中国にルーツを持つ社員が答えられた。



日比谷松本楼:二階の宴会室にて孫文と梅屋庄吉の関係を紹介するビデオを視聴。



一橋大学:学生約20名と職員の方々に迎えられたあと、兼松講堂前にて記念撮影。



一橋大学:日中合わせて約50名の学生が5グループに分かれ、硬軟取り混ぜた幅広いテーマを話し合った。



一橋大学:全員が大会議室に戻り、中国側の各大学代表者がこれまでの日本滞在と本日の話し合いの成果を発表。



ソニー:中国総代表室の馬シニアマネージャーが会社概要や所有IP資産などを紹介された。



ソニー:ソニーエンタテインメントに所属する中国人社員2名が実際の仕事内容を話された。



歓送会:ホストファミリーや訪問企業関係者の皆様と最後の記念撮影。

## ホームステイ



ホームステイ: 幼い子どもたちと遊んだり食事をしたり、日本の家庭の週末の夜を体験。



浅草寺: 仲見世通りの賑わいを見物した後にそろって記念撮影。



ホームステイ: お子さんの誕生日ということで土曜の夕食はおばあさまも一緒にいただいた。



お台場: フジテレビ本社ビルの展望台から東京湾の眺めを楽しんだ。



寿司店: 醤油のつけ方を教えてもらいながら、切り分けられたばかりのマグロなど多彩な寿司を満喫。



ホームステイ: ホストファミリーの手料理に学生が腕を振った一品を加えてホームパーティー。